

久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅸ

二本木遺跡 (第13次)

赤司定格遺跡 (第1次)

北山古墳群 (第3次)

夫婦木古墳群 (第1次)

京隈侍屋敷遺跡 (第8次)

平成19年(2007)8月

久留米市教育委員会

久留米市埋藏文化財調査集報Ⅸ

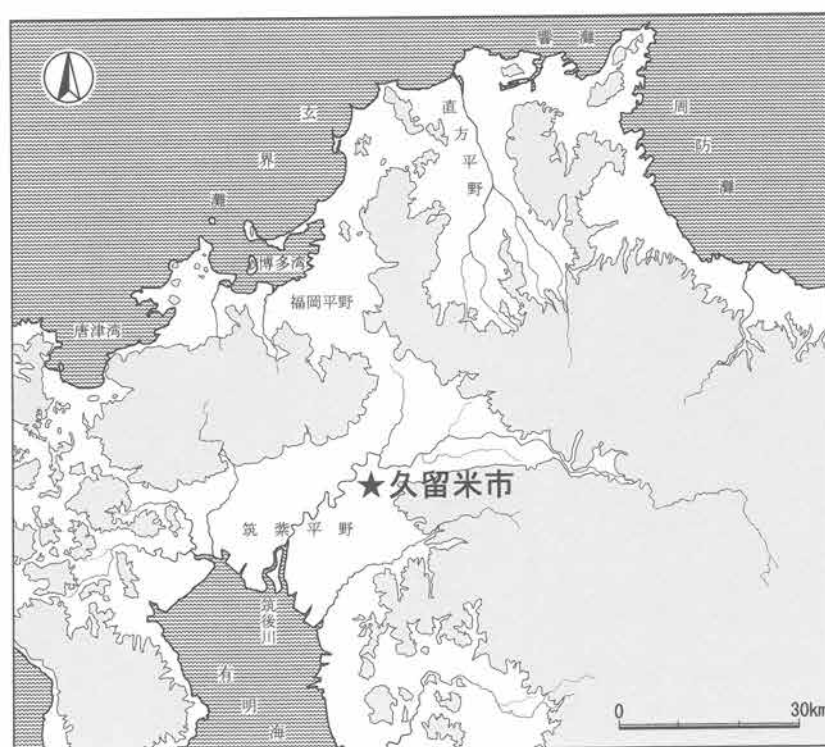
二本木遺跡 (第13次)

赤司定格遺跡 (第1次)

北山古墳群 (第3次)

夫婦木古墳群 (第1次)

京隈侍屋敷遺跡 (第8次)



序

筑後平野の中心に位置する久留米市は、豊かな水と緑に囲まれ、古来より生活環境に恵まれてきました。この環境のもと、先人達は多くの文化を創造し、市内各地には貴重な文化財が数多く存在しています。

特に、現在にいたる久留米市の発展の礎となった、古代の行政機関である筑後国府跡や、文化・宗教の象徴としての筑後国分寺・国分尼寺が奈良～平安時代に置かれ、筑後地方の行政・文化・経済・交通の要衝として発展してきました。さらに、近世においても久留米城が築城され、久留米藩の成立に伴い周囲には城下町が整備されました。この城下町は現在の市街地として発展を遂げ、町割りや町名にその痕跡が残っています。

この他にも市内には多くの文化財が存在していますが、地下に眠る埋蔵文化財は、毎年、開発の代償として次々に姿を消す運命にあります。本市教育委員会では、この失われていく遺跡を後世に伝えるため、発掘調査という記録保存を実施しております。

本書は、平成9年度から本年度にかけて発掘調査が行われた遺跡の中で、諸般の事情により調査成果を速やかに公表できなかった遺跡などの調査成果を収録しています。本報告書の発行によって、久留米の歴史を解明する一資料になるとともに、文化財愛護思想の理解と普及に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました地権者の方々をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年8月31日

久留米市教育委員会
教育長 石川 集 充

例 言

1. 本書は、平成9年度から平成19年度にかけて実施した発掘調査のうち、諸般の事情で未報告となっていた調査成果を収録した発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、久留米市教育委員会が主体となり、文化財保護課の本田岳秋・白木守・小澤太郎・熊代昌之が担当した。各遺跡の調査担当者は下記の通りである。

遺跡名（調査回数）	調査担当者	略記号	調査番号
二本木遺跡（第13次）	白木	NHG	199737
赤司定格遺跡（第1次）	本田	AJG	200523
北山古墳群（第3次）	熊代	KYV	200612
夫婦木古墳群（第1次）	熊代	MTV	200626
京隈侍屋敷遺跡（第8次）	小澤	LKG	200706

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、各調査担当者の他、今村美津子・塚本明美・森啓恵・與賀田佐代子が行った。また、遺物実測・拓本・製図は各担当者と、非常勤職員の畠中和子・原田志保が行った。
4. 空中写真を除く遺構写真は各調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は撮影機材トヨビュー45GⅡを使用し、白黒フィルムT-MAX100（6×9判）を用いて、久留米市埋蔵文化財センター等において各調査担当者と山浦浩子（前任）が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は赤司定格遺跡以外は国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成し、二本木遺跡は日本測地系、北山古墳群・夫婦木古墳群・京隈侍屋敷遺跡は世界測地系を用いた。図面の方位は赤司定格遺跡は磁北、他は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構表記は、下記のとおりである。

SD……溝、SE……井戸、SK……土坑、SP……ピット、SX……その他の遺構

7. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

法量の単位はcmである。（ ）内の数値は現存値または復元値を示す。

色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1997年版）による。

登録番号とは、久留米市文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

（例）200612 - 000001

調査番号 登録番号

8. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
9. 本書の執筆は主に各調査担当者が行い、文責は本文目次及び文末に記した。全体の編集は白木が担当した。

本文目次

I. 調査の経過	(白木) 1
1. はじめに	1
2. 調査の体制	1
II. 二本木遺跡 (第13次調査)	(白木) 3
1. はじめに	3
2. 位置と環境	4
3. 調査の記録	5
4. まとめ	15
III. 赤司定格遺跡 (第1次調査)	(本田) 19
1. はじめに	19
2. 位置と環境	19
3. 調査の記録	21
4. まとめ	25
IV. 北山古墳群 (第3次調査)	(熊代・原田) 27
1. はじめに	27
2. 位置と環境	27
3. 調査の記録	30
4. まとめ	35
V. 夫婦木古墳群 (第1次調査)	(熊代・原田) 38
1. はじめに	38
2. 位置と環境	39
3. 調査の記録	40
4. まとめ	44
VI. 京隈侍屋敷遺跡 (第8次調査)	(小澤) 45
1. はじめに	45
2. 位置と環境	46
3. 調査の記録	47
4. まとめ	51
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

I. 調査の経過

第1図 本書掲載遺跡位置図 (1/100,000) 【作成：白木】	2
-----------------------------------	---

II. 二本木遺跡 (第13次調査)

第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) 【作成：白木】	3
第3図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000) 【作成：白木】	5
第4図 二本木遺跡第13次調査遺構配置図 (1/100) 【製図：白木】	6
第5図 S D 15・20・50断面図 (1/40) 【製図：白木】	7
第6図 S K 30・35・40・45・60実測図 (1/40) 【製図：白木】	8
第7図 S K 55・65・70・75実測図 (1/40) 【製図：白木】	10
第8図 二本木遺跡第13次調査出土遺物実測図① (1/4, 20・21は1/2) 【製図：白木】	11
第9図 二本木遺跡第13次調査出土遺物実測図② (1/4) 【製図：白木】	12
第10図 二本木遺跡第13次調査遺構番号図 (1/100) 【製図：白木】	18

III. 赤司定格遺跡 (第1次調査)

第11図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/5,000) 【作成：白木】	19
第12図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000) 【作成：白木】	20
第13図 赤司定格遺跡第1次調査遺構配置図 (1/100) 【製図：原田】	21
第14図 S D 2・3・4土層図 (1/40) 【製図：原田】	22
第15図 赤司定格遺跡第1次調査出土遺物実測図① (1/4) 【製図：原田】	24
第16図 赤司定格遺跡第1次調査出土遺物実測図② (1/4) 【製図：原田】	25

IV. 北山古墳群 (第3次調査)

第17図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000) 【作成：原田】	28
第18図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) 【作成：原田】	28
第19図 北山8号墳墳丘測量図 (1/100) 【製図：原田】	29
第20図 北山8号墳西半部土層断面図 (1/40) 【製図：原田】	30
第21図 北山8号墳第1床面および第2床面遺構実測図 (1/40) 【製図：原田】	31
第22図 北山8号墳再構築石室実測図 (1/40) 【製図：原田】	32
第23図 北山8号墳初期石室実測図 (1/40) 【製図：原田】	33
第24図 北山8号墳石室変遷図 (1/60) 【製図：原田】	34
第25図 北山8号墳出土遺物実測図 (1/2, 1/4) 【製図：原田】	36

V. 夫婦木古墳群 (第1次調査)

第26図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000) 【デジタルトレース：熊代】	38
第27図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) 【作成：熊代】	39
第28図 夫婦木1号墳墳丘測量図 (1/200) 【製図：原田】	40

第29図	夫婦木1号墳墳丘断面図 (1/60) 【製図：原田】	41
第30図	夫婦木1号墳主体部実測図 (1/40) 【製図：原田】	42
第31図	夫婦木1号墳出土遺物実測図 (1/2, 1/4) 【製図：原田】	43
VI. 京隈侍屋敷遺跡 (第8次調査)		
第32図	調査地点の位置と周辺地形図 (1/2, 500) 【デジタルトレース：小澤】	45
第33図	周辺の遺跡分布図 (1/25, 000) 【デジタルトレース：小澤】	46
第34図	京隈侍屋敷遺跡第8次調査区平面図 (1/200) 【デジタルトレース：小澤】	47
第35図	本調査区北西部分平面図 (1/30) 【デジタルトレース：小澤】	49
第36図	本調査区北西部分西壁土層図 (1/40) 【デジタルトレース：小澤】	50
第37図	京隈侍屋敷遺跡第8次調査出土遺物実測図 (1/2) 【製図：小澤】	53

表 目 次

II. 二本木遺跡 (第13次調査)

第1表	二本木遺跡第13次調査出土遺物観察表 (1)	13
第2表	二本木遺跡第13次調査出土遺物観察表 (2)	14
第3表	二本木遺跡第13次調査出土遺物一覧表 (1)	16
第4表	二本木遺跡第13次調査出土遺物一覧表 (2)	17

III. 赤司定格遺跡 (第1次調査)

第5表	赤司定格遺跡第1次調査出土遺物観察表	26
-----	--------------------	----

IV. 北山古墳群 (第3次調査)

第6表	北山8号墳出土遺物観察表	37
-----	--------------	----

V. 夫婦木古墳群 (第1次調査)

第7表	夫婦木1号墳出土遺物観察表	44
-----	---------------	----

図 版 目 次

II. 二本木遺跡 (第13次調査)

図版1	(1) 二本木遺跡第13次調査区全景 (北西から)
	(2) 二本木遺跡第13次調査区全景 (南東から)
	(3) 調査区から高良山を望む (北西から)

図版2	(1) S D50土層断面 (南東から)
	(2) S K35完掘状況 (東から)
	(3) S K40土層断面 (東から)
	(4) S K40完掘状況 (北から)

- (5) S K 45完掘状況(北西から)
- (6) S K 55土層断面(北東から)
- (7) S K 55遺物出土状況(北西から)
- (8) S K 55完掘状況(南東から)
- 図版 3 (1) S K 60土層断面(南西から)
- (2) S K 60焼土検出状況(南から)
- (3) S K 60完掘状況(北東から)
- (4) S K 70土層断面(南東から)
- (5) S K 70完掘状況(南から)
- (6) S K 75土層断面(南から)
- (7) 作業風景①(南東から)
- (8) 作業風景②(東から)

図版 4 出土遺物①

図版 5 出土遺物②

図版 6 出土遺物③

図版 7 出土遺物④

図版 8 S K 70出土の段を有する杯

Ⅲ. 赤司定格遺跡(第1次調査)

- 図版 9 (1) 赤司定格遺跡第1次調査区全景(南から)
- (2) S D 2・3全景(東から)
- (3) 溝状遺構土層状況(東から)
- (4) S K 8 袍衣壺出土状況(南から)

図版10 出土遺物①

図版11 出土遺物②

Ⅳ. 北山古墳群(第3次調査)

- 図版12 (1) 北山8号墳現況(東から)
- (2) 石室検出状況(東から)
- (3) 東西土層堆積状況(南から)

- (4) 東西土層盛土堆積状況(南から)
- (5) 再構築石室検出状況(南から)
- (6) 再構築石室奥壁(南から)
- (7) 最上層床面(東から)
- (8) 第2床面(西から)

- 図版13 (1) 初期・再構築石室検出状況(南から)
- (2) 初期石室奥壁周辺(西から)
- (3) 初期石室検出状況(西から)
- (4) 初期石室袖石付近(南から)
- (5) 出土遺物

Ⅴ. 夫婦木古墳群(第1次調査)

- 図版14 (1) 1号墳調査前風景(西から)
- (2) 北トレンチ土層堆積状況(西から)
- (3) 東トレンチ土層堆積状況(北から)
- (4) 南トレンチ土層堆積状況(西から)
- (5) 主体部検出状況①(西から)
- (6) 主体部検出状況②(北から)
- (7) 出土遺物

Ⅵ. 京隈侍屋敷遺跡(第8次調査)

- 図版15 (1) 調査区全景(南西から)
- (2) S X 1 調査風景(南西から)
- (3) S X 1 全景(南から)
- (4) S X 1 南東隅角の状況(南東から)
- (5) S X 1 裏込め状況(南東から)
- (6) 調査区西壁面のS X 1 付近土層(南東から)
- (7) S X 1 全景(北東から)
- (8) 西トレンチ現代遺構検出状況(南西から)

図版16 出土遺物

I. 調査の経過

1. はじめに

久留米市内には数多くの各種文化財が存在している。本市では、開発の代償として姿を消す埋蔵文化財を後世に伝えるべく、記録保存という名目の下に発掘調査を実施している。近年、市街地を中心として開発件数は増加傾向にあり、現地での発掘調査に迫られるあまりに、調査から記録類の整理、報告書の刊行までの作業工程が遅延することも多く、十分な情報を公表できていない調査事例も少なくない。こうした状況を解消するために、本市では昭和60・61年度、および平成12年度以降は継続して、諸般の事情で未報告となっていた遺跡の報告書を刊行してきている。本書には資料整理が終了した5遺跡の調査成果を収録することができた。以下、簡単に調査の概要を記す。

二本木遺跡（第13次調査） 平成9年度に実施した道路拡幅に伴う発掘調査で、12～13世紀代を主体とする溝や土坑などが検出された。

赤司定格遺跡（第1次調査） 平成17年度に実施した専用住宅建設に伴う発掘調査で、弥生時代前期を中心とする溝や土坑が検出された。

北山古墳群（第3次調査） 平成18年度に実施した樹木抜根に伴う発掘調査で、6世紀後半から7世紀の古墳1基を調査した。調査の結果、一度崩壊した石室を再構築した古墳であることが判明し、3面の床面を有していた。

夫婦木古墳群（第1次調査） 平成18年度に実施した、つつじ・つばき園造成に伴う発掘調査で、5世紀後半代と考えられる古墳1基を検出した。石室は、竪穴系横口式石室もしくは石棺系石室と考えられるものの削平のため詳細は不明である。

京隈侍屋敷遺跡（第8次調査） 今年度を実施した金融機関支店建物建設に伴う発掘調査で、幕末から近代の土坑2基、および近代の石積みなどを検出。発掘調査は民間受託事業として実施したが、実働5日間の調査で遺構・遺物ともに希薄であったため、報告書は本書に収録した。

2. 調査の体制

本書に収録した調査にかかわる各年度の埋蔵文化財の調査体制は、以下のとおりである。

《平成9年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	桑野善吾		
調査総括：教育文化部	部長	坂田博春	社会教育担当部長	矢次敏孝
文化財保護課	課長	古賀幸男	主査	萩原裕房
埋蔵文化財主査		櫻井康治	文化財主査	松村一良
庶務担当		古賀直喜	調査担当	白木 守

《平成17年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川集充		
調査総括：文化観光部	部長	緒方眞一	次長	辻 文孝
文化財保護課	課長	関 知彦		
課長補佐兼主査		立石雅文		

1. 調査の経過

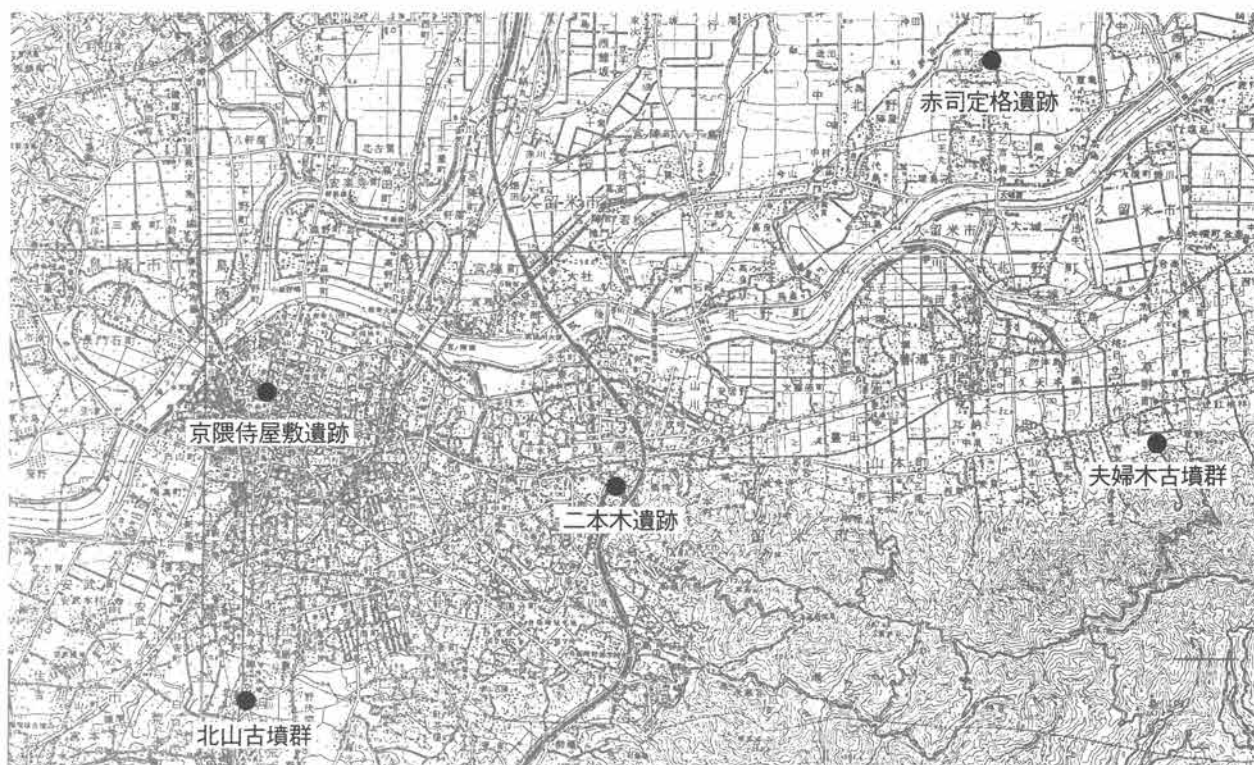
事務主査	松村一良	大石 昇	近澤康治
庶務担当	権藤節子		調査担当 本田岳秋

《平成18年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川集充	
調査総括：文化観光部	部 長	緒方眞一	次 長 辻 文孝
文化財保護課	課 長	関 知彦	
課長補佐兼主査		立石雅文	山口 淳
事務主査		松村一良	近澤康治
庶務担当		本庄ともえ	調査担当 熊代昌之

《平成19年度》

調査主体：久留米市教育委員会	教育長	石川集充	
調査総括：文化観光部	部 長	緒方眞一	次 長 辻 文孝
文化財保護課	課 長	関 知彦	
課長補佐兼主査		立石雅文	山口 淳
事務主査		松村一良（埋蔵文化財センター） 近澤康治（調査総括・事前審査）	
庶務担当		本庄ともえ	
調査担当		水原道範	本田岳秋 白木 守 塚本映子
		小澤太郎	江島伸彦 神保公久 熊代昌之
整理担当		畠中和子	米澤美詠子 原田志保（専任非常勤）



第1図 本書掲載遺跡位置図（1/100,000）

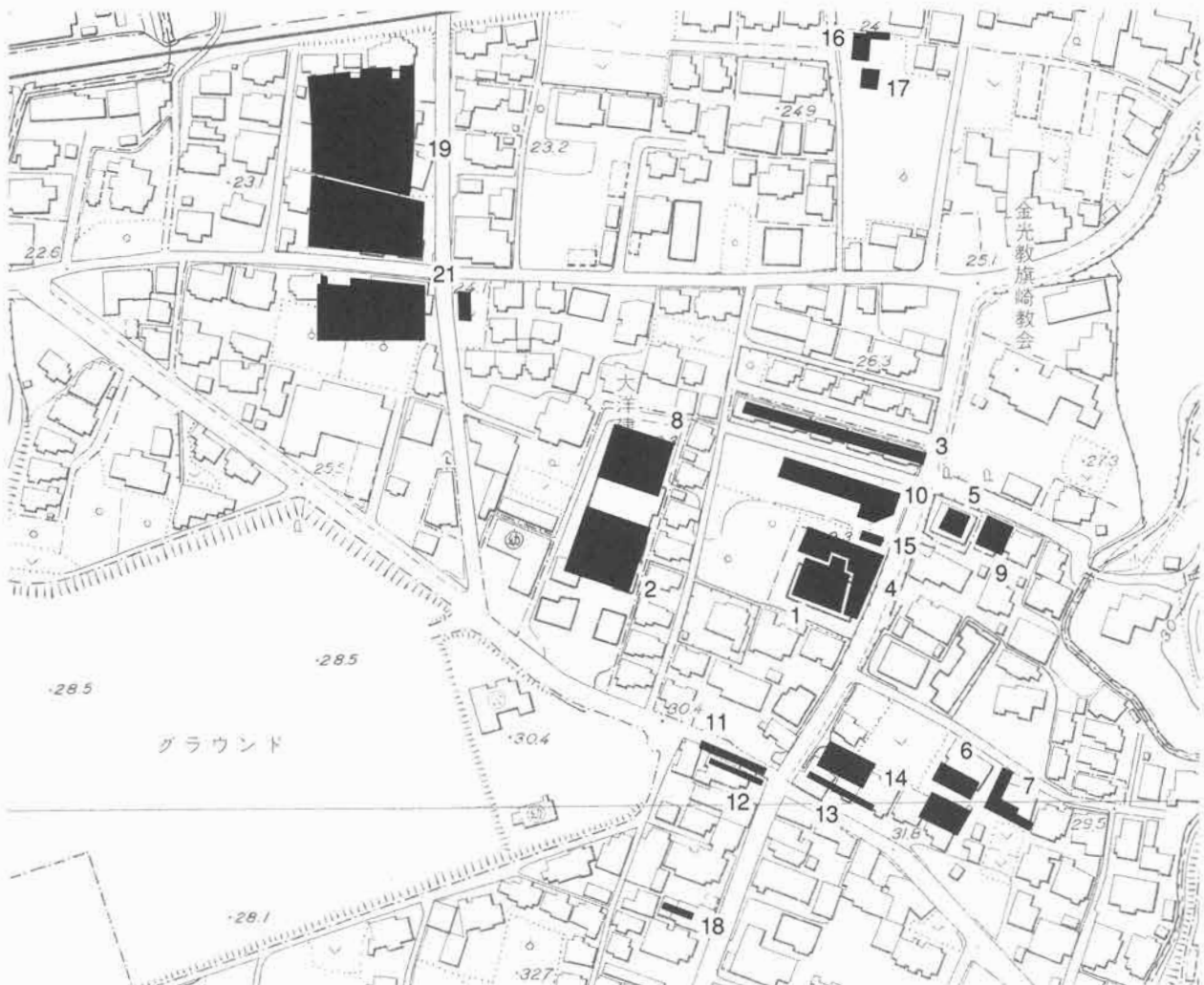
Ⅱ. 二本木遺跡（第13次調査）

1. はじめに

本調査は平成9年8月22日に、久留米市建設部道路課より久留米市御井町字岩井川567-1、638-1-1、638-1-2、638-1における、交通渋滞緩和対策事業に伴う交差点改良工事に先立つ「埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書」が提出されたことに端を発する。依頼地は周知の遺跡である二本木遺跡の範囲内に含まれていることから、9月29日に試掘調査を実施した。その結果、随所に削平を受けていたものの溝状遺構などが検出され、土師器の出土が認められたことから、10月2日付で工事着工前に発掘調査が必要な旨を回答した。道路課との協議の結果、県道を挟んで西側（567-1番地）については平成9年10月6日から第11次調査（註1）として発掘調査に着手することとし、東側の3筆については年明けから調査に着手することとなった。

調査は拡張される新設道路部分を対象とし、地形上の制約から県道沿いの西区と、その上段に位置する東区とに分け、平成10年1月19日から2月3日まで実施した。調査面積は94㎡である。

註1 水原道範 2004 「二本木遺跡（第11次調査）」『久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅵ』久留米市文化財調査報告書第198集



第2図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

2. 位置と環境

二本木遺跡の所在する御井町は久留米市街地の東部に位置し、耳納連山西端に聳える高良山（標高312m）の麓を中心に現在の集落が展開する。遺跡はこの高良山から西へ派生する、標高27～32mの丘陵上に位置する。耳納連山北麓には活断層である水縄断層が走っており、その断層活動によって形成された断層崖下には随所に湧水が見られるほか、高良山麓には高良三泉と称される「朝妻・岩井・徳間の清水」が湧出する。こうした豊富な湧水に恵まれた環境の下、周辺には縄文時代から近世に至る多くの遺跡が連綿と営まれ、市内でも最も遺跡が集中する地域となっている。

二本木遺跡周辺における人々の生活痕跡は縄文時代にまで遡る。横道遺跡では筑後地域で最古段階に位置付けられる草創期の隆起線文土器や続円孔文土器をはじめ、後期を除く全時期の遺物が出土しているのに加え、集石遺構や焼土遺構も検出されている。また神道遺跡第19次調査では西平式～三万田式段階の、西小路遺跡第7次調査では御領式段階の堅穴住居が確認され、特に後者の住居内からは線刻土器や石冠・石棒も出土しており、集落構成のみならず精神文化の側面からも注目されるものである。

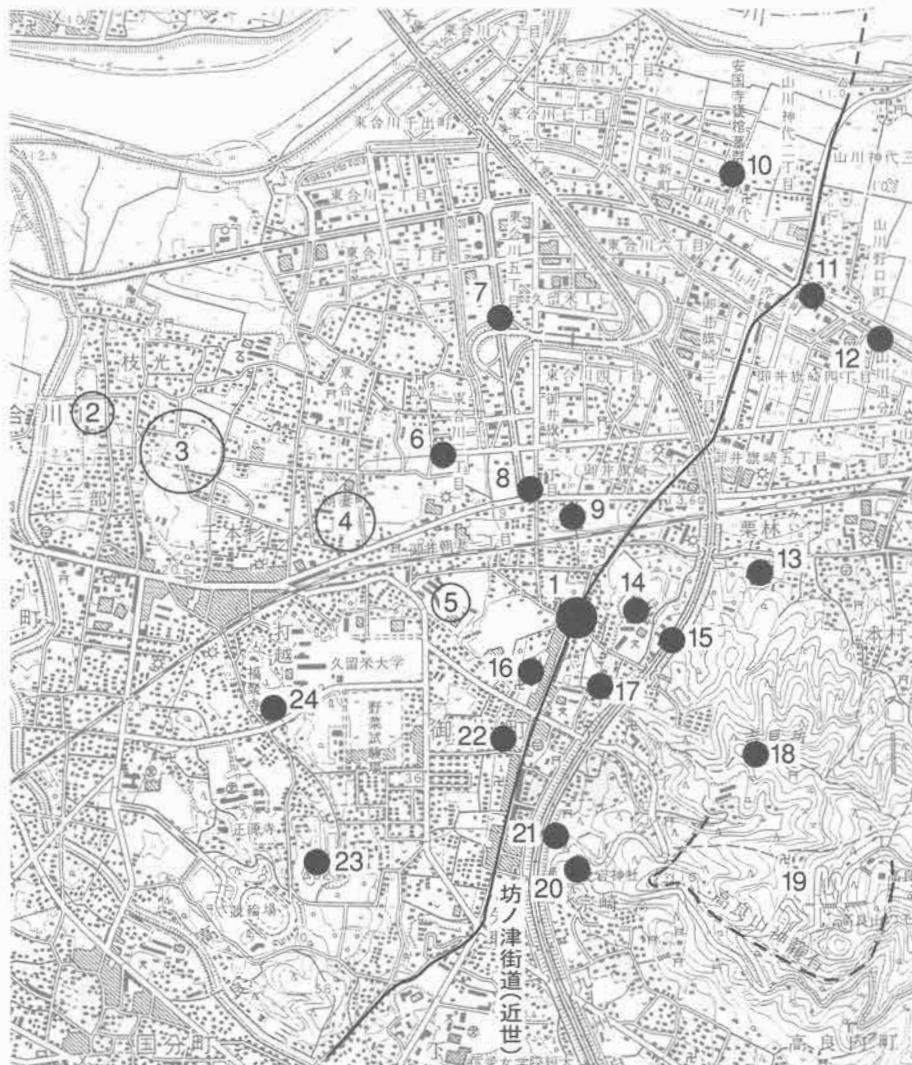
弥生時代では二本木遺跡において、幅5m以上、総延長120m以上にも及ぶ大溝が確認されており、底面からは丹塗り土器をはじめとする中期の土器が多く出土する。この大溝の西側においては堅穴住居や土坑などで構成される居住域が展開しているものの、東側においては該期の遺構は皆無であり、居住域を画する溝と考えられる。

古墳時代で注目されるのは、箱式石棺を主体部とする市内最古の古墳である祇園山古墳（方墳）の存在で、高良大社に伝わる三角縁神獣鏡は同古墳出土と云われるものであるが、考古学的確証はない。このほか祇園山古墳を見下ろす丘陵上には、岩盤を割り抜いた盤棺を主体部とする礫山古墳、西方の打越丘陵上には近年の調査で2基の方墳が確認された福聚寺古墳群など、多くの前期古墳が存在している。

7世紀末に筑紫国から分国した筑後国は10郡を管轄し、二本木遺跡が所在する御井町付近は「御井郡」に組み込まれることとなる。高良山南西側斜面には、標高250m地点を最高所として高良山神籠石が築かれている。また耳納連山北麓に位置する水縄断層系の活動痕跡は、山川前田遺跡や神道遺跡、高良山神籠石などにおいて確認されており、最新の活動が『日本書紀』に見える天武七年(679)に起こったとされる「筑紫大地震」であることが従前の調査で明らかとなっている。

平安～鎌倉時代は二本木遺跡が最も盛行を迎える時期である。中世末頃に書かれた『高良記』には延久五年(1073)に筑後国庁が「今ノ符」に移ったとあり、この今ノ符とは横道遺跡で検出された建物群に比定されている。この国庁の移転を契機として二本木遺跡周辺は著しい発展を遂げることとなる。すなわち豊富な輸入陶磁器をはじめ、常滑焼や瀬戸などの国産陶器、大型銭を含む銭貨の出土などは、当地が大量の遺物を消費する環境にあったことを示すとともに、物資の流通拠点としても位置付けられ、さらにはこうした豊富な出土品の存在は、国庁に勤務した官人の居宅が近隣にあったことを示唆するものであろう。

南北朝期から戦国期にかけて、軍事上重要な地形を有する高良山一帯には、延文四年(1359)の筑後川合戦時に懐良親王の本城となったと伝えられる毘沙門嶽城や、天文二年(1533)に八尋式部によって築かれた吉見嶽城など多くの山城が築かれる。近世になると薩摩坊ノ津街道が整備され、御井町の中心地は「府中宿」として大きな発展を遂げる。この頃には各地の道路網も府中を目指して本格的に整備され、現代にも続く交通の要衝としての芽生えが見出せる。また福聚寺裏の隈山には、久留米藩の収入強化の一策として正徳四年(1714)に操業が開始された朝妻焼古窯跡が所在する。



遺 跡 名

1. 二本木遺跡
2. 筑後国府Ⅰ期国庁(古宮)
3. 筑後国府Ⅱ期国庁(阿弥陀)
4. 筑後国府Ⅲ期国庁(朝妻)
5. 筑後国府Ⅳ期国庁(横道)
6. ヘボノ木遺跡
7. 下見遺跡
8. 神道遺跡
9. 篠田遺跡
10. 安国寺甕棺墓群
11. 野口遺跡
12. 大島遺跡
13. 山川前田遺跡
14. 東光寺遺跡
15. 茶臼山遺跡
16. 安養寺境内遺跡
17. 岩井川遺跡
18. 吉見嶽城跡
19. 高良山神籠石
20. 礫山古墳
21. 祇園山古墳
22. 日出原南遺跡
23. 打越遺跡
24. 朝妻焼古窯跡

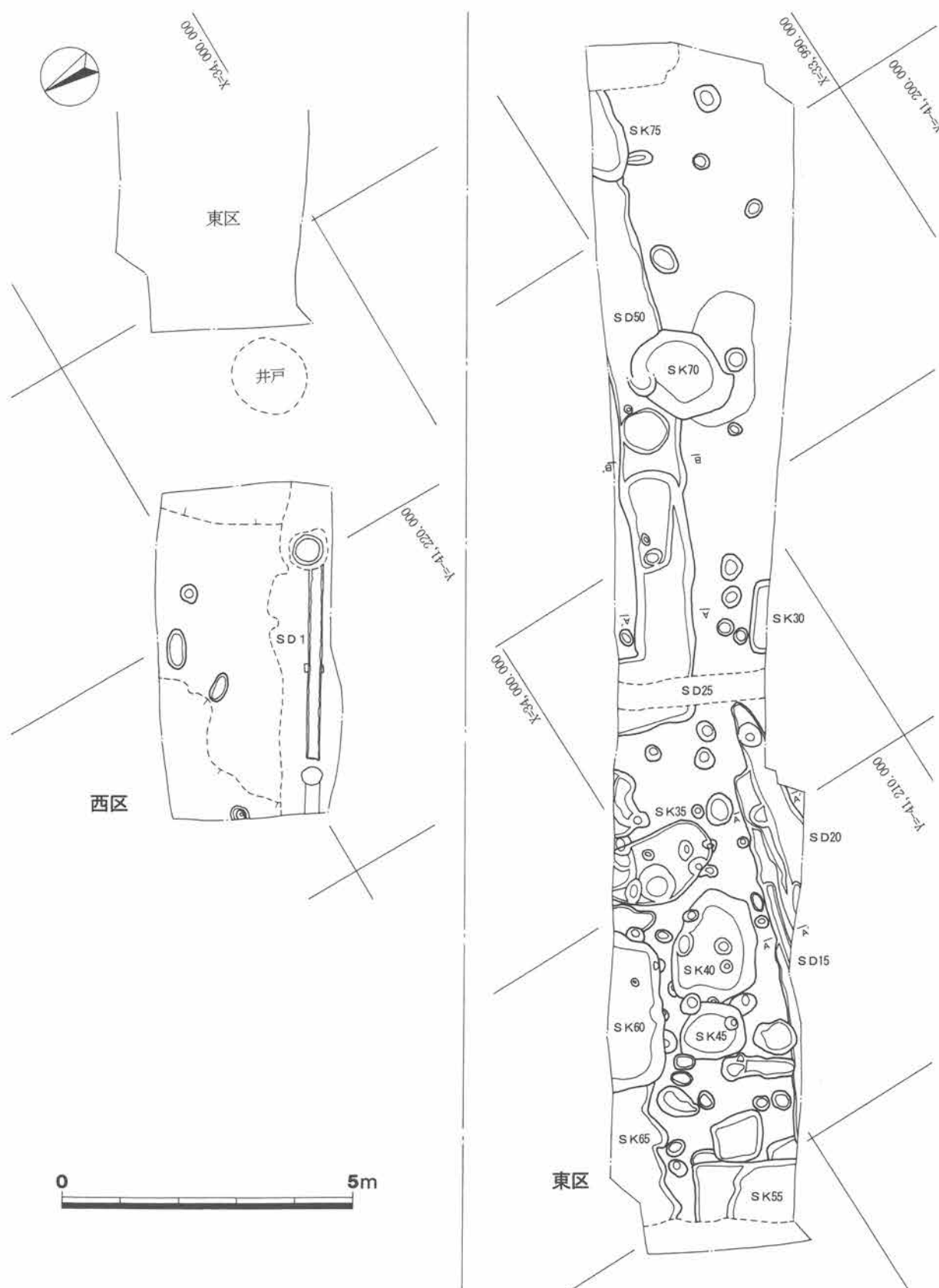
第3図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

3. 調査の記録

a. 調査の概要

対象地には地形に起因する段差があり、加えて現代の井戸も存在していたため、調査区を西区と東区とに分けて調査を行うこととなった。平成10年1月19日、西区より重機による表土剥ぎを開始。西区は削平が著しく、大半が現代の攪乱で占められる。一方の東区では溝状の遺構や土坑、ピットが認められる。26日に発掘器材を搬入し、遺構検出作業を開始。27日に平板による略図(1/50)を作成した後、西区より遺構の掘り下げを開始する。翌28日からはトータルステーションを用いて遺構の測量を行う。遺構の掘り下げが終了した段階で調査区内の清掃を行い、2月3日に高所作業車を用いて調査区的全景写真撮影を実施。その後、安全対策のため人力で主要遺構を埋め戻し、発掘器材を撤収して現地調査を終了する。

なお、記録写真はモノクローム35mm判・6×7判、カラーリバーサル35mm判で撮影し、遺構図は主に遺跡調査汎用システム「カタタ」を用いて作成した他、個別遺構図・土層図については1/20で個別に作成した。



第4図 二本木遺跡第13次調査遺構配置図 (1/100)

b. 遺構の概要

歴史時代の溝3条、土坑9基、ピット、近現代の溝2条、井戸1基などを検出した。東区の西半部を除けば遺構は全体に希薄で、特に西区では近現代の遺構しか検出されなかった。

基本層序 西区は表土を30cm程度除去すると直ぐに地山面に達し、後世にかなりの削平を受けていることが判る。東区ではバラスを含む客土（30cm）を除去すると暗黄褐色土（20～30cm）が認められ、その下に暗褐色土（30～40cm）が堆積し、この暗褐色土の下が遺構検出面となる。遺構検出面は東から西へ移行するに従って徐々に低くなり、東区の両端ではおよそ40cmの高低差が認められる。

溝

SD1（第4図） 西区南壁沿いで検出した現代の排水溝で、東端に据えられた溜め枡から西へと延びる。近現代の陶磁器やビー玉などが出土した。

SD15（第4・5図） 東区のSD20の北側に位置する溝状の遺構で、SD20と走行方向は同じである。南側はSD20と重複している可能性があるため、現状で幅20cm、深さ10cm余りと非常に規模は小さい。土師器細片が5点出土したのみで、時期が窺える資料は見られない。

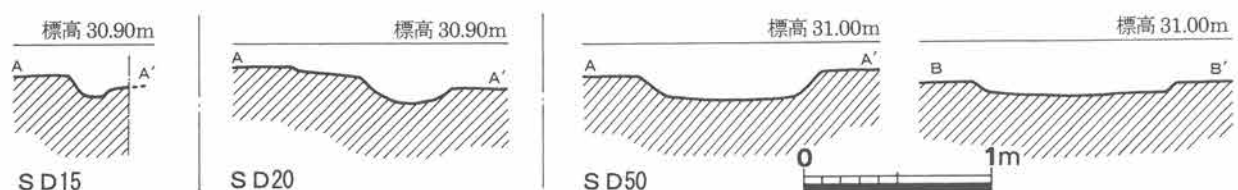
SD20（第4・5図） SD15の南側で検出した東西溝である。北側は二段掘り状に掘り込まれるが、掘削段階のものか、別の遺構が重複しているのかの判断は下しかねる。深さ20cm前後を測り、現状で長さ4m余りを確認しているが、底面レベルは溝の両端で20cm程度の高低差が見られ、地形に沿って西へ移行するに従って低くなる。埋土は黒褐色土で、土師器の供膳具（ヘラ切りと糸切りが混在）がビニール1袋程度、須恵器片9点、白磁24点、瓦器66点、黒色土器、石鍋などが出土した。

SD25（第4図） SD50を切って検出された溝で、幅50cm、深さ15cm前後を測る。底面レベルは北から南へ向かって低くなり、両端で約10cmの高低差が見られる。埋土は灰色土で近代の陶磁器が数点出土した。なお北側に隣接する第14次調査区では検出されていない。

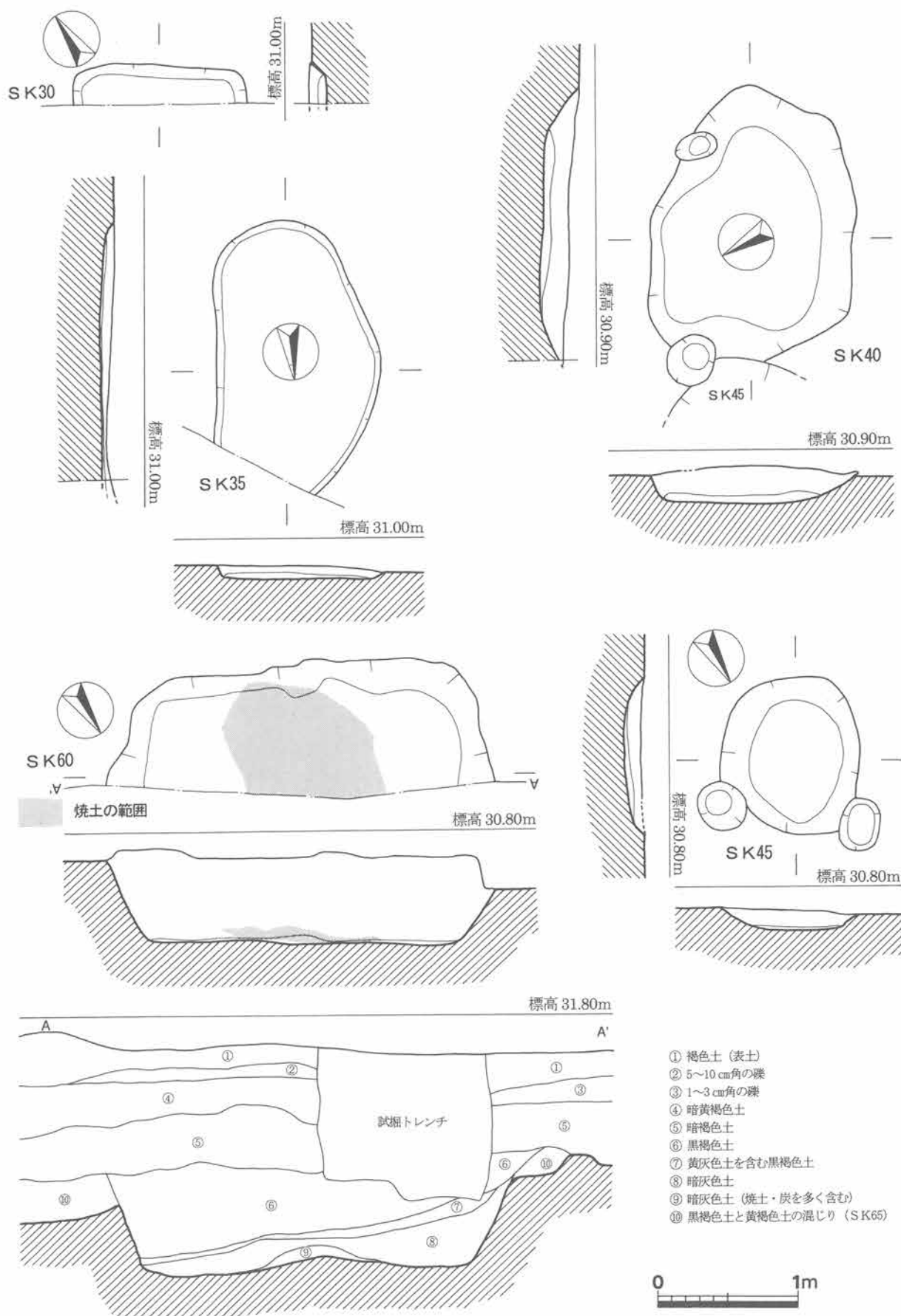
SD50（第4・5図、図版2） 東区の北壁沿いで検出した溝で、幅1m前後、深さは5～10cm程度と浅い。底面はほぼ平坦で、レベル差もほとんど認められない。埋土は黒褐色土で、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、石製品などがビニール3袋程度出土している。出土遺物の大半が土師器で、数点の土鍋片を除けば全て糸切りの供膳具であった。切り合いからSK70・75より先行することが判明している。溝の南西コーナー部を検出しているものの、溝が全体に浅いためか、北側に隣接する第14次調査区では検出されておらず、区画の規模等は明らかでない。

土坑

SK30（第6図） 東区南端で検出した土坑で、南側は調査区外に延びるため全容は不明であるが、平面プランは方形もしくは長方形を呈するものと考えられる。埋土は細かい地山土を含む黒褐色土で、深さは10cm余りと浅い。細片を含めて土師器7点、白磁碗IV類1点、瓦器碗2点が出土した。



第5図 SD15・20・50断面図（1/40）



第6図 SK30・35・40・45・60実測図（1/40）

SK35（第6図，図版2） SD50の西側の壁際で検出した、平面プランが楕円形を呈する土坑である。長軸2m以上×短軸1.2mを測り、深さは8cm程度と浅い。埋土は黒褐色土で、細片を含めて土師器小皿・杯など70点、白磁碗Ⅳ類1点、瓦器碗5点が出土した。

SK40（第6図，図版2） SK35の南側で検出した土坑で、平面プランは長軸2m程度×短軸1.4mの崩れた楕円形を呈する。埋土は黒褐色土で、深さは中央部で25cmを測る。ビニール1袋程度の遺物が出土し、土師器以外では須恵器5点、輸入陶磁器6点、瓦器碗・皿70点余りが見られる。また土師器は99%が供膳具で占められ、底部処理では糸切りが主体でヘラ切りはごくわずかであった。SK45より先行する。

SK45（第6図，図版2） SK40を切る土坑で、平面プランは長軸1.1m程度×短軸1.0mの略円形を呈する。深さは15cmで、埋土は少量の黄色土を含む黒褐色土であった。細片を含めて土師器小皿・杯など84点、青磁碗1点、輸入陶器壺1点、瓦器碗8点が出土した。出土遺物から見る限りでは、SK40との時期差は認められない。

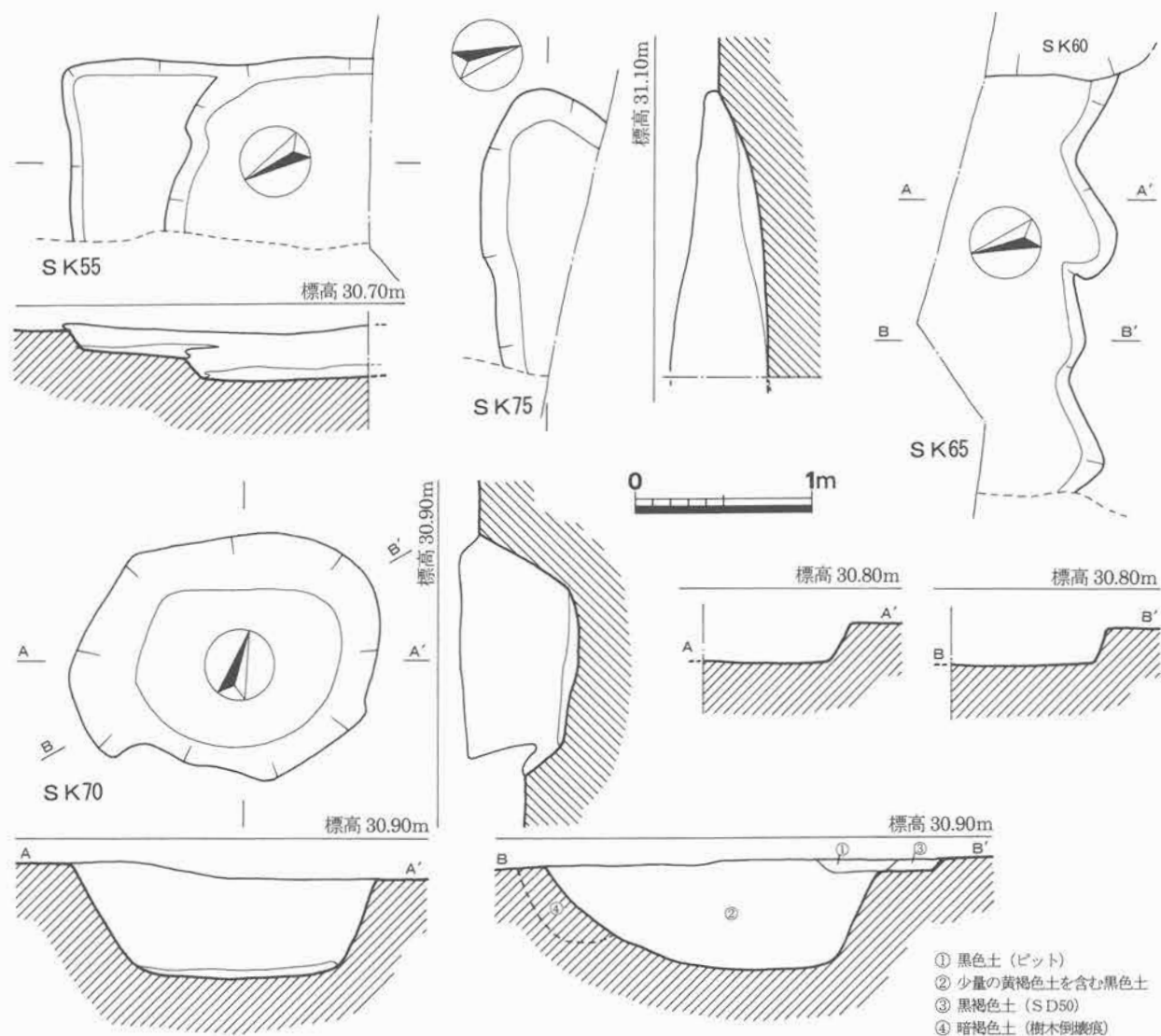
SK55（第7図，図版2） 東区の西端で検出した土坑で、南側は調査区外に延び、西側は攪乱によって切られる。北辺にテラスを有する二段掘りを呈し、深さ30cm程度を測る。埋土は黒色土を主体とするが、下部には細かい黄色土ブロックが多く含まれている。出土遺物の大半が土師器で、12点の鍋類を除けば全て糸切り底の小皿・杯である。土師器以外では東播系捏鉢1点、瓦器碗53点、輸入陶磁器11点、棒状土製品1点、石鍋1点などが見られる。

SK60（第6図，図版3） 東区の北壁付近で検出した、平面プランが方形もしくは長方形を呈すると考えられる土坑で、今回の調査で検出した土坑の中では最も大形の土坑である。埋土は黒褐色土が主体となり、土層観察からは東側から埋められたような状況が窺える。最下層には大量の焼土や炭を含む暗灰色土が薄く堆積するが、底面は焼けていない。出土遺物は土師器の供膳具が大半で、煮炊具は極めて少ない。小皿・杯の底部処理を見るとヘラ切りと糸切りの比率は概ね3：1であり、ヘラ切り底が大きく上回る。土師器以外では瓦器碗・皿、輸入陶磁器、常滑焼大甕、石鍋などが見られる。

SK65（第7図） SK60の西側に位置する、平面プランが不整形を呈する土坑で、SK60より先行する。深さ20cm程度を測り、底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色土と黄褐色土の混じりで、土師器の供膳具455点、瓦器碗35点、白磁碗2点、陶器壺1点、石鍋1点などが出土した。

SK70（第7図，図版3） SD50を切って掘られた、平面プランが楕円形を呈する土坑である。規模は長軸1.75m×短軸1.4m、深さ65cmを測る。南側に位置する樹木倒壊痕と重複していたため、当初は埋土を混同して一部掘り過ぎてしまったが、半裁した段階で土坑のプランを確認することができた。埋土は少量の黄褐色土を含む黒色土で、パンコンテナ1箱程度の遺物が出土した。遺物の大半が土師器の供膳具で、全て糸切り底である。土師器以外では東播系捏鉢1点、瓦器碗132点、白磁23点、石鍋2点、壁土7点などが出土した。

SK75（第7図，図版3） 東区の東端付近で検出した土坑で、SD50よりも後出する。SD50の延長上に位置するために、溝の掘り込みの一部とも考えられたが、埋土に焼土を多く含んでいる点がSD50とは大きく異なっており、単独の土坑として扱った。大半が調査区外に延びるために全体の規模は不明であるが、最深部で深さ50cm余りを測る。土師器小皿・杯など331点、瓦器23点、東播系捏鉢1点、輸入陶磁器8点、常滑焼大甕2点などが出土した。



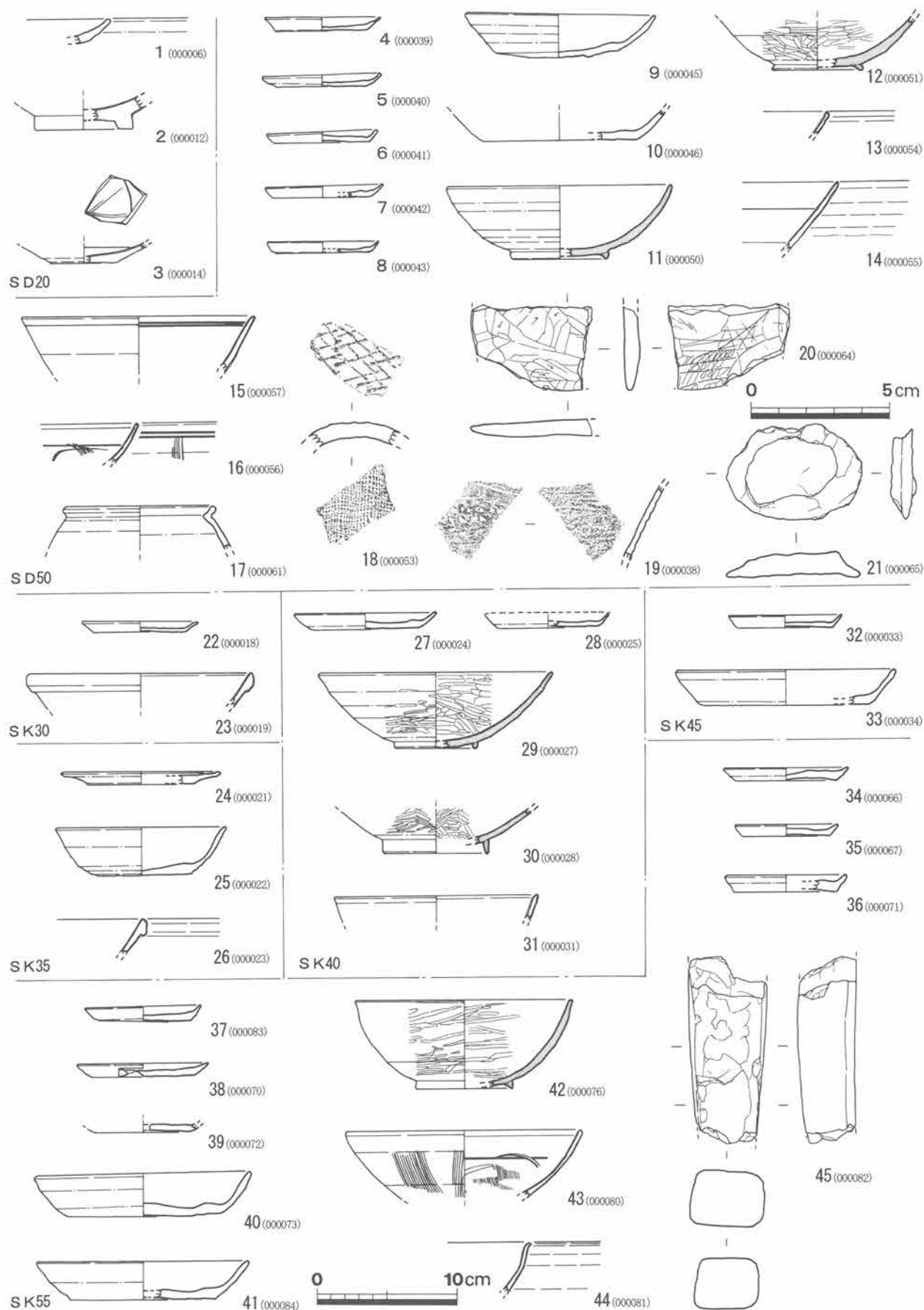
第7図 SK55・65・70・75実測図 (1/40)

c. 遺物の概要

出土遺物は全体でパンコンテナー5箱程度に上り、近現代の遺物を除けばほぼ12～13世紀代の遺物で占められる。歴史時代の遺物の大半は土師器の供膳具（糸切りが主体）で、煮炊具は極めて少ない。土師器以外では黒色土器、瓦器碗、輸入陶磁器、東播系捏鉢、石鍋などが見られ、輸入陶磁器は白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が多く、青磁や陶器は散見できる程度であった。歴史時代以外の遺物では縄文土器1点と弥生土器3点が出土した。実測図を掲載した個々の遺物の概要については第1・2表の出土遺物観察表に譲り、ここでは代表的な遺物について観察表に記載できなかった事項を中心に説明を加える。

SD20出土遺物（第8図，図版4） 2は白磁碗Ⅳ類、3は白磁皿Ⅵ類で見込みに蕉葉文を施す。

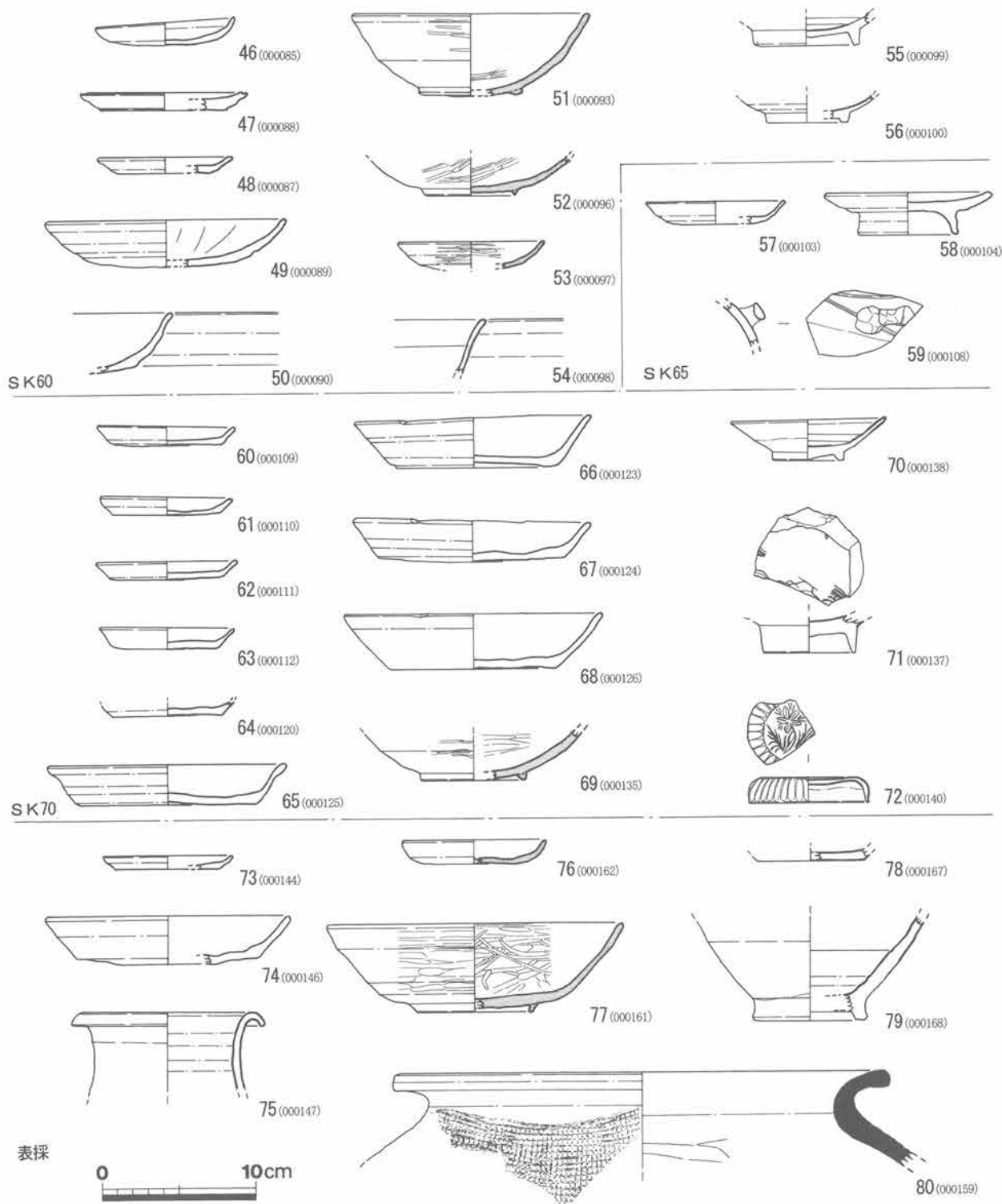
SD50出土遺物（第8図，図版4・5） 4～8は土師器小皿ですべて糸切り。5は器形にやや歪みが生じている。11の瓦器碗は体部下半にヘラケズリが施されており、肥後型の範疇に含まれるものと考えられる。13は白磁碗の口縁部で化粧土が施される。14の白磁碗は外面体部下半が露胎で工具痕が顕著であり、内面には釉を掻き取った痕跡が認められることからⅧ類と考えられる。19は縄文土器で外面に刺突文と沈



第8図 二本木遺跡第13次調査出土遺物実測図① (1/4, 20・21は1/2)

線文、内面には条痕が認められる。曾畑式。20は用途不明の滑石製品で、厚さ5mm程度と薄手に仕上げられている。21は銅製品であるが用途は不明。

SK35出土遺物（第8図，図版5） 24はヘラ切り底の小皿で、口縁端部には面取りを施し、かなりシャープに仕上げている。京都系土師器の影響か。



第9図 二本木遺跡第13次調査出土遺物実測図②（1/4）

第1表 二本木遺跡第13次調査出土遺物観察表(1)

遺物№	出土遺構	種別	器種	法量〔cm〕			色調		調査		胎土	備考	登録番号
				口径 〔径〕	底径 〔径〕	器高 〔厚〕	外面	内面	外面	内面			
1 第8図	SD20	土師器	小皿	—	—	(2.0)	にぶい褐	にぶい褐	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ	細砂粒(長石、石英、金雲母、赤色粒子)		199737 —000006
2 第8図	SD20	白磁	碗	—	7.1	(2.4)	(釉) 淡緑色		ケズリ	回転ナデ	黒色粒子を含む灰白色精良	IV類	199737 —000012
3 第8図	SD20	白磁	皿	—	4.7	(1.5)	(釉) 淡緑色		ケズリ	回転ナデ 煮染文	白色精良、化粧土	VI類	199737 —000014
4 第8図	SD50	土師器	小皿	8.4	6.8	1.1	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母、赤色粒子)		199737 —000039
5 第8図	SD50	土師器	小皿	8.5	6.4	0.9	橙	橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母、赤色粒子)		199737 —000040
6 第8図	SD50	土師器	小皿	8.0	6.9	0.8	橙	橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母、少量の赤色粒子)		199737 —000041
7 第8図	SD50	土師器	小皿	8.5	7.1	0.9	橙	橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母)		199737 —000042
8 第8図	SD50	土師器	小皿	8.0	6.4	0.9	橙	橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母)		199737 —000043
9 第8図	SD50	土師器	杯	13.7	18.6	3.2	橙	橙	ヨコナデ ヘラ切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母、少量の赤色粒子)		199737 —000045
10 第8図	SD50	土師器	杯	—	11.4	(2.0)	橙	橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母、赤色粒子)		199737 —000046
11 第8図	SD50	瓦器	碗	16.2	6.9	5.3	灰白・灰 暗褐	灰白・灰	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ	精良(多量の金雲母)	肥後型か	199737 —000050
12 第8図	SD50	瓦器	碗	—	6.6	(3.6)	灰	灰	ヨコナデ ミガキ	ミガキ	精良		199737 —000051
13 第8図	SD50	白磁	碗	—	—	(1.7)	(釉) 淡黄		回転ナデ ケズリ	回転ナデ	灰白色精良、化粧土	II類	199737 —000054
14 第8図	SD50	白磁	碗	—	—	(5.1)	(釉) 淡緑		回転ナデ ケズリ	回転ナデ 掻き取り	灰白色精良	VII-2類	199737 —000055
15 第8図	SD50	青磁	碗	16.6	—	(4.2)	(釉) 黄緑		回転ナデ ケズリ	回転ナデ 圈線	灰色精良	龍 I-1-a類	199737 —000057
16 第8図	SD50	青磁	碗	—	—	(2.8)	(釉) 淡緑		回転ナデ ケズリ 櫛目文	回転ナデ 櫛目文	灰色精良	同 I-1-b類	199737 —000056
17 第8図	SD50	陶器	鉢	10.8	—	(3.2)	オリーブ褐 にぶい赤褐	黄褐	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	灰色精良	IV類	199737 —000061
18 第8図	SD50	瓦	丸瓦	(6.2)	(6.4)	1.2	灰	灰	斜格子叩き	布目	細砂粒(長石)		199737 —000053
19 第8図	SD50	縄文土器	鉢	—	—	(5.7)	黒褐	黒	刺突文 沈線文	条痕	砂粒(石英、角閃石、雲母)	曾畑式	199737 —000038
20 第8図	SD50	滑石	不明	(4.35)	(3.0)	0.55	灰	灰				重量12.8g	199737 —000064
21 第8図	SD50	銅製品	不明	4.8	3.5	1.0						重量41.8g	199737 —000065
22 第8図	SK30	土師器	小皿	8.3	6.6	0.8	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	細砂粒(石英、金雲母、赤色粒子)		199737 —000018
23 第8図	SK30	白磁	碗	16.3	—	(2.5)	(釉) 淡オリーブ		回転ナデ ケズリ	回転ナデ	黒色粒子を含む灰白色精良	IV類	199737 —000019
24 第8図	SK35	土師器	小皿	11.6	7.6	1.0	橙	橙	ヨコナデ ヘラ切り	回転ナデ	微砂粒(金雲母、赤色粒子)		199737 —000021
25 第8図	SK35	土師器	杯	12.2	8.0	3.5	橙	橙	ヨコナデ ヘラ切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(石英、多量の金雲母)		199737 —000022
26 第8図	SK35	白磁	碗	—	—	(2.6)	(釉) 白		回転ナデ ケズリ	回転ナデ	黒色粒子を含む灰白色精良	IV類	199737 —000023
27 第8図	SK40	土師器	小皿	10.2	7.8	1.2	橙	橙～ にぶい橙	ヨコナデ ヘラ切り	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(石英、長石、金雲母、少量の赤色粒子)		199737 —000024
28 第8図	SK40	土師器	小皿	—	7.4	(1.1)	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母)	焼成不良	199737 —000025
29 第8図	SK40	瓦器	碗	16.5	6.0	5.5	灰白	黒	ヨコナデ ミガキ、押さえ	ミガキ	細砂粒(石英、金雲母)		199737 —000027
30 第8図	SK40	瓦器	碗	—	7.6	(3.2)	灰白	灰	ヨコナデ ミガキ	ミガキ	微砂粒(金雲母)		199737 —000028
31 第8図	SK40	白磁	碗	14.6	—	(1.9)	(釉) 乳白		回転ナデ ケズリ	回転ナデ	黒色粒子を含む灰白色精良	V類	199737 —000031
32 第8図	SK45	土師器	小皿	8.2	7.1	1.0	にぶい橙	橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母)		199737 —000033
33 第8図	SK45	土師器	杯	15.8	12.0	2.6	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り	ヨコナデ	細砂粒(石英、金雲母、赤色粒子)		199737 —000034
34 第8図	SK55	土師器	小皿	9.0	7.3	1.0	灰褐	橙 褐灰	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	細砂粒(石英、長石、金雲母)		199737 —000066
35 第8図	SK55	土師器	小皿	7.5	6.4	0.9	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ 糸切り	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母、赤色粒子)		199737 —000067
36 第8図	SK55	土師器	小皿	8.8	7.4	1.1～ 1.3	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の赤色粒子)		199737 —000071
37 第8図	SK55下層	土師器	小皿	8.3～ 8.8	6.6～ 7.4	0.8～ 1.2	灰黄褐	灰黄褐	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母、少量の赤色粒子)		199737 —000083
38 第8図	SK55	土師器	小皿	9.4	7.4	1.0	にぶい橙	橙 褐灰	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母、赤色粒子)	底部穿孔あり	199737 —000070
39 第8図	SK55	土師器	小皿	—	6.6	(0.3)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母、赤色粒子)	底部穿孔あり	199737 —000072
40 第8図	SK55	土師器	杯	16.0	11.0	2.7～ 3.5	橙	橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(赤色粒子、金雲母、4mm程度の石英)		199737 —000073

II. 二本木遺跡 (第13次調査)

第2表 二本木遺跡第13次調査出土遺物観察表(2)

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 [長]	底径 [幅]	器高 [厚]	外面	内面	外面	内面			
41 第8図	SK55下層	土師器	杯	15.2	10.4	2.8	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母、少量の赤 色粒子)		199737 -000084
42 第8図	SK55	瓦器	碗	15.6	7.0	6.4	灰	灰	ミガキ ナデ押え	ミガキ	細砂粒(金雲母、4mm程度 の砂粒)		199737 -000076
43 第8図	SK55	青磁	碗	17.0	—	(5.0)	(釉) 灰オリーブ		回転ナデ ケズリ 櫛目文	回転ナデ 花文 点描文	灰色精良	同 I-1-b類	199737 -000080
44 第8図	SK55	青磁	碗	—	—	(3.2)	(釉) 灰オリーブ		回転ナデ ケズリ	回転ナデ	黒色粒子を含む灰色精良	越州窯系	199737 -000081
45 第8図	SK55	土製品	棒状	(13.4)	(5.6)	(4.2)	灰～淡灰	灰～淡灰	ナデ押え	ナデ押え	砂粒(石英、金雲母)		199737 -000082
46 第9図	SK60	土師器	小皿	9.1	7.4	1.3～ 1.8	にぶい橙	灰黄褐	ヨコナデ ヘラ切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母、赤色粒 子、石英)		199737 -000085
47 第9図	SK60	土師器	小皿	11.0	8.4	1.2	にぶい黄橙	橙	ヨコナデ ヘラ切り	ヨコナデ	微砂粒(金雲母、赤色粒 子)	京都系	199737 -000088
48 第9図	SK60	土師器	小皿	8.8	5.8	1.1	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り	ヨコナデ	微砂粒(金雲母、赤色粒 子)		199737 -000087
49 第9図	SK60	土師器	丸底杯	15.8	11.0	(3.1)	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ ヘラ切り+板目	ヨコナデ ミガキ コテあて	細砂粒(金雲母、5～8mm程 度の石英)		199737 -000089
50 第9図	SK60	土師器	杯	—	—	(4.1)	にぶい褐	黒褐色	ヨコナデ 糸切り	ヨコナデ	微砂粒(金雲母)		199737 -000090
51 第9図	SK60	瓦器	碗	15.8	7.0	5.5	灰黄褐	灰褐	ヨコナデ ミガキ ヘラ切り	ミガキ	砂粒(金雲母、3mm程度の 石英)		199737 -000093
52 第9図	SK60	瓦器	碗	—	6.0	(2.4)	灰白	灰	ミガキ ヘラ切り	ミガキ	微砂粒(金雲母)		199737 -000096
53 第9図	SK60	瓦器	小皿	9.6	6.8	(1.9)	灰白 灰	灰	ミガキ ヘラ切り	ミガキ	精良		199737 -000097
54 第9図	SK60	白磁	碗	—	—	(3.6)	(釉) 灰オリーブ		回転ナデ ケズリ	回転ナデ	黒色粒子を含む白色精良	VorV類	199737 -000098
55 第9図	SK60	白磁	碗	—	7.0	(1.5)	(釉) 灰白		ケズリ	回転ナデ 掻き取り	黒色粒子を含む白色精良	V類	199737 -000099
56 第9図	SK60	白磁	碗	—	5.4	(1.6)	(釉) 灰白		ケズリ	回転ナデ	黒色粒子を含む白色精良		199737 -000100
57 第9図	SK65	土師器	小皿	9.2	6.8	1.5	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ 糸切り	ヨコナデ	精良(金雲母)		199737 -000103
58 第9図	SK65	土師器	台付小皿	11.0	6.6	3.0	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ ヘラ切り	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(赤色粒子、金雲 母)		199737 -000104
59 第9図	SK65	陶器	四耳壺	—	—	(3.5)	(釉) 褐釉		回転ナデ 波状文	回転ナデ	細砂粒		199737 -000108
60 第9図	SK70	土師器	小皿	9.0	7.2	1.1～ 1.4	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(赤色粒子、金雲 母、3mm程度の石英)		199737 -000109
61 第9図	SK70	土師器	小皿	8.6	7.2	1.1～ 1.5	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母、石英、赤 色粒子)		199737 -000110
62 第9図	SK70	土師器	小皿	9.2	7.0	1.2～ 1.5	にぶい黄橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母)		199737 -000111
63 第9図	SK70	土師器	小皿	8.8	6.6	1.3～ 1.6	にぶい橙 灰黄褐	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母)		199737 -000112
64 第9図	SK70	土師器	小皿	—	7.4	(1.1)	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母、少量の赤 色粒子)		199737 -000120
65 第9図	SK70	土師器	杯	15.6	11.0	3.0～ 3.5	橙 黒	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母、赤色粒 子)	口縁端部に段	199737 -000123
66 第9図	SK70	土師器	杯	15.6	12.5	2.5～ 2.9	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母)	口縁端部に段	199737 -000124
67 第9図	SK70	土師器	杯	17.1	10.8	3.2～ 3.7	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	精良(金雲母)	口縁端部に段	199737 -000126
68 第9図	SK70	土師器	杯	15.6	11.4	2.8	にぶい黄橙	にぶい黄橙 黄灰	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(雲母)		199737 -000125
69 第9図	SK70	瓦器	碗	—	6.9	(3.1)	灰	褐灰	ミガキ	ミガキ	精良(金雲母)		199737 -000135
70 第9図	SK70	白磁	皿	10.2	4.8	2.5～ 2.9	(釉) 明オリーブ灰		回転ナデ ケズリ	回転ナデ 掻き取り	白色精良	III-1類	199737 -000138
71 第9図	SK70	白磁	碗	—	6.1	(2.4)	(釉) 明オリーブ灰		ケズリ	回転ナデ 櫛目文	黒色粒子を含む灰白色精 良	V-4類	199737 -000137
72 第9図	SK70	白磁	合子	8.0	6.0	1.7	(釉) 灰オリーブ		回転ナデ 花文・蓮弁	回転ナデ	灰白色精良		199737 -000140
73 第9図	SK75	土師器	小皿	8.5	6.8	0.9	灰褐	灰褐	ヨコナデ 糸切り	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(金雲母)		199737 -000144
74 第9図	SK75	土師器	杯	16.0	11.8	3.2	にぶい橙	にぶい橙	ヨコナデ 糸切り+板目	回転ナデ→ 静止ナデ	微砂粒(多量の金雲母、少 量の赤色粒子)		199737 -000146
75 第9図	SK75	白磁	四耳壺	12.5	—	(5.5)	(釉) 淡青		回転ナデ ケズリ	回転ナデ ケズリ	黒色粒子を含む灰白色精 良	III類	199737 -000147
76 第9図	表採	土師器	小皿	9.4	6.6	1.6	灰白 灰	灰白 灰	ヨコナデ 糸切り	回転ナデ→ 静止ナデ	ほぼ精良		199737 -000162
77 第9図	表採	瓦器	碗	19.4	8.5	6.0	灰	灰	ミガキ ケズリ ヘラ切り	ミガキ	精良	肥後型か	199737 -000161
78 第9図	表採	白磁	皿	—	7.0	(0.8)	(釉) 明オリーブ		回転ナデ ケズリ	回転ナデ	灰白色精良	IX類	199737 -000167
79 第9図	表採	白磁	四耳壺	—	7.6	(6.9)	(釉) 乳白		回転ナデ ケズリ	回転ナデ ケズリ	灰色精良	III類	199737 -000168
80 第9図	表採	須恵器	甕	32.5	—	(6.4)	灰	灰	回転ナデ 格子目叩き	回転ナデ ナデ	砂粒(角閃石、長石、雲母)		199737 -000159

SK40出土遺物（第8図，図版5） 28は糸切り底の土師器小皿で、全体に薄手に仕上がっている。焼成不良。29・30は瓦器碗で、29は胎土がやや粗く、30は真っ直ぐに立ち上がる高台を有する。

SK55出土遺物（第8図，図版5・6） 34～39は糸切り底の土師器小皿である。34は見込みに油煙状の炭化物が付着しているが二次的なものである。37は器形がやや歪む。38は底部に打ち欠きによる穿孔が施される。44は口縁部の破片資料であるが、越州窯系青磁の小碗と考えられる。45は棒状土製品である。瓦器碗生産に関連する遺物であり、本遺跡では1点のみ出土した。なお久留米市内では大善寺町所在の蓮輪遺跡（註2）や、城島町所在の上青木北大門遺跡（註3）などにおいて出土例がある。

SK60出土遺物（第9図，図版6） 46～48は土師器小皿で、47は口縁端部の沈線と厚手の底部などの特徴から広義の京都系土師器と考えられる。49は丸底杯で内面にはコテ当ての痕跡が明瞭に認められる。53は瓦器皿で内外面ともに細かいミガキが施される。54は白磁碗でV類もしくはⅧ類の口縁部である。56は白磁皿で焼成はやや甘く、分類は今一つ判然としない。

SK65出土遺物（第9図，図版6・7） 58の台付小皿は底部に渦巻状の痕跡が顕著に認められる。59は褐釉四耳壺の肩部で波状文が施される。

SK70出土遺物（第9図，図版7・8） 60～64は小皿、65～68は杯で、いずれも底部は糸切りである。また66・67・68の杯の口縁部には各1箇所づつ、成形段階で意図的に設けられたと考えられる低い段差が認められる。72は合子の蓋で、外面には型押しによる花文と蓮弁が施される。

SK75出土遺物（第9図，図版7） 74は土師器杯で、底部外面には強い凹凸が認められる。75は白磁四耳壺で、口縁端部は大きく垂れ下がる。

表採資料（第9図，図版7） 77の瓦器碗は外面体部下半にケズリの痕跡が認められ、肥後型に属する可能性がある。78は白磁皿Ⅸ類で、今回の調査で出土した遺物の中では比較的新しい段階の資料である。79は白磁四耳壺の底部である。80は須恵器甕の口縁部で、外面には格子目タタキが施される。

註2 近澤康治ほか編 1994 『大善寺北部地区遺跡群Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第92集 久留米市教育委員会

註3 白木守編 2006 『上青木北大門遺跡』久留米市文化財調査報告書第237集 久留米市教育委員会

4. ま と め

今回の調査は道路拡張に伴うもので、調査区も幅4m足らずと非常に狭い範囲の調査であった。西区では後世の削平の影響もあり、近世以前の遺構は皆無であったものの、東区においては溝や土坑、ピットなどが密集して検出された。ここでは限られた出土遺物や遺構の先後関係から得られた情報を元に遺構の変遷を整理し、今回の報告のまとめとしたい。

（1）遺構の変遷について

土坑や溝出土の遺物を見てみると、輸入陶磁器では白磁が主体（特に碗Ⅳ・Ⅴ類）を占め、土師器ではヘラ切りと糸切りが混在しているなど、概ね12世紀代の特徴を示している。土師器供膳具の底部処理によって遺構の新古関係を整理すれば、最も先行するのはヘラ切りが主体もしくは量的に上回るSK35・60・65であり、遺構の切り合いからSK65はSK60より先行することが判明している。次いでヘラ切りと糸切りがほぼ同程度見られるSD20が続くものと考えられる。SK40・45はわずかにヘラ切りを含むものの、基本的に糸切りが主体であり、12世紀半ば～後半に位置付けられるものであろう。またSD50及びSK30・55・70・75は全て糸切りで占められており、このうちSK70・75はSD50より後出する。

これらの遺構は12世紀後半に位置付けられる。本調査区の北隣で実施した第14次調査（註4）では12～13世紀の土坑・溝・建物跡などが重複して検出されており、出土遺物や立地などから筑後国府IV期国庁に勤務した官人の居宅が一带にあった可能性も考えられている。今回の調査で確認された遺構や遺物も、当然のことながらIV期国庁と深く関わるものであろう。

（2）SK70出土の土師器杯について

特筆すべき遺物として、SK70より出土した杯3点（第9図66～68）が挙げられる。いずれも口唇部に段を1箇所（68のみ段の方向が異なる）有しており、この段差は2mmにも満たない低いものであるが、一般的な供膳具には見られないものである。同一遺構からの複数枚出土といった観点からみれば、これは製作工程において生じた失敗品や、いわゆる下手な工人によって作られたといったような偶発的なものではなく、やはり成形時に意図的に付けられた可能性が高いものと考えられる。胎土・色調・調整・法量などは同時期の杯と比べても差異は認められない。あまりにも些細な部分でもあるため、何か特別な意味があるのかどうかの判断も下しかねるが、類例についてご教示いただければ幸いである。（白木）

註4 白木守編 1998 『二本木遺跡 - 第14・15次調査 - 』久留米市文化財調査報告書第143集 久留米市教育委員会

第3表 二本木遺跡第13次調査出土遺物一覧表（1）

SD1	土 師 器 小皿3、杯2、土鍋1、把手1 青 磁 龍碗1類1 近代陶磁器 磁器碗・皿15、陶器碗・皿・擂鉢8 瓦 平瓦3 そ の 他 ビー玉1	SX10	黒色土器 A類1 須 恵 器 鉢1、甕1 瓦 器 碗5 近代陶磁器 細片2	SD20	土 師 器 小皿・杯・碗・甕415 須 恵 器 甕8、壺1 黒色土器 A類11、B類4 瓦 器 碗66 白 磁 碗IV類5、碗18、皿VI類1 石 製 品 石鍋1、石核(サヌカイ)1
SX2	土 師 器 細片2 近代陶磁器 鉢1	SP11	土 師 器 甕1 白 磁 碗IV類1	S-21	土 師 器 碗・小皿7
S-3	土 師 器 細片1 瓦 平瓦1 そ の 他 ビー玉1、ボタン2	S-12	土 師 器 細片25 黒色土器 B類3 瓦 器 碗3 白 磁 碗IV類1、碗2、皿1	S-22	土 師 器 細片1
S-4	土 師 器 小皿17 黒色土器 A類3、B類1	S-13	土 師 器 小皿・杯60 黒色土器 B類1 瓦 器 碗3	S-23	土 師 器 小皿2 黒色土器 A類1
SX5	土 師 器 甕1 瓦 器 細片1 近代陶磁器 細片21 そ の 他 歯ブラシ1	S-14	土 師 器 小皿・杯5	SP24	土 師 器 小皿・甕17 瓦 器 碗3 白 磁 皿III類1、皿1
S-6	土 師 器 小皿11	SD15	土 師 器 細片5	SD25	土 師 器 小皿・杯・甕84 須 恵 器 こね鉢1、細片1 瓦 器 碗2 白 磁 碗1 近代陶磁器 細片3
S-7	土 師 器 小皿・杯31 黒色土器 A類2、B類1	S-16	土 師 器 小皿・杯・甕60 須 恵 器 細片2 黒色土器 A類1、B類4 瓦 器 碗10 白 磁 碗1、皿1	S-26	土 師 器 杯・甕4
S-8	土 師 器 細片10 須 恵 器 細片1	S-17	黒色土器 A類1	S-27	土 師 器 杯・甕9
S-9	土 師 器 細片5 瓦 器 碗1	S-18	土 師 器 杯2	S-28	(欠 番)
SX10	弥生土器 細片1 土 師 器 小皿・杯46	S-19	土 師 器 小皿・杯14 瓦 器 碗5	SP29	土 師 器 小皿・杯・鉢・甕26 瓦 器 碗2 白 磁 碗IV類1

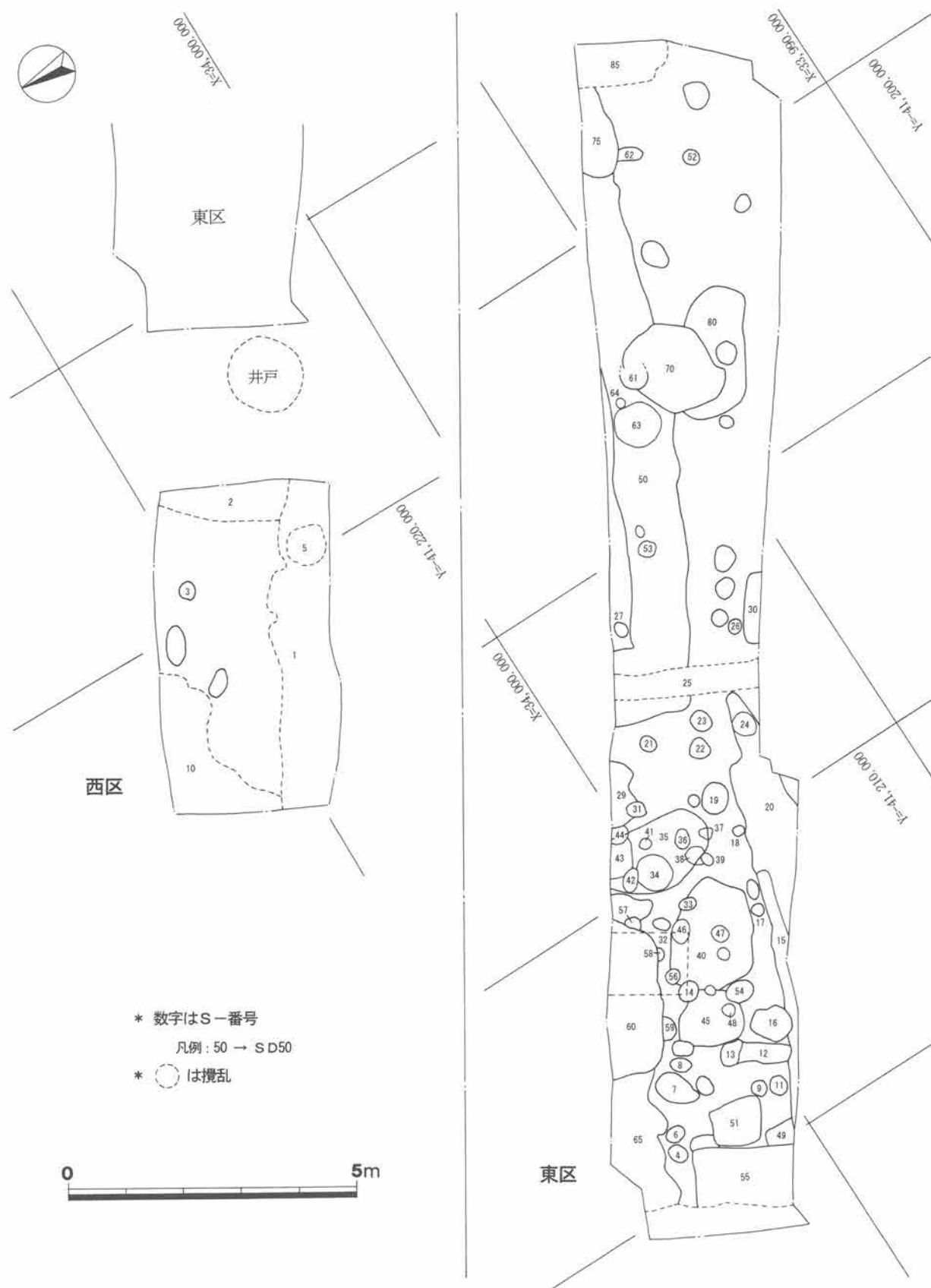
第4表 二本木遺跡第13次調査出土遺物一覧表（2）

SK30	土師器 小皿・細片7 瓦器 碗2 白磁 碗IV類1
SP31	土師器 小皿・杯・細片50 須恵器 鉢?1
SX32	土師器 小皿・杯・甕・細片65 須恵器 甕1、細片1 瓦器 碗2 近代陶磁器 細片6
S-33	土師器 小皿・杯28 黒色土器 B類1 瓦器 碗1 土製品 粘土塊1
S-34	土師器 杯・甕13 瓦器 碗1
SK35	土師器 小皿・杯・皿・碗・細片69 黒色土器 B類1 瓦器 碗5 白磁 碗IV類1
S-36	土師器 細片2
S-37	瓦器 碗1
S-38	土師器 甕1、細片1 黒色土器 B類1
S-39	土師器 杯・細片4
SK40	土師器 小皿・杯・土鍋・細片604 須恵器 甕4、杯1 黒色土器 A類8、B類14 瓦器 碗67、皿2 白磁 碗V類1、碗3、皿1 輸入陶器 壺1
S-41	土師器 小皿3
S-42	土師器 小皿・甕7 黒色土器 B類1
S-43	土師器 小皿3 黒色土器 B類1 瓦器 碗1
S-44	土師器 小皿2
SK45	土師器 小皿・杯・細片84 黒色土器 B類2 瓦器 碗8 青磁 龍碗1 輸入陶器 壺1
S-46	土師器 細片1
SP47	土師器 杯・細片16 瓦器 碗1 輸入陶器 壺1
S-48	土師器 杯2
S-49	土師器 小皿・杯15 瓦器 碗4
SD50	土師器 小皿・杯・碗・土鍋・細片1702 須恵器 甕2、鉢2 黒色土器 A類3、B類5 瓦器 碗68 白磁 碗II類2・V類6・VII類1・細片12、皿IX類1、合子1 青磁 龍碗6・皿3、同碗2 輸入陶器 壺1、盤1 土製品 粘土塊6 石製品 石鍋2、滑石加工品1、剥片(チャート)1 その他 縄文土器1、丸瓦1、鉄滓1、銅製品1
S-51	土師器 小皿・杯・甕35 黒色土器 B類1 瓦器 碗2
S-52	土師器 小皿1
S-53	土師器 小皿1
S-54	土師器 小皿・杯・甕5
SK55上層(黒色土)	土師器 小皿・杯・土鍋・細片546 須恵器 甕2、東播系捏鉢1 黒色土器 B類5 瓦器 碗53 白磁 碗V類3、細片3 青磁 越碗1、龍碗2、同碗3 土製品 棒状土製品1、粘土塊3 石製品 石鍋1
SK55下層(ブロック混入土)	土師器 小皿1、杯1
S-56	土師器 杯・甕13 黒色土器 B類1
S-57	土師器 杯・甕3
S-58	土師器 小皿・細片5 黒色土器 A類1
S-59	土師器 杯・細片8 黒色土器 B類2 瓦器 碗1
SK60	土師器 小皿・杯・碗・甕・細片2249 須恵器 甕9 黒色土器 A類15、B類24 瓦器 碗140、小皿2
SK60	白磁 碗V類2・VII類1・細片17、皿1 輸入陶器 壺2 国産陶器 常滑焼大甕1 土製品 不明土製品1、粘土塊4 石製品 石鍋1、剥片(黒曜石)1
SK60・P1	土師器 細片1
S-61	土師器 小皿・杯・細片40 瓦器 碗1
S-62	土師器 細片2 白磁 細片1
S-63	土師器 小皿・杯15
S-64	土師器 小皿1
SK65	土師器 小皿・托・碗・細片455 須恵器 甕1、壺1 黒色土器 A類2、B類9 瓦器 碗35 白磁 細片2 輸入陶器 壺1 土製品 粘土塊2 石製品 石鍋1
SK70	土師器 小皿・杯・碗・甕・土鍋・細片1506 須恵器 甕5、壺3、蓋1、東播系捏鉢1 黒色土器 A類10、B類11 瓦器 碗22、小皿1 白磁 碗II類1・IV類1・V類8・細片10、皿II類1・III類1、合子1 土製品 フイゴ1、壁土7 石製品 石鍋2
SK75	弥生土器 甕1 土師器 小皿・杯・甕・細片331 須恵器 甕1、東播系捏鉢1 黒色土器 A類1、B類2 瓦器 碗22、小皿1 白磁 碗V類1・細片2、四耳壺1 青磁 龍碗1・壺1、同碗1 国産陶器 常滑焼大甕2 土製品 粘土塊1
SX80(樹木倒壊痕)	(遺物なし)
SK85	土師器 小皿・杯・甕・細片83 白磁 碗細片1 近代陶磁器 磁器片3、陶器片3 石製品 剥片(黒曜石)1 その他 レンガ片1
表採	弥生土器 甕1 土師器 小皿・杯・細片125 須恵器 杯1、甕1 黒色土器 B類1 瓦器 碗8、小皿2 白磁 碗IV類6・V類6、皿IX類1、四耳壺1 青磁 龍碗II類1・細片1・皿1、同碗1

【凡例】 * 数字は破片点数

* 青磁の越は越州窯系青磁、龍は龍泉窯系青磁、同は同安窯系青磁

Ⅱ. 二本木遺跡（第13次調査）



Ⅲ. 赤司定格遺跡（第1次調査）

1. はじめに

今回の調査は、平成17年8月31日、地権者から個人専用住宅建築に伴い「埋蔵文化財包蔵地の有無について（照会）」が提出された（17文財1-323号）ことに端を発する。既存建物の解体を待って、同年10月4日試掘調査を実施、埋蔵文化財の所在を確認する。翌5日、基礎工事が柱状改良工法であるため記録保存が必要である旨回答し、保存に対する理解と協力を求める。同月7日、埋蔵文化財保存に対する協力に応じ、「埋蔵文化財発掘調査の依頼について」が提出される（回答：17文財778号）。建築着工までの余裕が全くなく、取り急ぎ準備し、同月11日、調査に着手した。

平成17年10月11日、0.25BFを使用し、表土剥ぎを実施する。廃土場が十分に確保できないことと、時間的な制約により、対象面積150㎡に対して、幅2.5～4.5m×長さ25.5m（調査面積50㎡）

のトレンチ調査状にならざるをえなかった。そのため、遺構は全て完掘することはできなかった。同月25日、0.25BFを使用し、埋め戻し作業を実施、翌26日、現場器材を撤収し、全ての現場作業を終了した。



第11図 調査地点の位置と周辺地形図（1/5,000）

2. 位置と環境

赤司定格遺跡は、福岡県久留米市北野町赤司字定格に所在する。

当該遺跡は、陣屋川と池田川に挟まれた標高11m前後の微高地上に立地する。ただし、周辺の調査成果から、本来は現在よりも1.5～2m程度高かったことがわかっている。当調査地点から南西に赤司八幡宮と納骨堂が所在するが、前面の道路よりも2m程度高く、当時の標高はこの2地点が示している。当該遺跡は赤司集落の中に位置するが、赤司集落の東側にはなだらかな水田地帯が広がっている。旧北野町域の場合、水田は筑後川の氾濫原を利用していることが多く、比較的標高が低い地形が多い。しかし、この水田地帯は東側に向かって低くなっているわけではなく、むしろ遺跡の分布が広がっている。良積遺跡から東に向かって、可住地域として絶好の立地条件になっている。

旧北野町域は縄文時代晩期から始まる。定格遺跡（注）や良積遺跡に遺構や遺物がみられる。ただし、当該時期の遺跡は大城校区に分布の範囲が限られているため、未だ人口は少なく活動の範囲も狭かったと思われる。

Ⅲ. 赤司定格遺跡（第1次調査）

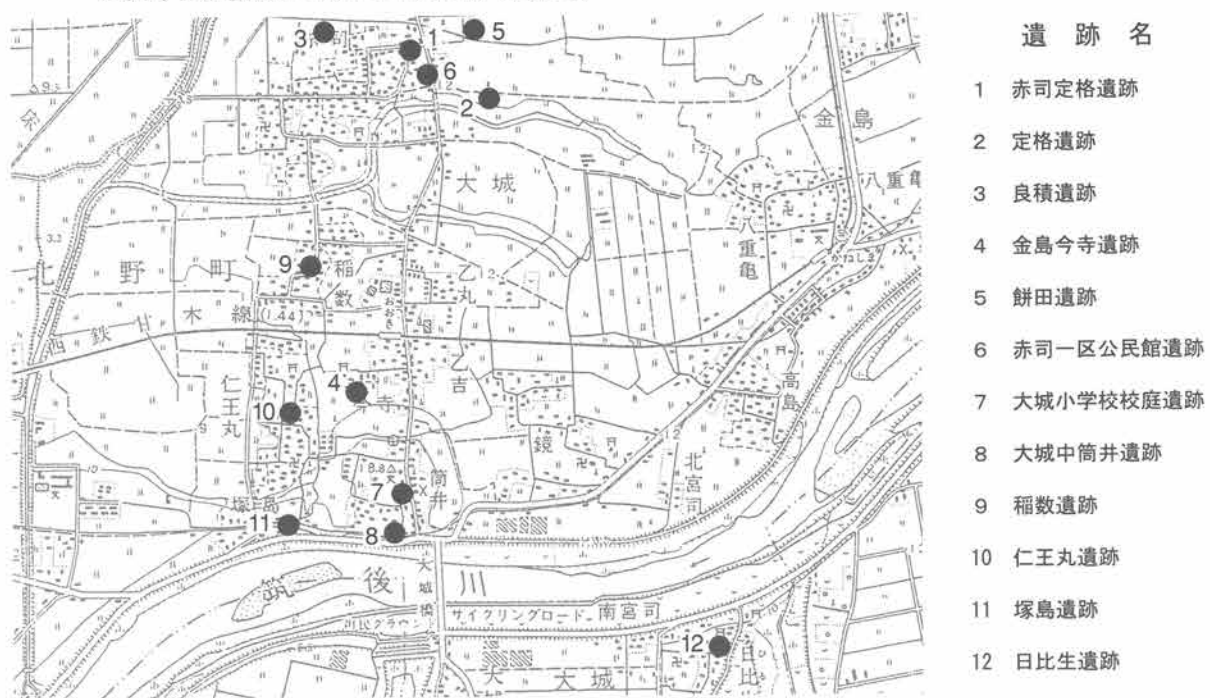
弥生時代前期、遺跡の分布は縄文時代晩期とほぼ重なる。前述した良積遺跡では環濠集落が継続し、遺物の量がやや増加を始める。良積遺跡の南500mに位置する金島今寺遺跡では、弥生時代前期の甕棺墓9基が検出されている。弥生時代前期末～中期初頭になると、旧北野町域では、当該時期の指標になるべき遺物が出現する。メノウ石器と呼んでいるものである。石英質の白メノウを石材とし、主にドリルやオールをつくり、石鏟やスクレーパー、楔形石器などもみられる。

弥生時代中期前半～後期前半、遺跡の分布は急激な広がりを見せる。おそらく、水田経営の安定化に伴う人口の爆発的な増加が想定されるのであろう。良積遺跡をはじめ、餅田遺跡（甕棺墓）、赤司一区公民館遺跡（集落）、金島今寺遺跡（集落）、大城小学校校庭遺跡（集落）、大城中筒井遺跡（甕棺墓及び水田）、稲数遺跡（集落）、仁王丸遺跡（集落及び墓地、半島系無紋土器）、塚島遺跡（集落及び墓地、支石墓）、などがあげられる。仁王丸遺跡にみられる半島系無紋土器や塚島遺跡の支石墓に象徴される半島からの人口の流入が水稻耕作の安定的な生産力を確保し、多量の甕棺墓や日比生遺跡の銅矛を生み出したと考えられる。

後期前半に乱立的なまでに広がりを見せた遺跡の分布も、後期中頃になると、急速的に収縮をはじめ、良積遺跡への集住化が観察される。20km²の旧北野町域にあって、当該時期の遺跡は、良積遺跡以外、未だ確認されていない。倭国大乱を越え、弱体化した集落はより強大な集落に吸収され、さらに強大な集落を形成するため、単独集落への集住化が始まったと考えられる。

拠点集落として繁栄を誇った良積遺跡も、古墳時代初頭をもって消滅する。「膨らみすぎた風船は割れるしかなかった」と考えられる。ただし、古墳時代前期～中期の遺跡が未だ発見されず、良積遺跡の人口がどのように拡散していったのかが謎である。古墳時代前期～中期は旧北野町域において空白の時期になってしまっている。

（注）今回調査した赤司定格遺跡は北野町赤司字定格であるが、定格遺跡（北野町文化財調査報告書第1集）は北野町乙丸字定角であり、定格遺跡調査当時に字名の混同がみられる。



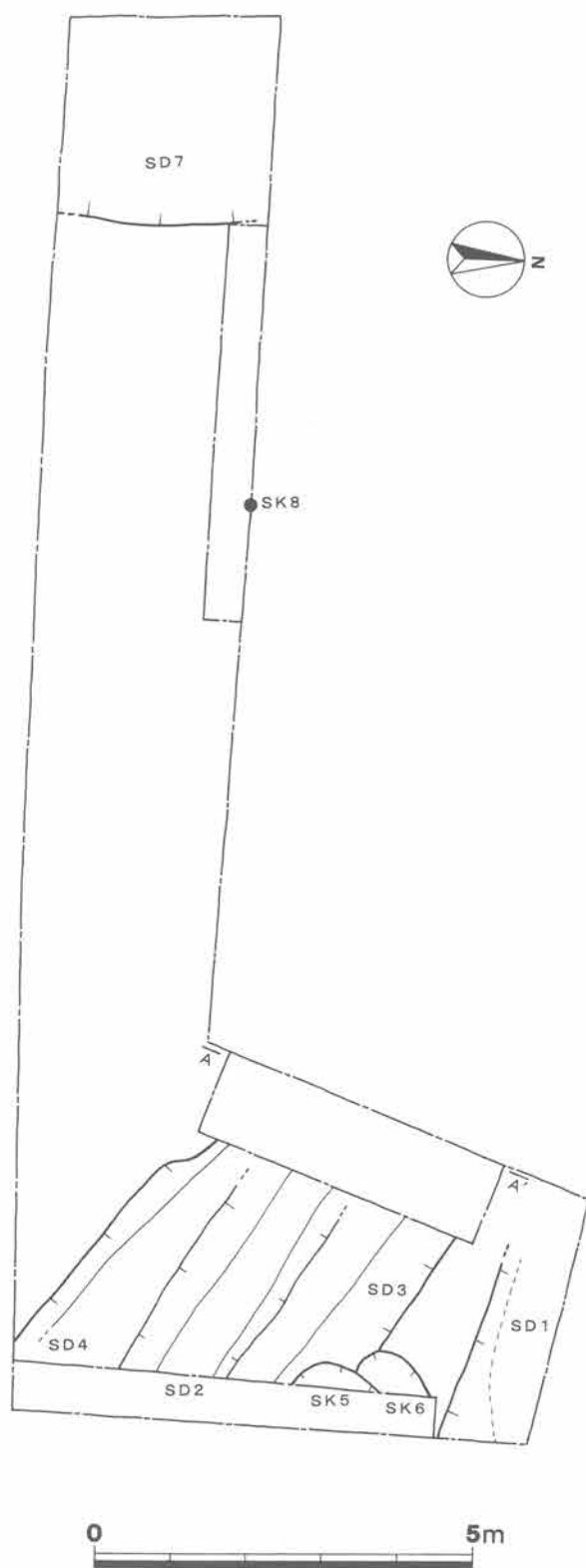
第12図 周辺の遺跡分布図（1/25,000）

3. 調査の記録

a. 調査の概要

検出した遺構は、土坑3基、溝状遺構4条である。遺構の大半が東側に集中し、西側にあるのは、胞衣埋納遺構と近世?近代の溝状遺構のみである。

基本土層は、現況GLから－110cmまでが宅地造成時の盛土層（近世以降）であり、その下に旧表土（耕作土）が確認される。耕作土とそれに伴う床土を挟み、－150cmまで中世～近世の包含層（茶褐色粘土層）を形成し、遺構確認面に至る。ただし、調査区西側では遺構検出面から－185cmまで黒色粘土層が堆積する。この黒色粘土層は遺物を全く含まず、いわゆる「遺物包含層」とは全く性質が異なる。－185cm以下は赤褐色粘土の基盤層となっている。弥生時代前期の溝状遺構がこの黒色粘土層上面から掘り込まれている点で、それ以前に形成された地層であることがわかる。



第13図 赤司定格遺跡第1次調査遺構配置図（1/100）

b. 遺構の概要

SD 1（第13図）

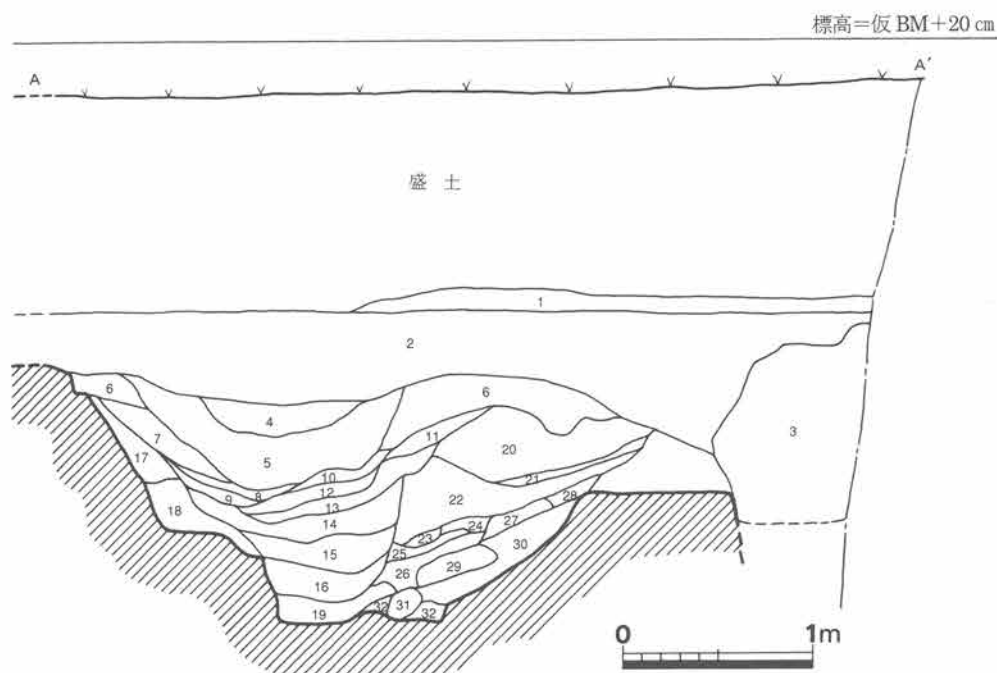
中世の溝状遺構。調査区北端に位置するため、幅、深さともに不明。図化はできなかったが、中世の磁器片が出土したため、当該時期と判断した。

SD 2（第13・14図）

北西－南東に主軸をとり、幅1.5～2.1m、深さ0.8～1.1mを測る溝状遺構。弥生時代中期の土器を出土する。上面検出の際、便宜的に別の溝状遺構として取り扱ったが、SD 3（SD 4）の掘り直しの可能性も考えられる。

SD 3（第13・14図）

便宜的に別の溝状遺構として取り扱ったが、結果的にはSD 4と同一の溝状遺構となった。SD 2と同一の主軸をとり、幅3.1～3.8m、深さ1.2～1.4mを測る溝状遺構。弥生時代前期～中期の土器を出土する。埋土中層に人為的に埋めたとされるブロック状の土層が確認できる。



- | | |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 1 黄褐色土（マンガン分が多量沈着、締り弱、旧耕作土） | 18 黒色土（灰色土を少量含む、締り非常に弱い） |
| 2 褐色土（多量のマンガン分と少量の炭化物を含む、締りやや弱い） | 19 黒色土（多量の灰色土を含む、締り非常に弱い） |
| 3 青灰色粘質土（少量の黄色土ブロックを含む、締りやや弱い） | 20 黄褐色土（多量のマンガン分と少量の暗褐色土を含む、締り弱） |
| 4 褐色土（少量の炭化物を含む、締り強） | 21 黄褐色土（多量の暗褐色土を含む、締り弱） |
| 5 褐色土（多量のマンガンと白色物、炭化物を含む、締り強） | 22 黄褐色土（マンガン分と少量の黒色土を含む、締り弱） |
| 6 暗褐色土（多量のマンガンと白色物を含む、締り弱） | 23 黒色土（少量のマンガン分を含む、締り弱） |
| 7 褐色土（多量のマンガン分を含む、締り強） | 24 黄褐色土（灰色土を少量含む、締り弱） |
| 8 褐色土（少量の白色物と炭化物を含む、締り弱） | 25 灰色土（黄褐色土を少量含む、締り弱） |
| 9 褐色土（ごく少量の炭化物を含む、締り弱） | 26 黄褐色土（暗褐色土を少量含む、締り強） |
| 10 褐色土（灰色土とマンガン分を多量含む、締り弱） | 27 灰色土（黄褐色土を多量に含む、締り強） |
| 11 灰色土（マンガン分を多量に含む、締り弱） | 28 暗褐色土（灰色土を多量に含む、締り強） |
| 12 褐色土（炭化物を多量、白色物を少量含む、締り弱） | 29 黒色土（灰色土を少量含む、締り非常に弱い） |
| 13 褐色土（灰色土を少量含む、締り弱） | 30 灰色土（黒色土を少量含む、マンガン分を多量含む、締り弱） |
| 14 褐色土（灰色土・黒色土を多量含む、白色物を少量含む、締り弱） | 31 黒色土（灰色土を多量に含む、締り非常に弱い） |
| 15 褐色土（灰色土と黒色土を多量に含む、締り弱） | 32 灰色砂質土（黒色土を少量含む、締り強） |
| 16 褐色土（灰色土と黒色土のブロックを多量含む、締り非常に弱い） | 33 黒色土（包含層、地山） |
| 17 黄褐色土（多量のマンガン分と暗褐色土を少量含む、締り弱） | 34 灰色砂質土（マンガン分を多量に含む、地山） |

第14図 SD 2・3・4土層図（1/40）

SD 4（第13・14図）

先に述べたようにSD 3と同一の溝状遺構。

SK 5（第13図）

SD 3を切る弥生時代後期後半の土坑。約1 mまで掘り下げてみたが、完掘することはできなかった。中期前半の細片が混入しているが、「*」印が刻まれた壺の底部が出土し、後期後半と判断できる。規模や平面形は不明であるが、埋土はさらに1 m以上続き、良積遺跡の隣接地で後期後半という時期を考慮すれば、井戸の可能性はある。

SK 6（第13図）

出土遺物がないため時期判断ができない土坑。ただし、遺構の切り合い関係から、SD 3（及びSD 4）より新しくSK 5より古いことから、弥生時代中期後半～後期中頃であろう。規模や平面形、用途は不明。

SD 7（第13図）

近世～近代の溝状遺構。あるいは濠状遺構と呼んだ方が適切かもしれない。

SK 8（第13図，図版9）

近世～近代の胞衣壺。盛土層中、現況GLから－40cmで検出された。宅地化の際の盛土層中であつたため、全く注意をはらっておらず、運良く調査区壁面にひっかかった状態で出土した。胞衣壺は2基検出されたが、壺を埋めた土坑を確認することはできず、出土遺物の形態からほぼ同時期と思われる。胞衣壺は、運悪く基礎石（通称、ぐり石）直下にあつたため、蓋は押しつぶされ、完形に復元することはできなかった。

c. 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物量は、コンテナに換算して3箱であり、多くは溝状遺構から出土したものである。遺物は、弥生土器が主体を占め、その他、縄文土器、石包丁、石器剥片なども出土した。

SD 1 出土遺物 図化できるものはなく、須恵器や陶磁器が出土していることから、中世と考えられる。

SD 2 出土遺物（第15図1～21，図版10・11） 当調査の主体となる溝状遺構の上層、あるいは掘り直しから出土した。弥生時代中期の土器は主体をなし、いわゆる「金海もどき」や亀ノ甲式土器を含む。その他、片岩製の石包丁、メノウや黒耀石、サヌカイトの剥片などの石器類も多い。全体遺物量の80%を占める。

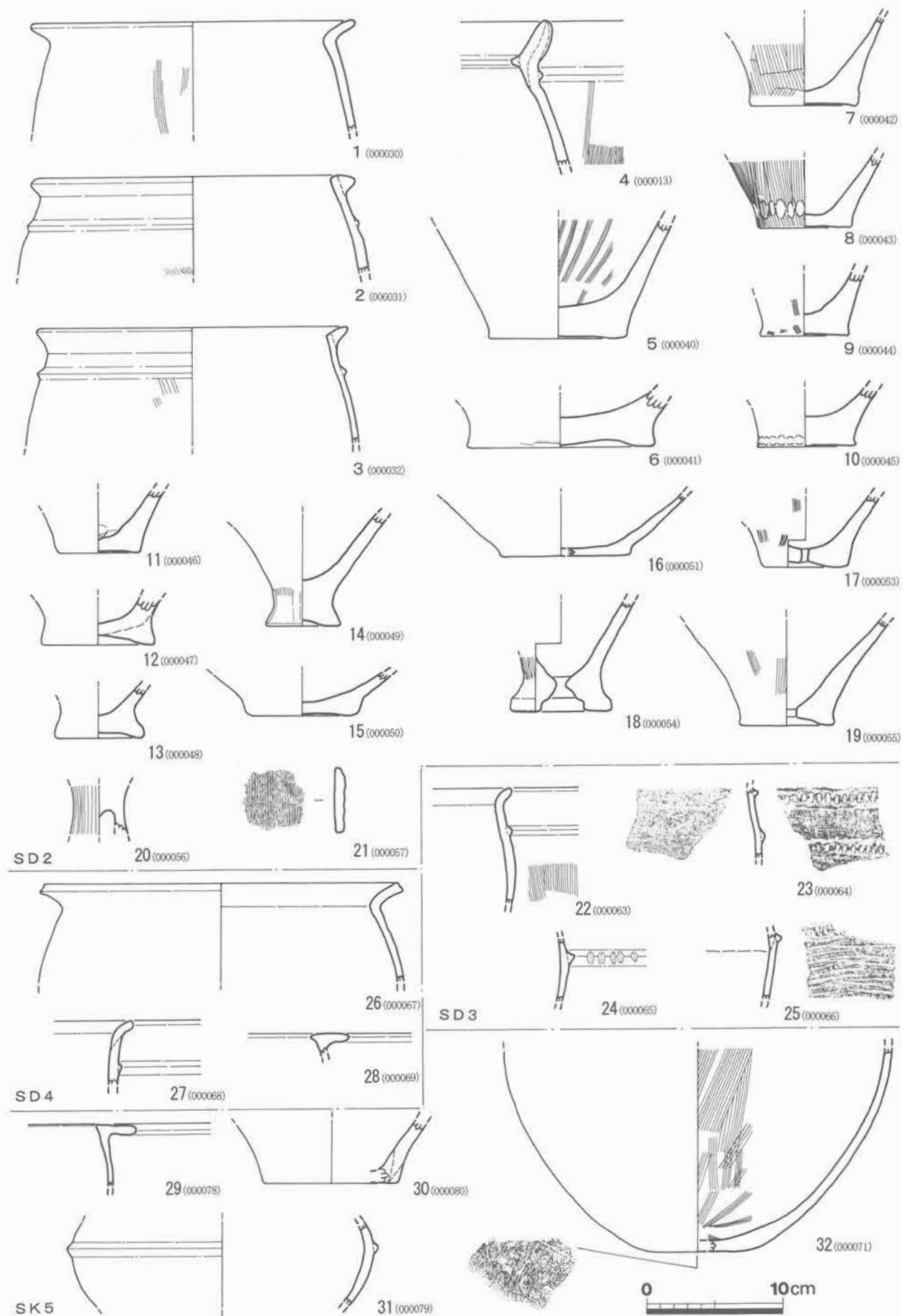
SD 3 出土遺物（第15図22～25，図版11） 当調査の主体となる溝状遺構の下層、あるいは掘り直し前の埋土から出土した。理論上、SD 2よりも古い様相になるはずであるが、やはり弥生時代前記の様相が強く、条痕文をもつ破片も検出されている。出土遺物は少なく、メノウを含まない。

SD 4 出土遺物（第15図26～28，図版11） SD 3と同様に、当調査の主体となる溝状遺構の下層、あるいは掘り直し前の埋土と考えられる。ただし、SD 3とは異なり、SD 3よりもやや新しい様相を示す。あるいは、SD 2と掘り間違えた可能性も考えられる。出土遺物は少なくメノウを含まない点は、SD 3と同様の様相を示す。

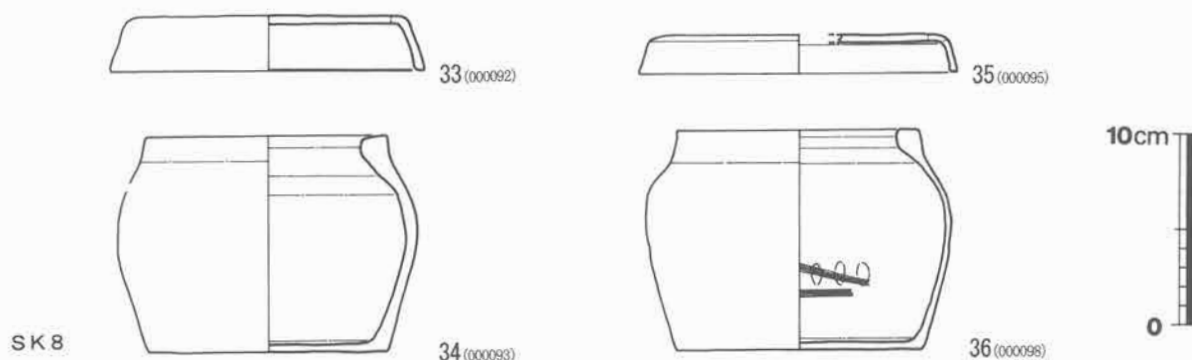
SK 5 出土遺物（第15図29～32，図版11） SD 3と切り合っているため、弥生時代中期の土器が混在しているが、壺の底部が時期決定の決め手になろう。底部外面に「*」印が刻まれている。この種の土器は、良積遺跡に多く見られたが、特定集団内の規制を示すものであるであれば、良積遺跡との関連性が問題となる。

SD 6 出土遺物 わずかに20～30cm程度掘り下げただけであるため、遺物はみられなかった。

Ⅲ. 赤司定格遺跡（第1次調査）



第15図 赤司定格遺跡第1次調査出土遺物実測図① (1/4)



第16図 赤司定格遺跡第1次調査出土遺物実測図② (1/4)

SD7出土遺物 周辺の状況から弥生土器が混在しているものの、近世以降の陶磁器が主体をなす。その他、瓦、かんざし、クスリ瓶なども出土している。明治時代以降に及ぶものが見られ、最終埋没時期を示す。

SK8出土遺物 (第16図33～36, 図版11) 胞衣壺と蓋のセットが2組である。どちらも酷似した様相をもち、一般の流通品と考えられる。久留米城下町遺跡の例から、1800年代～幕末のものと思われる。

4. ま と め

今回は、限られた範囲内のトレンチ調査であったため、多くを語ることはできない。住居跡や墓地などが検出されていればまだしも、溝状遺構のみであればなおさらである。当初の調査目的は、本来は字名から「赤司定格遺跡」と呼ばれるべきであった「赤司一区公民館遺跡」との関係、及び隣接する良積遺跡との関係であった。

当該調査地点は、赤司一区公民館遺跡と異なる様相を示す。赤司一区公民館遺跡が弥生時代中期～古墳時代初頭を主体とするのに対して、当該調査地点は弥生時代前期を主体とする。赤司一区公民館遺跡からは当該調査地点で検出されたような大規模な溝は検出されていない。やはり、旧河道を挟んでいるため、別の集落と考えるべきか。一方、同様の大規模な溝は良積遺跡から検出されている。当該調査地点は、類似性からいえば、良積遺跡により近い様相にみえる。

ただし、最初にお断りしたとおり、今回の少ない成果からこれ以上論じることが困難である。確かに、当該調査地点と良積遺跡からは、同様に大規模な溝が検出されている。当該調査地点から北西方向へ溝を延長すると、溝は良積遺跡へ向かう。ただし、良積遺跡では同一方向の溝は検出されていない。単純に、良積遺跡との関係性を述べることはできない。やはり、今後隣接地での調査情報の蓄積を待たねばならないようである。

(本田)

Ⅲ. 赤司定格遺跡（第1次調査）

第5表 赤司定格遺跡第1次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 [長]	底径 [幅]	器高 [厚]	外面	内面	外面	内面			
1 第15図	SD2	弥生土器	甕	(24.0)	—	(8.2)	浅黄橙		横ナデ、ハケ目	横ナデ、ナデ	大砂粒を含む		200523 000030
2 第15図	SD2	弥生土器	甕	(24.0)	—	(7.2)	褐灰		横ナデ、ハケ目	横ナデ、ナデ	大砂粒を含む		200523 000031
3 第15図	SD2	弥生土器	甕	(23.0)	—	(8.5)	黒褐		横ナデ、ハケ目	押え、ナデ	大砂粒を含む		200523 000032
4 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	—	(10.5)	にぶい赤褐		横ナデ、ハケ目	横ナデ、ナデ	大砂粒を含む		200523 000013
5 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	10.2	(8.7)	にぶい橙		ナデ	ナデ	大砂粒、赤色粒子を含む		200523 000040
6 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	13.9	(4.0)	灰白～褐灰		ナデ、ハケ目	ナデ	大砂粒を含む		200523 000041
7 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	8.0	(6.5)	灰褐		ハケ目、ナデ	ナデ	大砂粒を含む	内面にスス付着	200523 000042
8 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	7.0	(5.3)	褐灰		ハケ目、押え	ナデ	大砂粒を含む	内面底部にスス付着	200523 000043
9 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	6.4	(4.6)	褐灰～黒褐		ハケ目	ナデ	大砂粒を含む		200523 000044
10 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	7.0	(4.2)	灰褐		ナデ	ナデ	大砂粒を含む		200523 000045
11 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	6.0	(4.5)	淡赤橙		ハケ目	ナデ	大砂粒を含む		200523 000046
12 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	8.4	(3.5)	橙		ナデ	ナデ	大砂粒を含む		200523 000047
13 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	6.4	(3.8)	灰白～褐灰		ナデ	ナデ	大砂粒を含む		200523 000048
14 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	5.4	(3.2)	明褐灰～褐灰		ハケ目→ミガキ	ナデ	大砂粒を含む	黒斑	200523 000049
15 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	7.2	(3.2)	黒褐、灰褐		ナデ	ナデ	大砂粒を含む	二次焼成	200523 000050
16 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	(9.0)	(4.5)	浅黄橙		ナデ	ナデ	大砂粒を含む	底部外面片側に黒斑	200523 000051
17 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	7.0	(8.0)	橙、にぶい褐		ハケ目、ナデ	ナデ	大砂粒を含む	内面にスス付着	200523 000053
18 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	6.0	(5.3)	褐灰、にぶい橙		ハケ目、押え	ナデ	大砂粒を含む	直径5mm程度の穿孔	200523 000054
19 第15図	SD2	弥生土器	甕	—	7.0	(7.8)	にぶい橙、橙		ハケ目、ナデ	ナデ	大砂粒を含む	穿孔	200523 000055
20 第15図	SD2	土師器	高杯	—	—	(3.8)	橙		ケズリ	ナデ	微砂粒(長石・雲母)		200523 000056
21 第15図	SD2	弥生土器	メンコ	—	—	4.75	黒褐		ナデ	ナデ	大砂粒を含む		200523 000057
22 第15図	SD3	弥生土器	甕	—	—	(9.0)	褐灰、黒		横ナデ、ハケ目	横ナデ	大砂粒を含む	外面にスス付着	200523 000063
23 第15図	SD3	弥生土器	甕	—	—	(5.7)	灰褐、黒褐	にぶい橙～にぶい褐	条痕文	条痕文	大砂粒を含む		200523 000064
24 第15図	SD3	縄文土器	深鉢	—	—	(4.9)	黒		ナデ	ナデ	大砂粒を含む 赤色砂粒を多く含む		200523 000065
25 第15図	SD3	縄文土器	深鉢	—	—	(5.2)	暗褐		条痕文	ナデ	大砂粒を含む		200523 000066
26 第15図	SD4	弥生土器	甕	(29.0)	—	(7.8)	灰褐～にぶい橙		横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	大砂粒を含む		200523 000067
27 第15図	SD4	弥生土器	甕	—	—	(5.0)	明赤褐、にぶい赤褐		横ナデ	横ナデ、ナデ	大砂粒を含む		200523 000068
28 第15図	SD4	弥生土器	甕	—	—	(1.8)	にぶい橙		横ナデ	横ナデ	中砂粒を含む		200523 000069
29 第15図	SK5	弥生土器	甕	—	—	(4.5)	明褐灰		横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	大砂粒を含む		200523 000078
30 第15図	SK5	弥生土器	甕	—	(10.0)	(4.6)	明褐灰		横ナデ	横ナデ	大砂粒を含む		200523 000080
31 第15図	SK5	弥生土器	壺	—	—	(6.2)	黒褐		ナデ	ナデ	中砂粒を含む		200523 000079
32 第15図	SK5	弥生土器	壺	—	(7.2)	(14.8)	褐灰～黒	にぶい褐、褐灰	ナデ	ハケ目	大砂粒を含む		200523 000071
33 第16図	SK8	土師器	蓋	(16.6)	14.0	2.9	にぶい橙		回転ナデ	回転ナデ後不定方向のナデ	中砂粒を含む	底面に草による圧痕	200523 000092
34 第16図	SK8	土師器	壺	12.2	12.5	11.3	橙		回転ナデ	回転ナデ後不定方向のナデ	小砂粒を含む	胎衣壺	200523 000093
35 第16図	SK8	土師器	蓋	(16.8)	(15.8)	2.0	橙		回転ナデ	回転ナデ後不定方向のナデ	小砂粒を含む		200523 000095
36 第16図	SK8	土師器	壺	12.8	13.0	11.5	明褐灰		回転ナデ	回転ナデ後ハケ目	小砂粒を含む	胎衣壺	200523 000098

IV. 北山古墳群（第3次調査）

1. はじめに

本調査は、久留米市荒木町白口で実施した発掘調査である。調査地は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い平成18年2月21日より5月31日まで発掘調査を行なった北山遺跡に隣接し、JR鹿児島本線との間に位置する。調査は地権者より、古墳墳丘上の樹木抜根を行ないたいとの相談を受けたことに始まる。抜根による墳丘の破壊や石室への影響を考慮し協議を行なった結果、発掘調査を行なうこととなり、平成18年6月5日、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼書が提出され、平成18年7月27日に埋蔵文化財発掘調査の依頼書が提出され、8月4日より現地における発掘調査を開始する運びとなったものである。

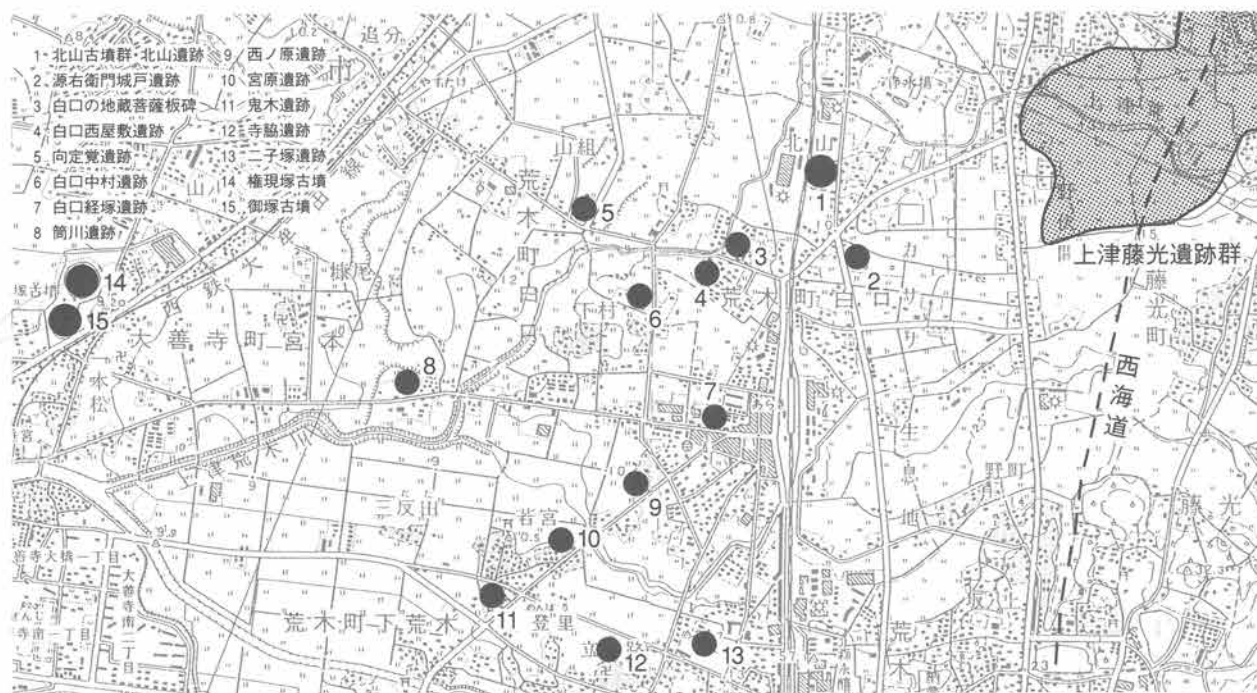
2. 位置と環境

北山古墳群は、久留米市の南部、JR荒木駅より北へ約750mの地点に位置する。地形は、東方の耳納連山より派生する低台地の端部、南北を谷に挟まれた丘陵上に立地し、標高約15mを測る。遺跡は6世紀代の古墳と考えられる北山古墳群の中に位置しており、古墳の大半が消滅したものの調査区の北東には1号墳が現存している。

周辺の遺跡として縄文時代には、一ノ左右遺跡や北山古墳で押型文土器が数点出土している。弥生時代についても前期や中期の状況は未だ明確ではないが、後期になると広川右岸に寺脇・宮原・鬼木遺跡などの集落が営まれる。鬼木遺跡では銅矛1口が出土した他、周辺では大善寺町道蔵遺跡で青銅製鉈・鏃、三潯町高三潯遺跡では銅剣が出土している。その中でも荒木町天神浦遺跡では、江戸時代の溜池造成の際に元禄10年（1697）には13口、享保7年（1722）には5口と2度にわたって埋納されたと考えられる銅矛計18口が出土したことが知られる。墓地としては、向定覚遺跡で中期の甕棺墓群、後期の一ノ左右遺跡では多量のガラス玉を副葬した土壇墓や甕棺墓が発見されている。古墳時代には、6世紀ごろから古墳の築造が始まり、昭和46年に調査された全長15mほどの帆立貝式前方後円墳と見られる北山1号墳をはじめとし、8基の古墳が確認されている北山古墳群、変形獣帯鏡の出土が伝えられ全長50～60mの前方後円墳と考えられる鷲塚古墳、円墳数基があったと伝えられる豆塚古墳群、荒木小学校南西側に所在していた寺脇古墳群、北西部に所在した二子塚古墳（前方後円墳：規模不明）など、多数の古墳が存在していたと伝えられるが、現在そのほとんどが消滅している。集落では荒木今宮脇遺跡で5世紀前半から中ごろの竪穴住居跡3軒、一ノ左右遺跡で5世紀後半の竪穴住居跡、白口経塚遺跡では6世紀後半の竪穴住居跡や土坑が検出されている。特に平成11年度に調査された旗原遺跡においては、6世紀後半から7世紀にかけて営まれた26軒の竪穴住居跡をはじめとする古墳時代の集落が調査され、集落の様相を伺い知る成果が得られている。律令期に入ると、荒木町は三潯郡に属し、『和名抄』の三潯郡八郷にある荒木郷の比定地とされる。白口経塚遺跡では、7世紀末から8世紀中頃の祭祀土器など多数の遺物が出土した土坑・井戸が調査され、荒木郷の中心がこの付近にあったのではないかと推測されている。他には円面硯が出土した西ノ原遺跡、7世紀末から8世紀の遺構を多数検出した旗原遺跡、平安時代の溝などが検出された源右衛門城戸遺跡などが知られ、条里制の痕跡も随所に認められる。平安時代以降は、筑後地方最大の荘園である三潯庄の一部となっている。三潯庄の立券は定かではないが、東寺文書の平治元年（1159）の宝荘厳院注進にはすでにその名が見受けられる。中世の荒木町は、鎌倉御家人として土着した荒木近藤氏が残した史

IV. 北山古墳群（第3次調査）

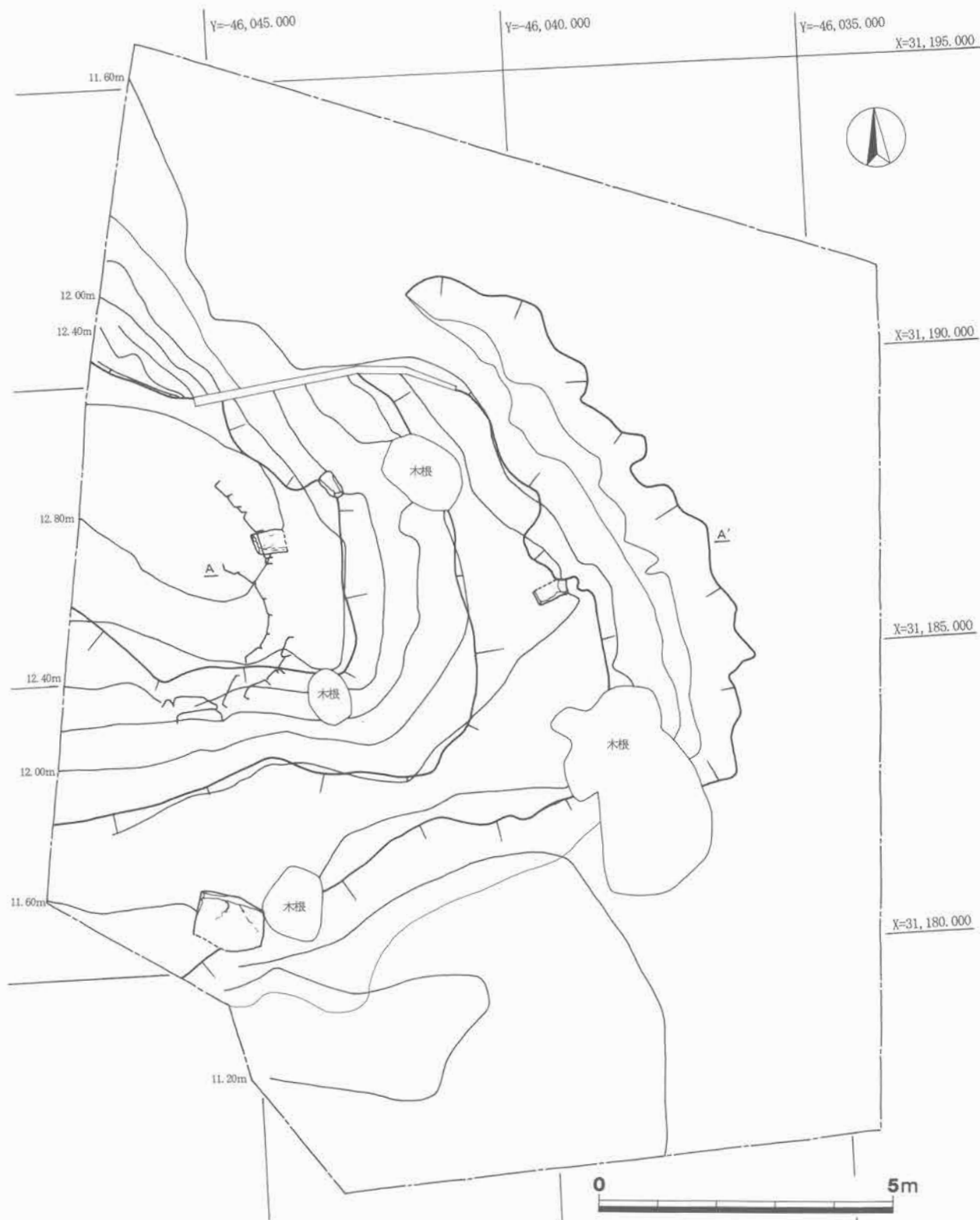
料が残されている。近世には、荒木村は津福組に属し、農村風景が広がっていたようである。



第17図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第18図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)



第19図 北山8号墳墳丘測量図（1／100）

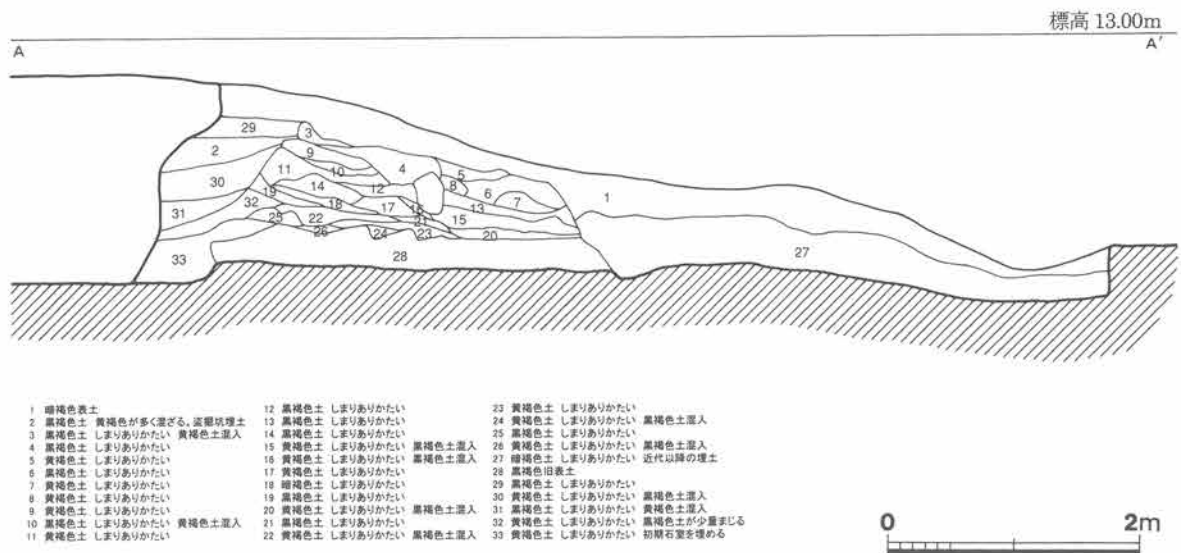
3. 調査の記録

a. 調査の概要

調査地は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い平成18年に発掘調査を行なった北山遺跡に隣接し、JR鹿児島本線との間に位置する。北山古墳群は、昭和54年作成の福岡県遺跡等分布地図に7基の古墳が確認されているが、そのうち6基はJR鹿児島本線整備などのため破壊され消滅している。今回調査した古墳は、台帳未記載の古墳であるため、新たに8号墳とした。調査地は、新幹線工事区間と鹿児島本線に挟まれるため、機材の搬入・設置等の用地を立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局および新幹線施工者である東急・森・澄男特定建設工事共同企業体のご好意により確保され、8月4日より調査を開始した。墳丘上に位置するクスノキ・カシの木は、根元より伐採し人力によって慎重に墳丘を掘り下げ抜根することとした。また調査区は、JR鹿児島本線の線路に隣接し線路との境界には高さ2mを超えるブロック塀が設置されていたため、塀の周辺は安全性確保の為調査を行なわないこととした。このため墳丘および石室は完掘にはいたっていない。調査面積は905㎡である。平成18年8月4日より平板測量と人力によるトレンチ掘削作業を開始した。トレンチは残存する墳丘頂部から南北方向と東方向に設定し、掘り下げを開始した。その後盗掘坑のプランを確認したため、掘り下げを行い石室を検出した。10月18日より31日までの間は、新幹線工事の基礎打ち作業が隣接地で行なわれたため作業を中断した。その後、11月から12月にかけて新幹線工事の進捗状況に合わせて調査を行ない、12月25日に埋め戻しを行い調査を終了した。記録は、写真記録をカラーリバーサル6×7、モノクローム6×7を用いて撮影し、遺構実測は、個別遺構図および土層図を1/20、平板測量図を1/100で作成した。

b. 遺構の概要

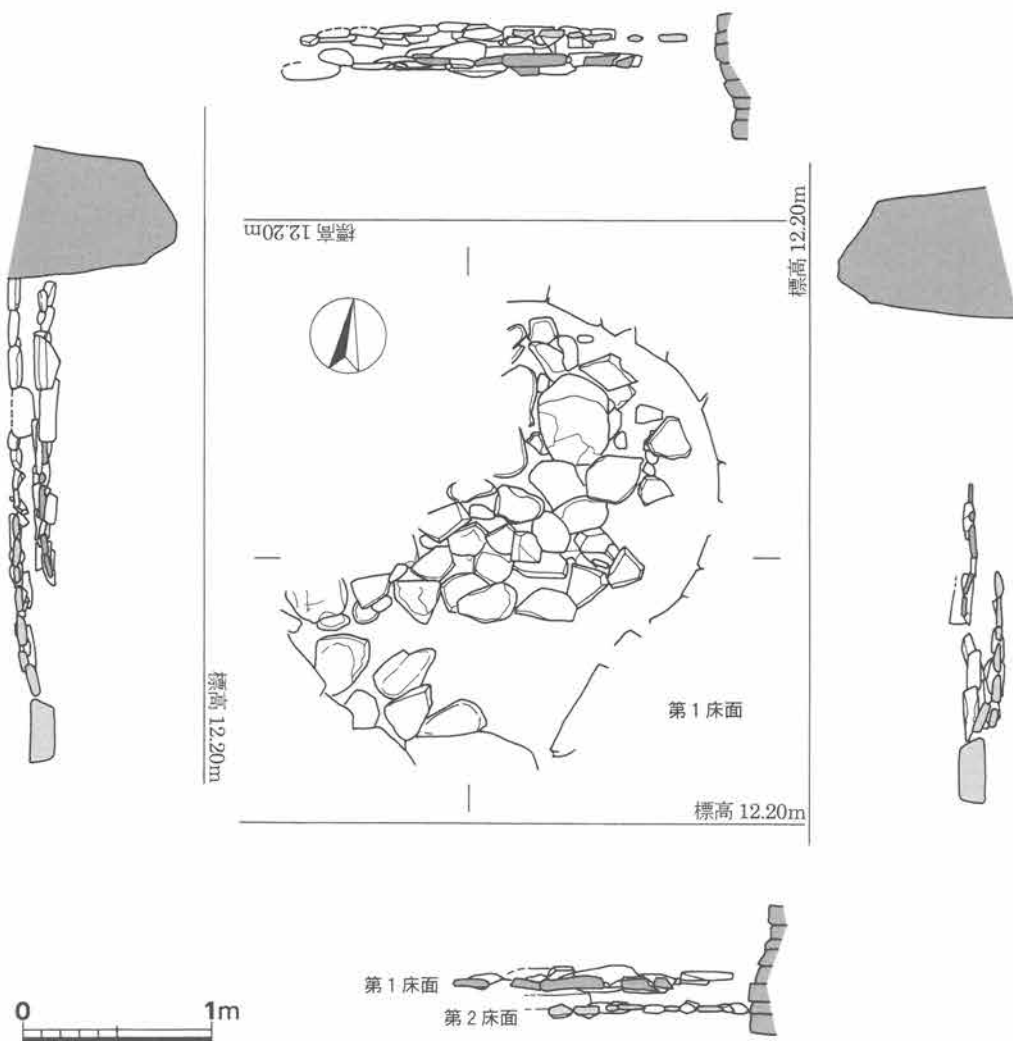
北山8号墳は、住宅の庭に築山として残されていた墳丘であり、調査前の墳丘斜面には、石灯籠や立石が見受けられ石室の天井石らしき巨大な岩も露出していた。墳丘は、西半部と北側はブロック塀によって削平され、東から南にかけて残存していると考えられた。また周溝状の窪みも確認されたが、トレンチ調査の結果周溝ではないことが判明した。



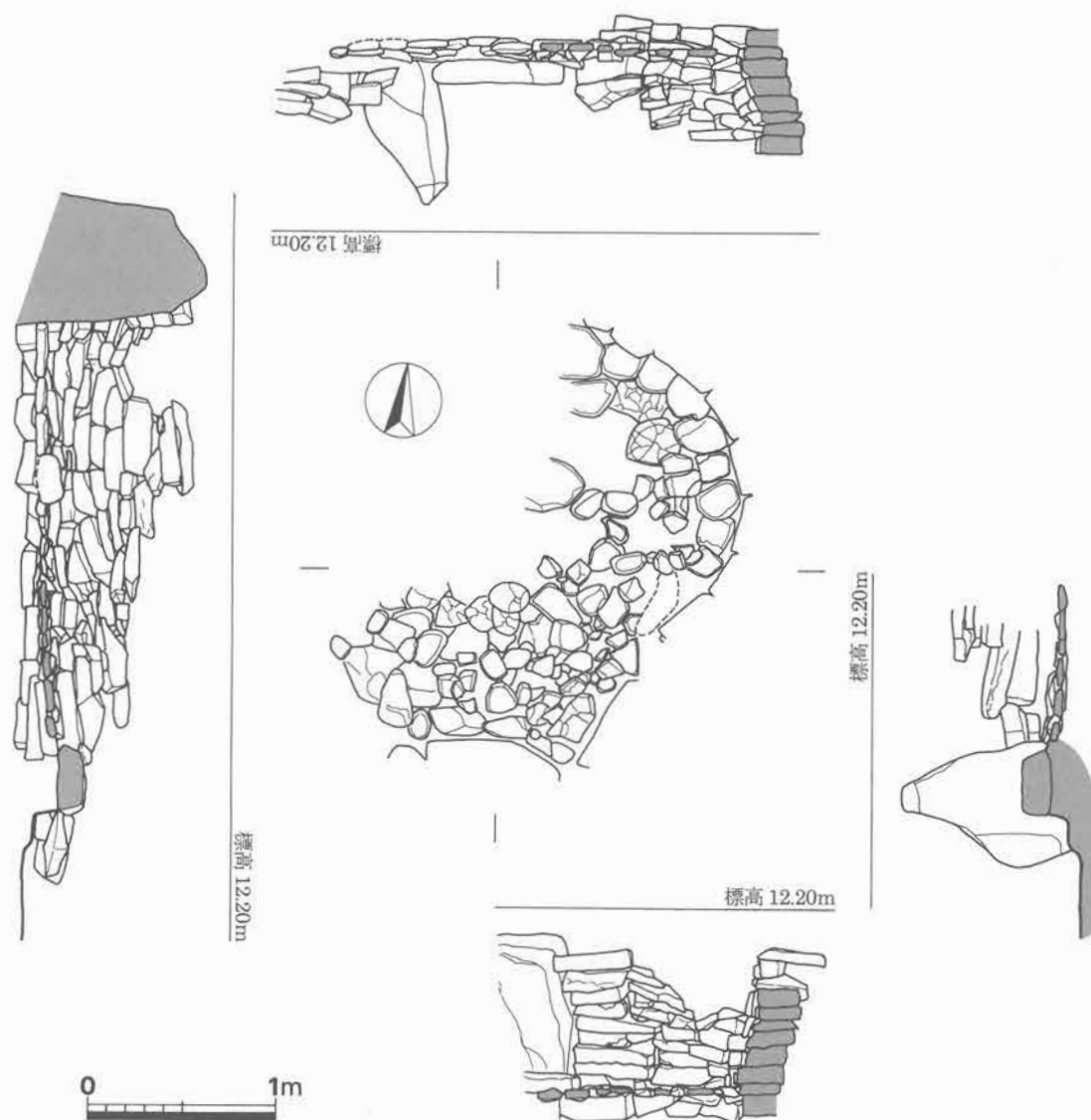
第20図 北山8号墳西半部土層断面図 (1/40)

墳丘（第19・20図，図版12）

墳丘は、西側と北側をブロック塀設置により削平されており、西側塀の外側はJR鹿児島本線の線路が南北に走る。調査は、地形的な制約もあり墳丘残存高の最高所を中心として南北方向と東方向にトレンチを設定して掘り下げを行った。北側トレンチでは、ブロック塀による削平と塀より北側が宅地として利用されていたため、平坦地に造成されていたこともあり、墳丘裾は確認できなかった。南側トレンチもブロック塀造成の際に削平されており、盛土および墳丘裾の確認にはいたらなかった。墳丘盛土の残存が確認できたのは東側トレンチのみであった。東トレンチ面は、調査当初墳丘の残存度が比較的良好であったが、土層観察の結果、東半部は削平を受け、当初周溝と考えられた溝状の落ち込みについても盛土削平時の段落ちであることが判明した。盛土は、地山由来の黄褐色土と黒褐色土を交互に積み重ね版築状に築造されている。結果、古墳は周囲4方向全てが大規模な削平を受けていることが確認され、墳形・墳丘規模についての情報は全く得られなかった。出土遺物は、墳丘表土より須恵器・土師器・近世陶磁器・石器が確認されている。



第21図 北山8号墳第1床面および第2床面遺構実測図（1/40）

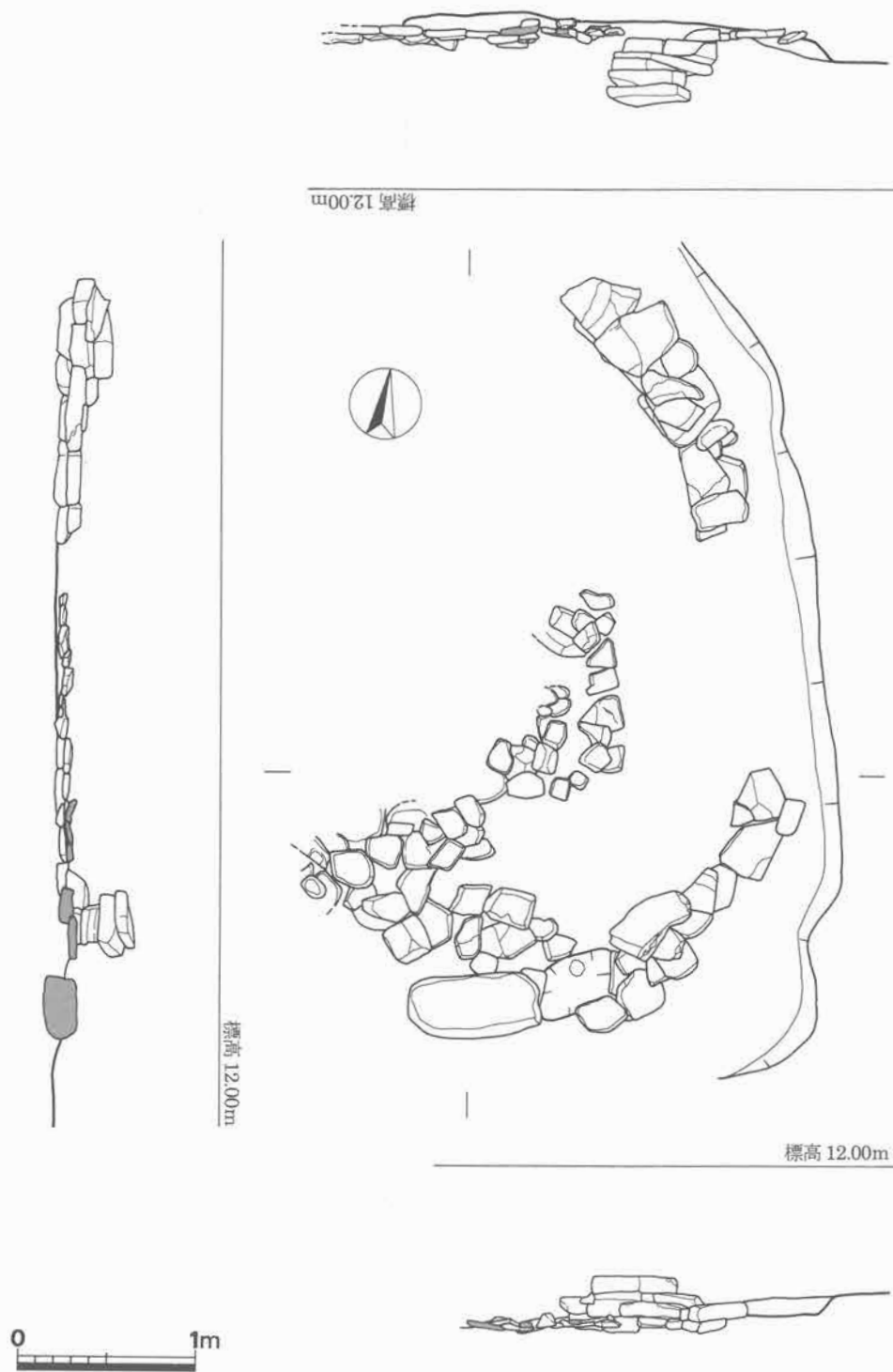


第22図 北山8号墳再構築石室実測図（1/40）

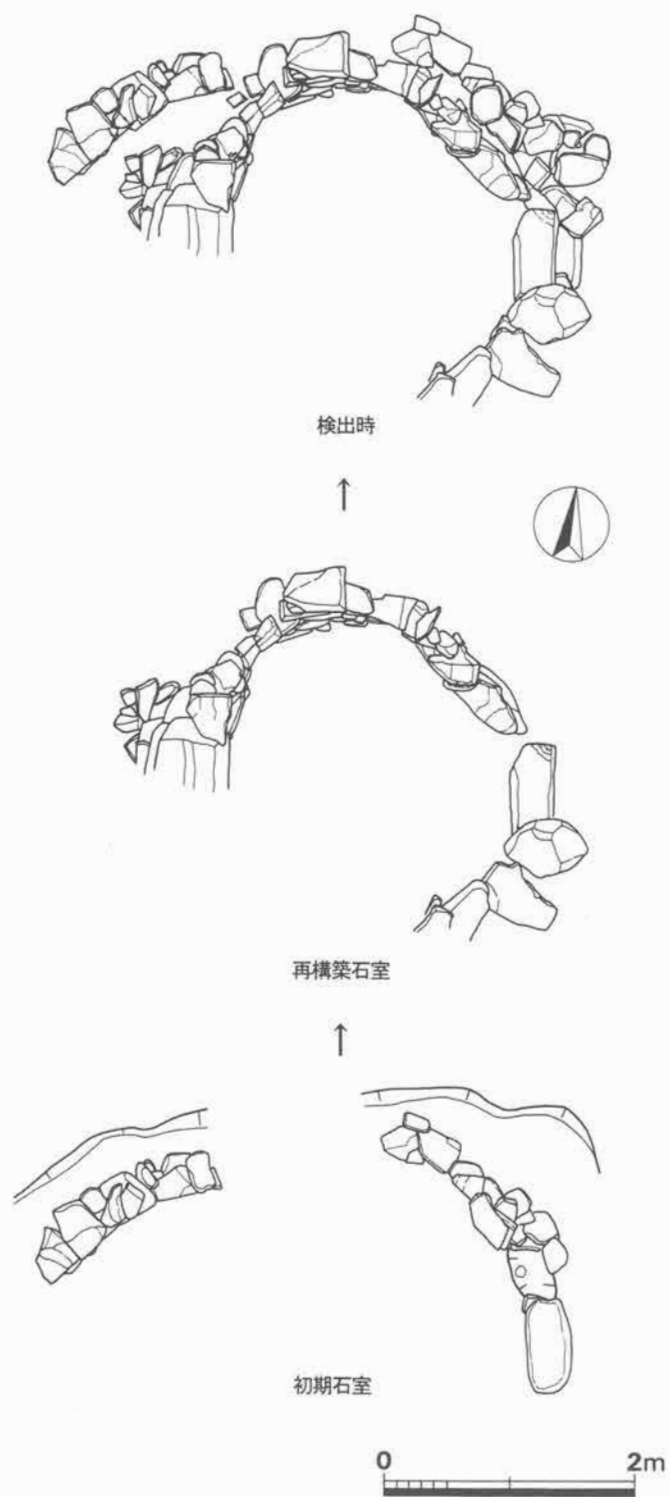
主体部（第21～24図，図版12・13）

主体部は、墳丘西側のブロック塀建設の際に天井部分を始めとする大部分が破壊されたと考えられる。またブロック塀が倒壊する危険があるため、石室西半部の調査を行なうことができなかった。検出した石室は、当初胴張りプランを有する小型の石室であったが、最終的には3面の床面を有し一度崩壊した石室を縮小し再度構築した特異な構造を持つものであることが確認された。したがって本墳丘には、初期石室と現在残存する再構築石室の2つの石室が存在する。再構築石室は、側壁が片岩の角礫積みで最高11段が残存している。奥壁の鏡石は高さ1.05m以上、開口部は南向きで、玄門部の袖石は西側のみが残存している。墓道から前室にかけては削平のため完全に破壊されているため、単室構造であるか複室構造であるかは定かではない。

石室プランは胴張りの球形を成し、特に側壁中ほどでの屈曲が顕著である。この石室に伴う床面は2面が検出されている。第1床面（最上面）は、50cm～15cm大の結晶片岩の扁平礫を敷き詰めたもので、床石の残存状況はまばらである。床面全体に炭化物や煤が付着し、石室中央部の床石は被熱のため赤色化し



第23図 北山8号墳初期石室実測図（1/40）



第24図 北山8号墳石室変遷図 (1/60)

ている。出土遺物は、須恵器の他、瓦器碗が床面直上から出土しており、中世段階で石室を再利用した状況が窺える。おそらく床面の被熱痕跡も中世段階に伴うものと考えられる。第1床面のプランは長軸2.18m、短軸2.0m以上を測る。主軸をN-8°-Eに取る。

第2床面は、30cm～10cm大の結晶片岩の扁平礫を敷き詰めたもので、床石の残存状況は良好である。煤等の付着物は見られず、床面直上からは須恵器甕片が出土し、古墳以降の遺物の出土は皆無である。この第2床面が再構築石室の初期床面と考えられる。主軸は第1床面と同様である。

再構築石室の東外側からは、石室より一回り大きく、石室を囲む石列が検出された。検出当初は控え積みとの判断で掘り進めていたものの、鏡石の外側を囲む石列と巨石の抜き跡および玄門部の框石下部より新たな框石が検出されるにおよび石室が2重構造になるとの認識に至った。この初期石室は、西側袖石から框石を経由して東側袖石の抜け跡から一部再構築石室に接し、再構築石室鏡石北側の初期石室鏡石抜跡まで続く。残存部は最高5段の石積みが確認され、再構築石室の胴張り部分で一部重複し途切れている。石室のプランは緩やかな胴張りで、結晶片岩の角礫を使用し、南に向かい開口する。玄門部は、再構築石室と重複しており、石室組み換え時に踏襲したものと考えられる。再構築石室同様に墓道から前室については完全に破壊されており詳細は不明である。床面（第3床面）は、40cm～10cm大の結晶片岩の扁平礫を敷き詰めたもので、床石の残存状況はまばらである。平面プランは、長軸3.7m、短軸1.6m以上を測り、主軸をN-9°-Eに取る。出土遺物は検出されていない。（熊代）

c. 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、パンコンテナー1箱である。出土遺物は、墳丘表土出土遺物が大半を占め、石室内からは、須恵器甕片・瓦器碗が出土したにすぎない。内訳は、土師器・須恵器・近世陶磁器・石器などである。

1～4は須恵器灯蓋である。1、2は口縁部にかえりを有し、4は丸みを帯びた嘴状である。5は須恵器坏で、口縁部はやや外反する。6、7は須恵器甕の頸部及び口縁部破片であり、それぞれ外面にヘラ記号が認められる。10～12は須恵器の瓶で何れにも細かいカキ目が施されている。18～22は、須恵器甕の破片である。18、19、21、22は外面が格子目のタタキ、内面には青海波の当て具痕が残る。20は内外面共にタタキ後にナデ消されている。23は円形の透孔の一部で下部1cmには突帯が廻る。（原田）

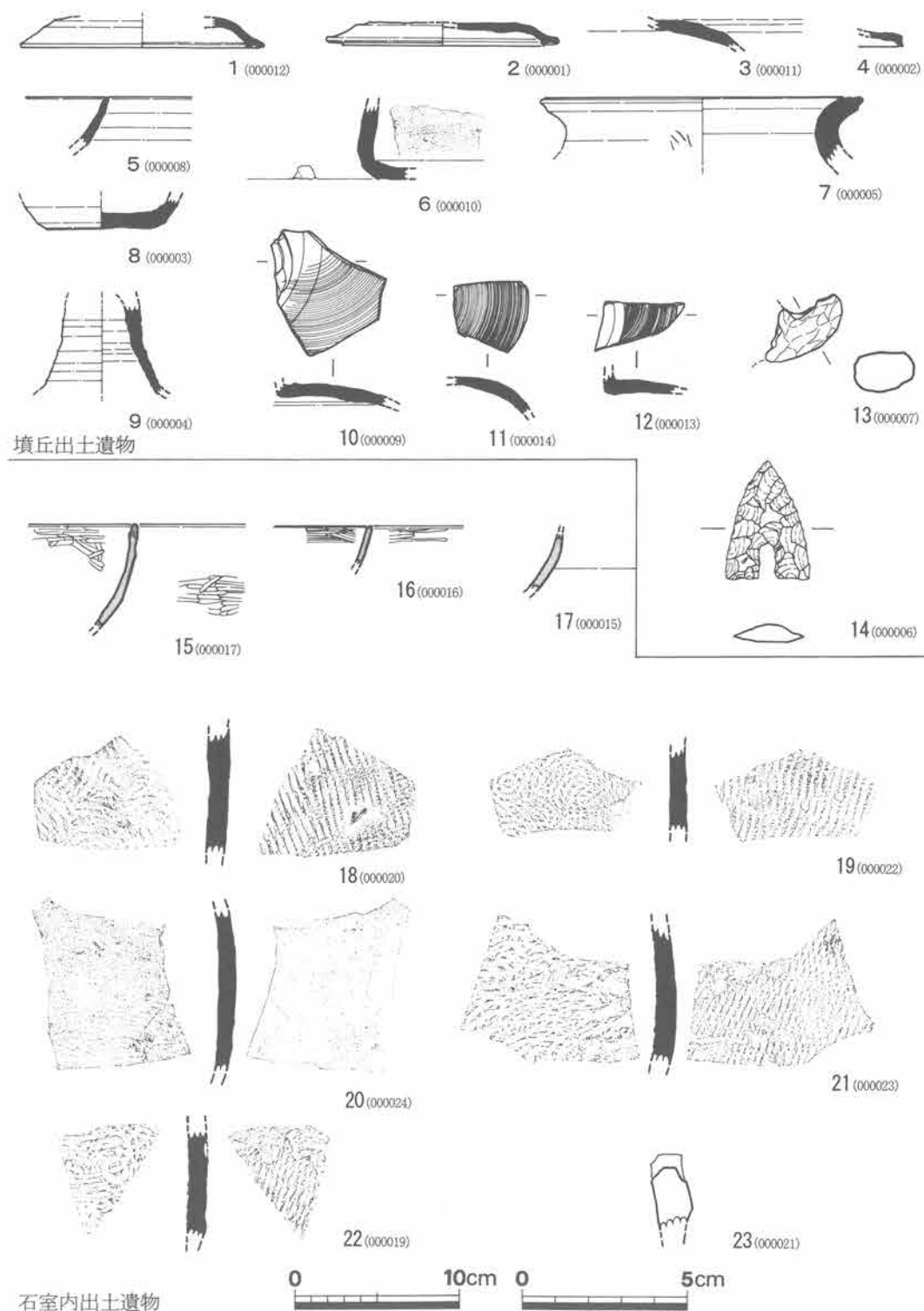
4. ま と め

今回の調査では、墳丘が宅地の庭先に所在したこともあり削平によって、墳形および墳丘規模の特定にいたらず残念な結果に終わった。しかしながら、一度崩壊した石室を再構築するという特異な古墳構造を確認することができた。ここでは、石室再構築の問題を含め北山8号墳についての所見を述べていきたい。

まず古墳築造の時期であるが、古墳出土の遺物が少量であることから決定については石室構造を基に類推するほか無い。本古墳の石室形状は、いわゆる胴張りの石室プランを呈するものであるが、このような石室プランは古墳時代後期後半代、6世紀後半から7世紀にかけ筑後地域に盛んに築かれるタイプのものである。したがって、本古墳の所属時期も6世紀後半から7世紀前半に位置づけて問題は無い。

次に石室構造であるが、現存石室と古墳築造段階の石室が存在していたことは、2つの框石や石室外縁を廻る石組みから疑う余地はない。では、石室の再構築はどの段階で崩壊し再建されたのであろうか。考えられるのは、石室築造段階での崩壊・再建もしくは古墳完成後の崩壊・再建といった状況である。し

かしながら、石室築造段階で崩壊・再建が行なわれたとするなら、石室規模の縮小・框石の重複・鏡石の移動など不必要な作業が目につく。したがって、少なくとも石室の崩壊・再建は、墳丘が完成した後に起きたと仮定できよう。そのため、墳丘の掘り返しを行い、石室規模を縮小し墳丘を再構築したものと思われる。ではなぜ崩壊した古墳を再建する必要があったのであろうか。その理由は祖霊に対する深い信仰と



第25図 北山8号墳出土遺物実測図 (1/2, 1/4)

ともに墓域という土地に対する強い規制が働いていたものと思われるが、推測の域を出るものではない。

(熊代)

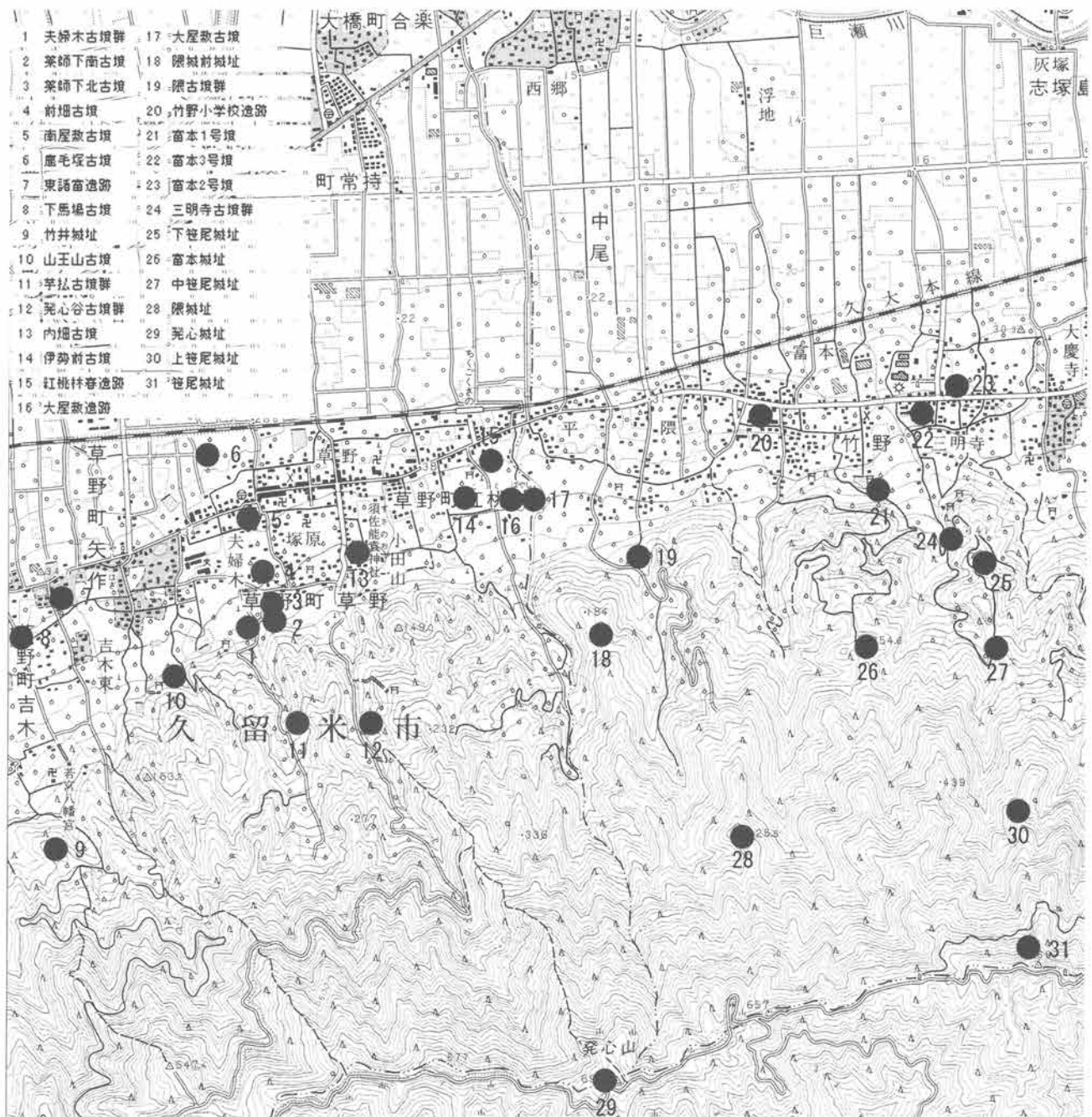
第6表 北山8号墳出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 [長]	底径 [幅]	高さ [厚]	外面	内面	外面	内面			
1 第25図	2区表土	須恵器	坏蓋	(14.7)	—	(1.8)	灰褐	黄褐灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 後ナデ	精良		200612 000012
2 第25図	1区表土	須恵器	坏蓋	(14.0)	(8.9)	(1.4)	黄灰	黄灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	精良		200612 000001
3 第25図	2区表土	須恵器	坏蓋	—	—	(1.6)	暗灰	暗灰	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	精良		200612 000011
4 第25図	1区表土	須恵器	坏蓋	—	—	(0.9)	黄灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	精良		200612 000002
5 第25図	1区墳丘裾	須恵器	坏	—	—	(2.9)	にぶい橙	明黄褐	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒		200612 000008
6 第25図	1区盗掘坑	須恵器	甕	—	—	(4.4)	暗灰	暗灰	—	—	細砂粒	ヘラ記号?	200612 000010
7 第25図	1区表土	須恵器	甕	(19.5)	—	(4.1)	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ カキ目	ナデ・押え	精良	ヘラ記号?	200612 000005
8 第25図	1区表土	須恵器	壺	—	(6.5)	(1.8)	灰	暗灰	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	精良		200612 000003
9 第25図	1区表土	須恵器	高坏	—	—	5.4	黄灰、暗灰	黄灰	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	精良		200612 000004
10 第25図	2区表土	須恵器	瓶	—	—	(1.4)	灰	灰、灰黄褐	ナデ カキ目	ナデ・押え	精良		200612 000009
11 第25図	2区表土	須恵器	瓶	—	—	(1.2)	灰褐	黒	カキ目	ナデ	精良		200612 000014
12 第25図	2区表土	須恵器	瓶	—	—	(1.3)	灰褐	暗灰	ナデ カキ目	ナデ・押え	精良		200612 000013
13 第25図	1区墳丘裾	土師器	把手	—	—	(4.0)	橙	橙	ナデ・押え		細砂粒 2~5mm大の石英		200612 000007
14 第25図	1区表土	安山岩	石鏃	3.6	2.6	0.5	灰白					重量3.4g	200612 000006
15 第25図	石室内黒色土	瓦器	埴	—	—	(6.3)	黒	灰白	ミガキ?	ミガキ	微砂粒		200612 000017
16 第25図	石室内黒色土	瓦器	埴	—	—	(2.5)	黒	黒、灰白	ミガキ	ミガキ	精良		200612 000016
17 第25図	石室内黒色土	瓦器	埴	—	—	(3.5)	黒	白灰	ミガキ	ナデ	精良		200612 000015
18 第25図	主体部上床 P-3	須恵器	甕	—	—	(7.6)	褐灰、 にぶい黄橙	褐灰、 にぶい黄橙	タタキ (格子目)	あて具痕 (青海波)	微砂粒		200612 000020
19 第25図	主体部上床 P-5	須恵器	甕	—	—	(5.2)	黒褐	灰	タタキ (格子目)	あて具痕 (青海波)	砂粒 石英		200612 000022
20 第25図	主体部上床 下	須恵器	甕	—	—	(9.7)	暗灰	灰褐、暗灰	タタキ後 ナデ消し	タタキ後 ナデ消し	細砂粒		200612 000024
21 第25図	主体部上床 下	須恵器	甕	—	—	(8.5)	灰	褐灰	タタキ (格子目)	あて具痕 (青海波)	細砂粒 石英		200612 000023
22 第25図	主体部上床 P-2	須恵器	甕	—	—	(6.5)	灰	灰	タタキ (格子目)	あて具痕 (青海波)	砂粒		200612 000019
23 第25図	主体部上床 P-4	土師器	不明	—	—	(3.7)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ後 ナデ	砂粒(石英、雲母)		200612 000021

V. 夫婦木古墳群（第1次調査）

1. はじめに

本調査は、久留米市草野町草野で実施した発掘調査である。調査は、久留米市みどりの里づくり推進室より、つつじ・つばき園整備工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認がなされたことに始まる。これに対して文化財保護課は対象地が周知の夫婦木古墳群の中に所在するため発掘調査が必要となる旨を回答。6月22日には試掘を行い、石室を検出したため、協議を行ない、平成19年2月に調査を実施することで協議が成立した。これを受けて、平成18年10月2日に埋蔵文化財発掘調査の依頼書が提出され、2月5日より現地における発掘調査を開始する運びとなったものである。



2. 位置と環境

夫婦木古墳群が所在する草野町は久留米市の東部、耳納連山北麓に位置し、周辺は宅地化が進むものの果樹園や水田が広がる田園地帯である。

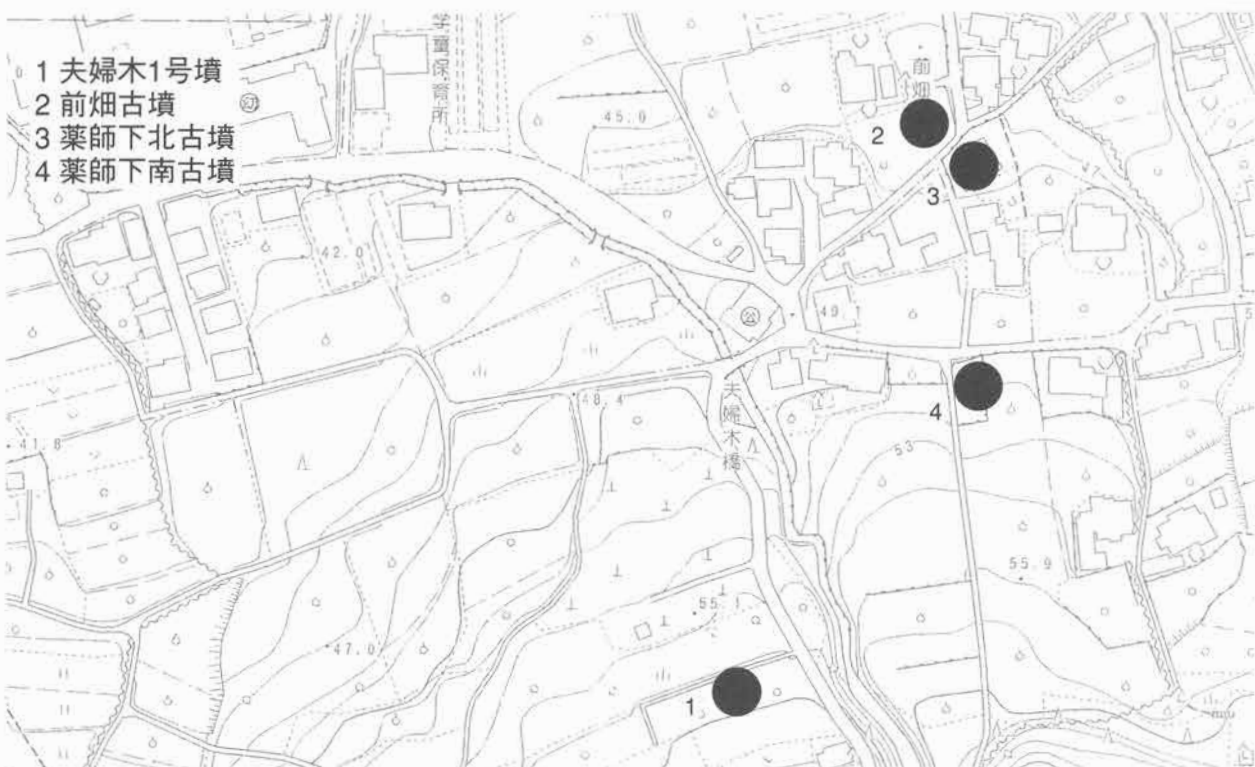
夫婦木古墳群は、草野町の東部、JR草野駅から南東へ約1.3kmの草野町草野に所在する遺跡である。当地は、耳納連山北麓の緩やかな傾斜面に位置し、標高約60mを測る。地形は東西を南北に走る谷に挟まれた尾根線上で、現在は畑地に造成され、柿を始めとした果樹園が目立つ。耳納連山の傾斜は調査地点南部から徐々に急勾配となり山頂へと続いている。

周辺の歴史的環境を概観すると、人々の生活の痕跡は縄文時代から認められている。縄文時代には、紅桃林春遺跡で押型文土器・並木式土器が数点出土している他、縄文時代早期から後晩期にかけての土器が耳納北麓の広範囲にかけて採集されている。

弥生時代についても前期の状況は未だ明確ではないが、中期から後期になると竪穴住居跡が確認された東諸富遺跡・紅桃林春遺跡などの集落遺跡や甕棺・石棺が検出された大屋敷遺跡が確認されている。

古墳時代には、国指定史跡下馬場古墳を始めとする後期古墳が随所に築かれる。同心円文・三角文・船などが描かれた下馬場古墳、同心円文を有す前畑古墳、騎馬人物像が描かれていた薬師下南古墳（消滅）、同心円文・三角文を有す薬師下北古墳（消滅）など数多くの装飾古墳が草野町から浮羽地域にかけて分布している。その他、小型の円墳を中心とした塚原古墳群・芋払古墳群・夫婦木古墳群・発心谷古墳群などが谷で隔てられた尾根線上に所在する。

律令期に入ると、草野町は山本郡に属すが、郷名は定かではない。平野部には山本郡条里の痕跡が残存しており、また筑後国から豊後国にいたる古代山辺の道が耳納北麓縁辺部を東西に走るよう推定されている。



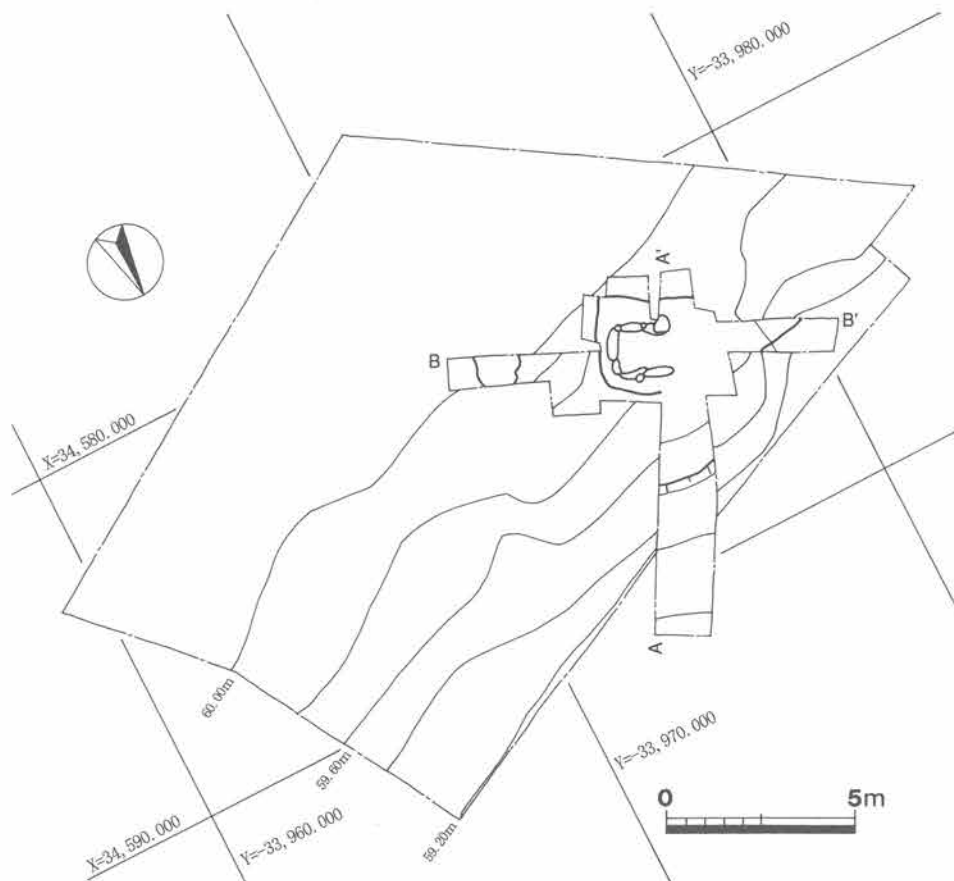
第27図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

平安時代以降は、竹野庄の一部となっている。平安末期になると、当地に竹井城が草野氏により耳納連山の斜面に築かれ、城下には城下町が整備される。これより桃山時代末期まで草野氏の本拠地として栄え、天正16年、豊臣秀吉の九州仕置により草野氏が滅亡するとともにその繁栄は終焉を迎える。その間、須佐能袁神社・若宮八幡宮・発心城などの寺社・山城が草野氏の手により建築されている。近世以降は、はじめ柳川藩に属するものの元和6年より久留米藩に属し幕末を迎え、草野村・草野町を経て久留米市草野町となる。

3. 調査の記録

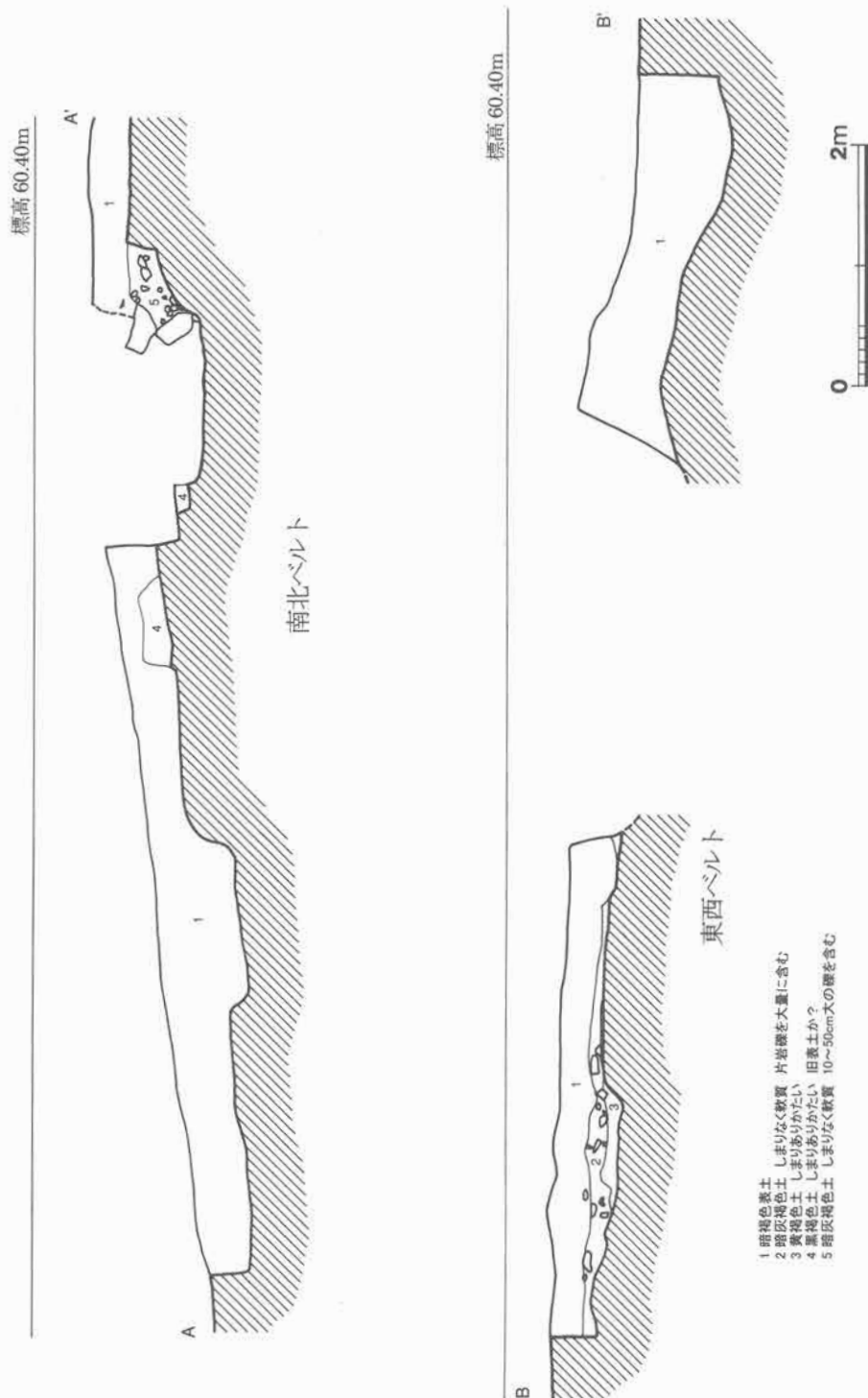
a. 調査の概要

今回の調査は、つつじ・つばき園整備に伴う発掘調査であり、調査地は駐車場兼イベント広場として利用され直接石室本体には工事の影響が無いことから、協議の結果、石室部分については調査後、埋め戻し保存することで同意を得た。夫婦木古墳群は、昭和54年の福岡県遺跡等分布地図に未記載の古墳群であり、発掘調査も為されていなかったため、夫婦木1号墳とした。墳丘については、現地形が畑地による削平により平坦面になっていることから、トレンチ調査を行ない、墳丘の残存が確認された場合には協議することとして調査を開始した。調査面積は30m²である。平成19年2月5日より平板測量と人力によるトレンチ掘削作業を開始し、まず石室のプランを検出した。2月6日、石室の中心から十字方向にトレンチを設定し、削平面のある南トレンチについては重機による掘り下げを行う。その後各トレンチの土層観察の結果から、墳丘は削平され残存しないことが確認されたため、石室のみの保存を依頼し調査を継続した。



第28図 夫婦木1号墳墳丘測量図 (1/200)

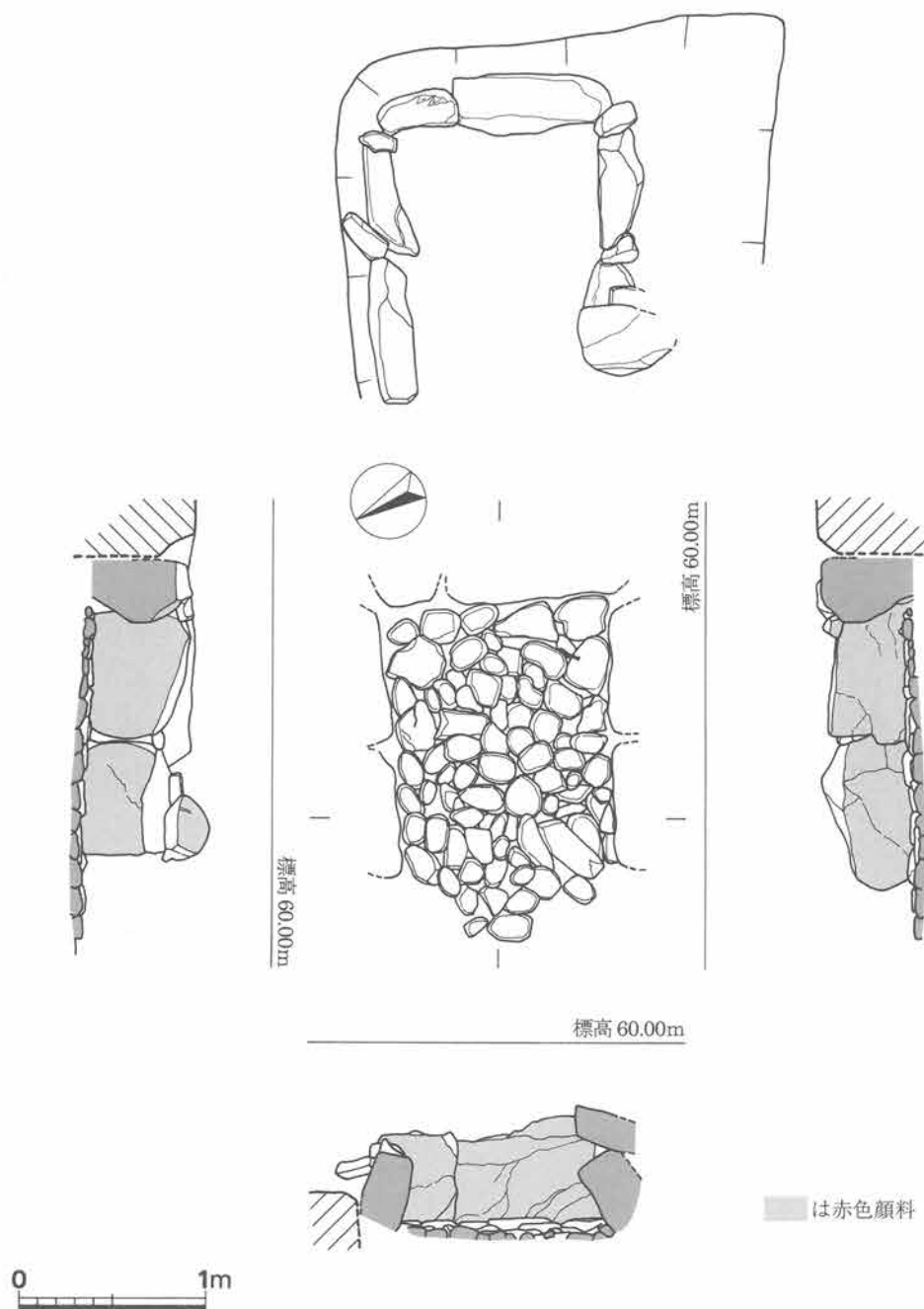
2月16日、石室床面より鉄鏝を検出。2月23日、全体撮影を行ない、26日より埋め戻しを開始、27日に調査を終了した。記録は、写真記録をカラーリバーサル6×7、モノクローム6×7を用いて撮影し、遺構実測は、個別遺構図および土層図を1/20、平板測量図を1/100で作成した。



第29図 夫婦木1号墳墳丘断面図 (1/60)

b. 遺構の概要

夫婦木1号墳墳丘の層序は、山の傾斜地を削平した畑地ということもあり、現地表面下から30cmから60cmは耕作土であり、その下は片岩の礫塊を多く含む黄褐色の地山層であった。遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・近世陶磁器、地山層からは、縄文土器・黒曜石の細片等が出土している。



第30図 夫婦木1号墳主体部実測図（1/40）

墳丘（第28・29図，図版14）

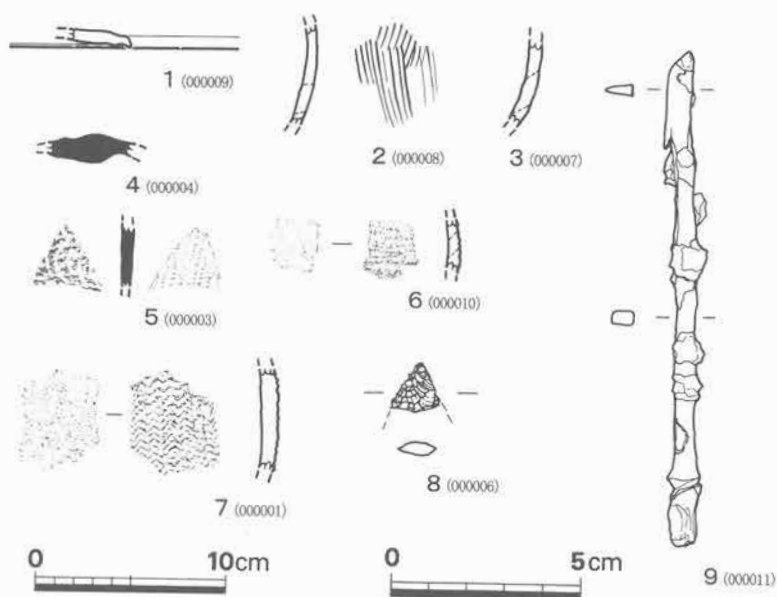
墳丘は、墳丘の残存度と墳丘裾の確認を目的とし、石室長軸を基準として石室中心より十字方向に4本のトレンチを設定した。結果、畑地造成時の削平のため墳丘および墳丘裾は確認できず、完全に破壊されていることが判明した。北トレンチおよび西トレンチでは、耕作土直下に地山が検出され、西トレンチでは、開口部を含む石室前面部が削平を受け消失している。わずかに南トレンチにおいて旧表土面と石室掘り方が検出されるにとどまる。したがって、1号墳の墳丘規模および墳形は不明である。トレンチ内から、縄文土器・石鏃・須恵器・土師器・近世陶磁器などが出土している。

主体部（第30図，図版14）

主体部は、削平のため石室前面と石室の下1段を除く上面を失うものの床面および腰石部分は良好に残存する。前半部を欠損するために断定はできないが、西に開口する石棺系石室もしくは竪穴系横口式石室と考えられる。石室は、側板に片岩製板石を2枚以上、奥壁に片岩製板石を2枚使用し、石室内面を赤色顔料で赤彩している。上部構造は南西部の石積み残存状況から片岩礫を積み上げるものと考えられる。床面は、片岩の扁平礫を隙間無く敷き詰めており良好な残り具合を示す。南東部隅より鉄鏃が1点出土しているのみでその他の遺物は確認されず、赤色顔料の塗布も認められなかった。床面プランは長方形を呈し、長軸1.80m以上、短軸1.2m、残存高0.6mを測り、主軸をN-62° -Wに取る。（熊代）

c. 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、パンコンテナー1箱である。出土遺物は、トレンチ出土遺物が大半を占め、石室内からは、覆土を2mmメッシュのふるいで精査したにも関わらず鉄鏃1点のみの出土であった。



第31図 夫婦木1号墳出土遺物実測図（1/2，1/4）

内訳は、縄文土器・土師器・須恵器・近世陶磁器・石器・鉄器などである。

1～3は土師器の破片である。4、5は須恵器瓶片で接合部分是指圧により押さえられ、器壁の厚みも薄くなる。6、7は縄文土器で、6は外面に貝殻条痕文が施されている。7は外面に山形の押型文が施されている。8は黒曜石製の石鏃である。9は鉄鏃で片刃長頸鏃と思われ、一部に木質が付着して残存している。（原田）

4. ま と め

今回の調査では、畑地造成時の削平によって、墳形および墳丘規模の特定にいたらず残念な結果に終わったものの、耳納北麓に展開する古墳群の中で新たな知見を得たのでここにまとめておきたい。まず、本古墳の所属時期であるが、出土遺物の少なさと石室の半壊という状況から断定することは困難と言わざるをえないが、石室形状が、石棺系石室ないし竪穴系横口式石室であることは残存部から推定できる。このような特徴を有す石室は、おおむね5世紀半ばから6世紀初頭に位置づけられる。したがって本古墳も当該時期に納まるものと考えられ、石室床面出土の鉄鏃形状からも時期的に矛盾しない。5世紀半ば以降という築造年代が与えられるならば、6世紀後半代の古墳群が大半を占める耳納北麓地域の中で本古墳は先駆的な位置づけを持つこととなる。このことは、耳納北麓の古墳群の造営が少なくとも5世紀代に開始されていたことを意味し、今後他の古墳群の調査が進む中で同時期の古墳の発見を示唆するものと思われる。

次に、表土下の地山面より出土した、押型文土器・剥片については、断層崖である耳納山地特有の現象を推定できる。古墳群の北側には、日本書紀にも記載された筑紫大地震（679年）の震源と推定される水縄活断層が東西に走り、断層線を境に急峻な斜面となる。この周期的に地震を起こすとされる水縄活断層によって斜面上から土石流・地すべり等によって運ばれた土が古墳の立地する地山を形成していると考えられ、当地の地山は、縄文早期以降～古墳造営以前に流入したものと考えられる。（熊代）

第7表 夫婦木1号墳出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			色調		調整		胎土	備考	登録番号
				口径 [長]	底径 [幅]	器高 [厚]	外面	内面	外面	内面			
1 第31図	石室検出時	土師器	坏蓋	—	—	(1.0)	黒褐	黒褐	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒(石英、雲母)赤色 粒子		200626 000009
2 第31図	石室検出時	土師器	甕	—	—	(5.4)	にぶい黄褐～ 灰黄褐	灰黄褐	ハケ目	ケズリ・ナデ	砂粒(石英、角閃石、金雲 母)		200626 000008
3 第31図	石室検出時	土師器	環	—	—	(4.7)	橙	橙	ナデ	ナデ	細砂粒 石英、赤色粒子		200626 000007
4 第31図	北トレンチ	須恵器	瓶	—	—	(1.5)	橙	にぶい橙	回転ナデ	ナデ・押え	微砂粒		200626 000004
5 第31図	南トレンチ	須恵器	甕	—	—	(3.8)	暗灰	暗灰	タタキ	タタキ	精良		200626 000003
6 第31図	石室検出時	縄文土器	鉢	—	—	(2.8)	にぶい黄橙	黒褐	貝殻条痕文	ナデ	砂粒(石英、角閃石、雲母)		200626 000010
7 第31図	西トレンチ	縄文土器	鉢	—	—	(5.5)	にぶい橙	にぶい橙	押型文	ナデ	砂粒 石英		200626 000001
8 第31図	表採	黒曜石	石鏃	(1.3)	(1.3)	0.35	黒					重量 0.3g	200626 000006
9 第31図	石室床面	鉄器	鉄鏃	13.0	0.5 ～0.6	0.4	橙					重量 12.8g	200626 000011

VI. 京隈侍屋敷遺跡（第8次調査）

1. はじめに

今回の調査は九州労働金庫より平成19年3月12日付けで、久留米市城南町8-28外7筆における金融機関支店建物建設に先立つ埋蔵文化財包蔵の有無が照会されたことがきっかけである。

対象地は、近世久留米城外郭の大手門前面に開けた空閑地の西側に接する位置にある。なおかつ、城の南西側に広がる京隈侍屋敷の一角にあたり、大手門前面から東にかけて広がる町屋とも接する。対象地の北隣接地で平成14年度に実施された第3次調査では、侍屋敷と町屋を画する屋敷境と思われる石組溝が検出されている。平成18年10月23日には対象地北西端部で試掘調査を実施しているが、その際、地下約55cmの深さから近世のものと思われる土坑などを検出している。

これらの状況を踏まえ、地権者と協議を行った。建物部分は杭打ちを行うため遺構が破壊されることから、対象面積827.12㎡のうち275㎡については発掘調査を実施すること、調査費用を開発原因者が負担することで合意した。平成19年4月23日、九州労働金庫理事長村上守氏と久留米市長江藤守國が京隈侍屋敷遺跡第8次調査の発掘調査委託契約を取り交わし、同年5月7日より現地での発掘調査を開始した。



第32図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）



■ 凡 例

- ① 久留米城本丸跡
- ② 久留米城二ノ丸跡
- ③ 久留米城三ノ丸跡
- ④ 久留米城外郭遺跡
- ⑤ 京隈侍屋敷遺跡
- ⑥ 庄島侍屋敷遺跡
- ⑦ 櫛原侍屋敷遺跡
- ⑧ 鉄砲屋敷遺跡
- ⑨ 十間屋敷遺跡
- 今回の調査地点

※太実線は、主要幹線道路および、そこからの城跡・各侍屋敷への直接進入道路を示す。

※本図は、久留米市教育委員会作成「久留米城下町復元図」(平成16年1月刊行)を参考に作図した。

第33図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

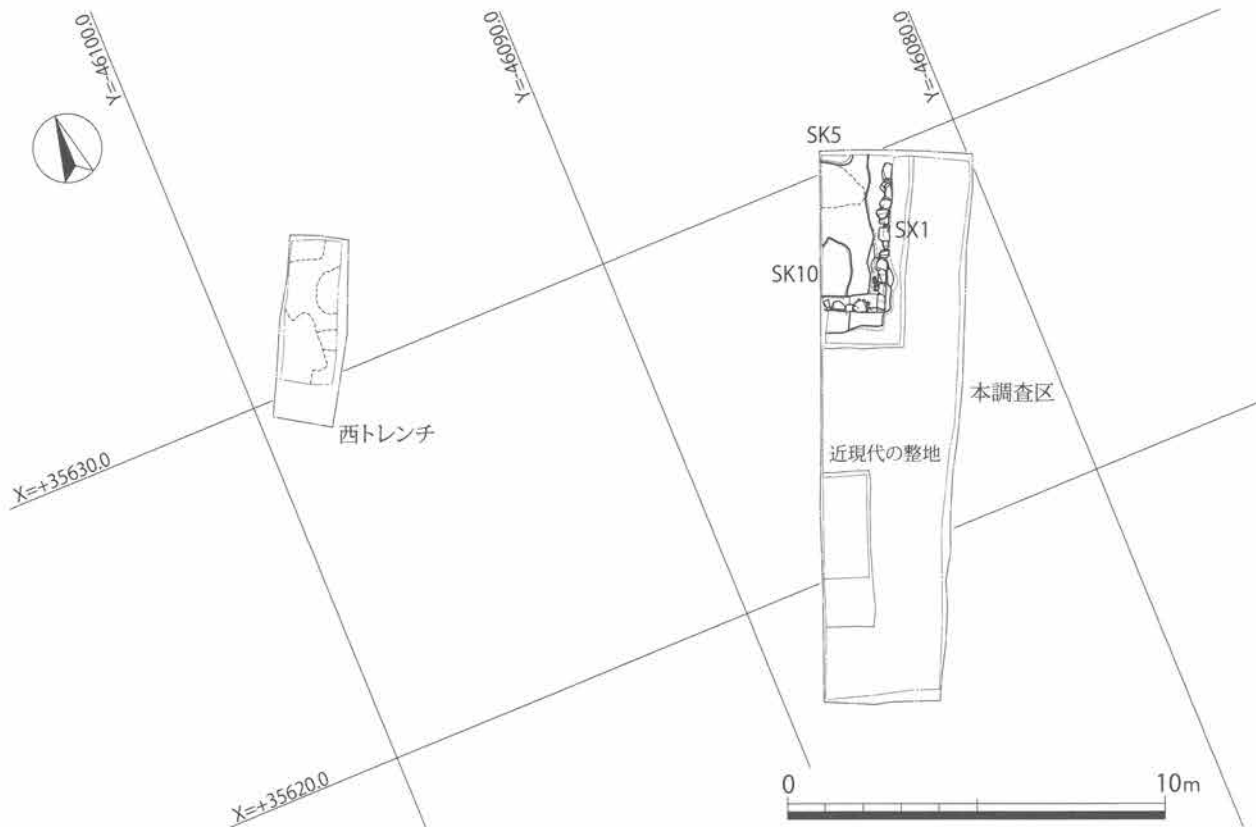
2. 位置と環境

調査地は筑後川中流左岸の久留米段丘北西端部付近にあって、標高約9mを測る。JR鹿児島本線久留米駅前を基点とする主要地方道久留米停車場線を東に進むと、地形は台地上から緩やかに谷地へ向かって標高を下げていく。この台地の東端部、JR久留米駅から東へ300mの地点に調査地は位置する。

本格的な久留米城下町の建設は、元和七年(1621)三月、丹波福知山から転封となった有馬豊氏の入国とともに開始された。城はそれまでの東面する形から南正面へと改造して縄張りを拡張し、その前面に東西方向に長い町並みを通した。この町屋を挟み込むように武家屋敷群や寺町を配している。

天保年間(1830～44年)の城下図によると、調査地は京隈小路と呼ばれる百三十～五百石取りの中級武士を中心とする侍屋敷地の一角にあたる。この京隈小路は、久留米城外郭の南辺東寄りにある大手門前面に広がる広手の西側に展開する侍屋敷である。一方、外郭の東側には百～四百石取りの中級武士を住まわす櫛原小路(侍屋敷)が配置され、同じく外郭の正面(南側)には町屋群を挟んで下級武士・足軽や職人層の居住地である庄島小路(侍屋敷)が位置する。久留米城の大手門側(南側)は、これらの侍屋敷群により取り囲まれた形となる。また、城の南面を通る通町筋(豊後街道)を鍵形に折れながら東へ行くと、通りを挟んで櫛原小路の南側の位置には十間屋敷、同じく櫛原小路の東側には鉄砲小路が存在し、さらに鉄砲小路東側の寺町と称する寺院群によって、通町筋の東入口を固めている。

このように、久留米城の東・南・西側は侍屋敷群と寺町によって防衛され、北側は筑後川によって天然の外堀とするなど、他の近世城郭・城下町例がそうであるように、領主の在所である久留米城を防衛する



第34図 京隈侍屋敷遺跡第8次調査区平面図（1/200）

ための構造上の工夫が随所に見られる。

時代は下って明治6年（1873）、旧武家屋敷地名が改称され、京隈小路と新道（天保図による）に属した調査対象地は、それぞれ京町と築島新町に名称変更になった。京町は明治17年時点での戸数174、人口1,113人で、明治23年（1890）には九州鉄道（現JR鹿児島本線）の京町停車場（現久留米駅）が設置されるなど、まさしく久留米の玄関口となった。一方の築島新町は、明治17年時点で23戸人口121人の小さな町である。大正4年（1914）時点では戸数が増加したものの、31戸に留まっている。

3. 調査の記録

a. 調査の概要

調査予定範囲の北西側から掘削を開始した。現G.L.から約55cmの深さで地山である黄色土を検出し、程なく南北方向に片岩系の板石を2～6段平積みにした石積み列を発見した。しかし、この石積みは4mほど南へ延びたのち西に折れ、そこから1.5m程で調査区外へ出てしまった。地山を検出できたのは、この石積みの内側のみで、石積みの外側（南・東側）では近現代の掘り込みにより、大きく攪乱を受けていた。念のために調査予定範囲の北辺と東辺の北端部、同じく南辺部にトレンチを設定してみたが、状況は同じであり、このような掘り込みは調査予定範囲の全面に及んでいるものと推測された。このため、調査予定範囲を大幅に規模縮小し、石積みを含む東西長約3～4m×南北長約14.5mの範囲にとどめることとした。また、調査の最終段階で、石積みの西延長部を確認するために、対象地北西端部に長さ約5m、幅約1.6mの南北トレンチ（西トレンチと呼称）を設定した。以下、調査日誌から抜粋して調査経過を見る。

- 平成19年5月7日 ユンボによる表土掘削を行う。午後より作業員を投入、遺構検出する。
- 8日 石積みの検出、土坑掘下げを実施する。
- 9日 午前中、調査区内の清掃。午後よりスカイマスターで全体写真の撮影。
- 10日 午前中雨。国土座標を移動。午後より晴れたため調査区測量、個別測量を実施。
- 11日 対象地北西側にトレンチを設定し確認作業。写真撮影・測量を終え、調査区を埋め戻し。全ての現地調査を終え、器材撤収する。

次に調査記録方法について記す。写真記録は、カラーリバーサル、モノクロともに6×7で撮影した。図面記録は、トータルステーションを用いて三次元計測し、そこで得られたデータをアイシン精機社製ソフト「遺構くんai2.0」で編集を行った。編集した図面データはepsデータに変換し本書に使用している。

b. 遺構の概要

先述したように調査区内のほとんどは近現代の掘り込みで破壊されていた。調査区北西端部から検出された石積み遺構S X 1の内側に、僅かに黄色土の地山が残存していただけである。ここからは、幕末以降の土坑2基が検出されたに過ぎない。

調査以前、対象地の現況はアスファルト敷きの駐車場となっていた。このアスファルトの厚さは10cm弱で、その下は5～13cmのバラス敷きとなる。ここから下部では、調査区西壁北部を例にとると、焼土粒子が多く混じる灰褐色土（約10cm）、暗灰色土（約15cm）、黄色土粒子が多く混じる茶褐色土（約20cm）の順で黄色の地山土に到達する。

調査区の南端部では、近現代の掘り込みの深さを見るために、ユンボを使い掘削したが、現G. L. から1.2m掘下げても地山に到達しなかった。この掘り込みは、炭化物や焼土、レンガ等が大量に含まれている土砂で埋め戻されて整地されるなどの特異な状況が見られた。

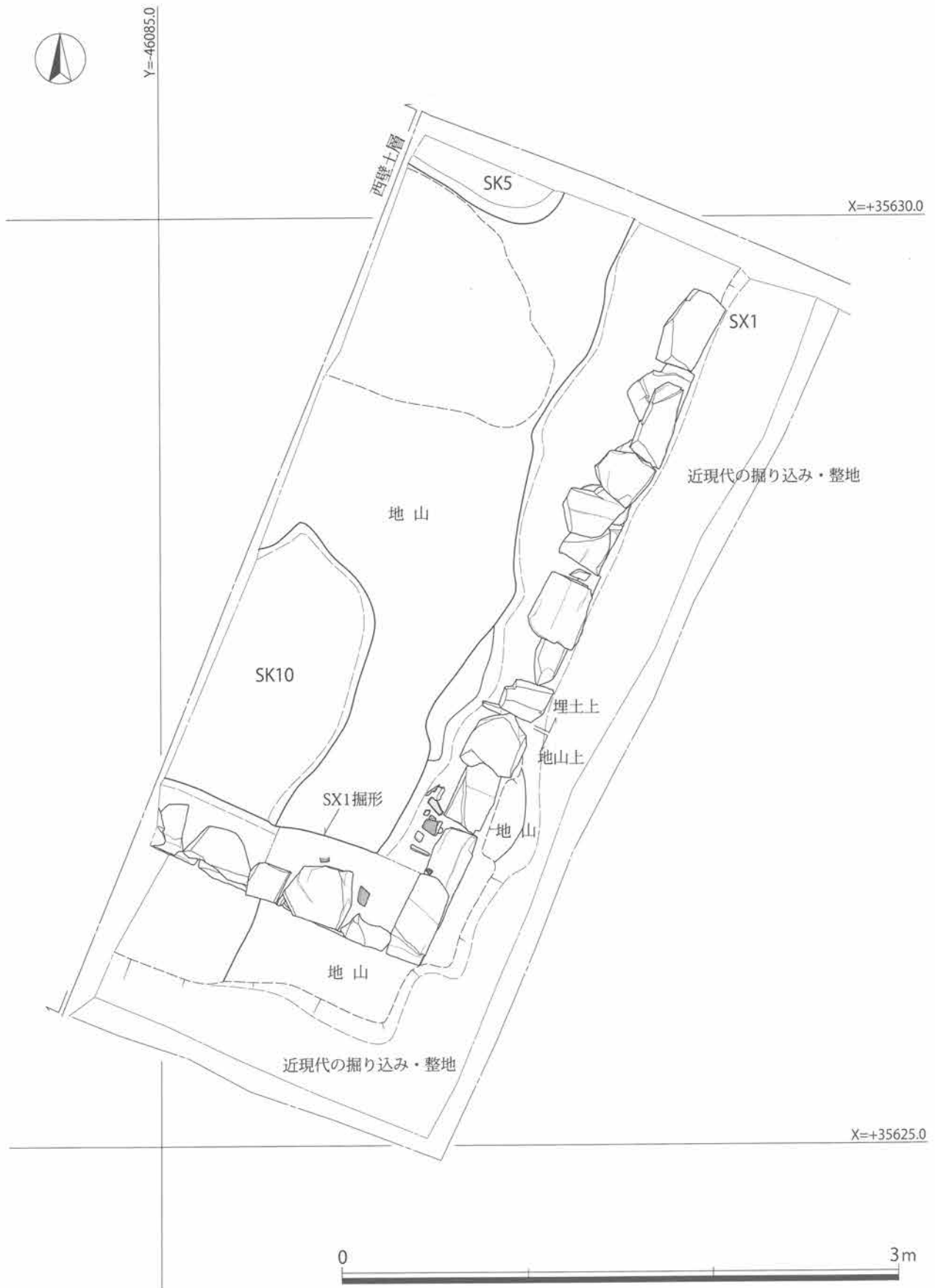
また、S X 1の西側延長部を確認するために、対象地北西部に西トレンチを設定した。この層位は、表土直下が近現代の客土層で、礫や炭化物、瓦、丸釘などを含んでいる。これを除去すると現G. L. から50～70cm下で黄色土の地山面に到達した。土坑も見られたが、それらは全てこの客土層から掘り込まれた現代遺構で、鉄パイプや磁器タイルなどを含んでいる。なお、石積み延長部は検出されなかった。

土坑（第35図、図版15）

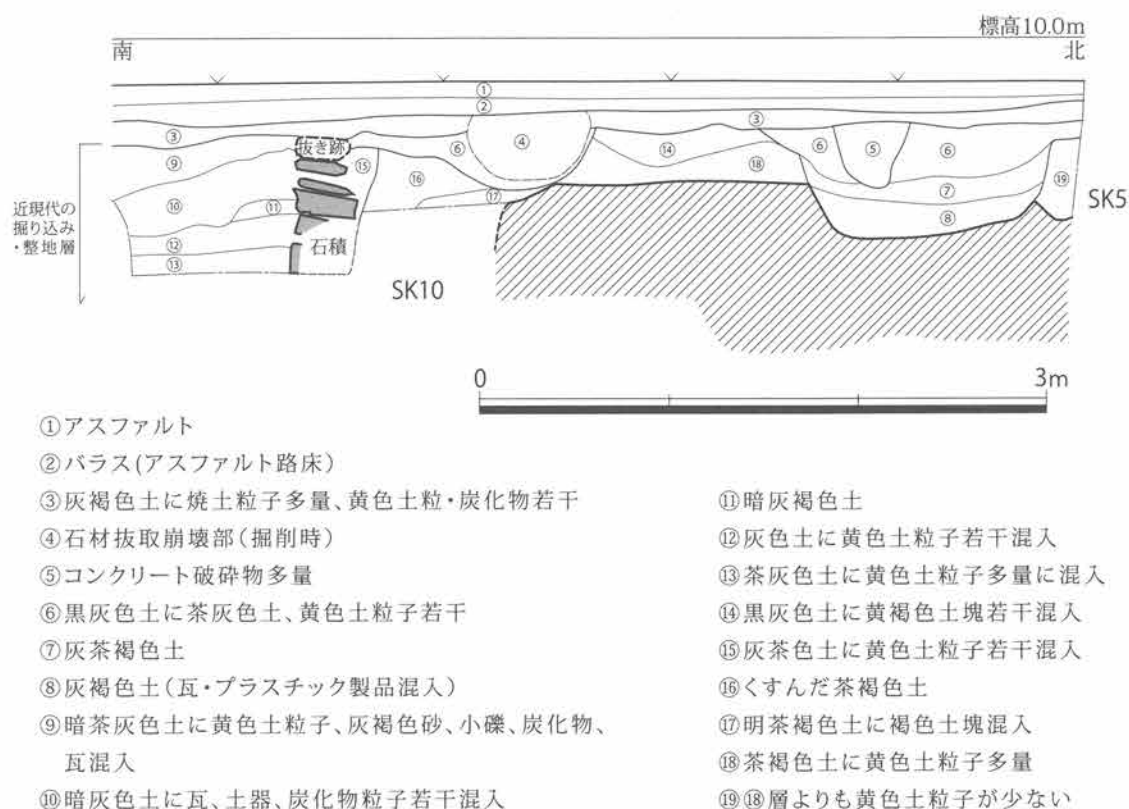
調査区の北西部でS K 5とS K 10の2基を検出している。いずれも一部を検出したのみで、そのほとんどが調査区外に延びる。調査区北西角で検出したS K 5は現代の攪乱に破壊され、深さも40cm程しか残存しない。遺物も見られない。その南側で検出されたS K 10は平面形が長楕円形を呈し、現状での規模が長さ3.4m以上、幅75cm以上、深さ65cm以上を測る。しかし、土坑西側は調査区外へ延び、南側は近現代の掘り込みに破壊されるため、本来の大きさはわからない。この土坑は、石積み遺構S X 1構築の際に切り込まれているため、S X 1に先行する。出土遺物はないが、現場では土師質土器や陶磁器の微細片が見られたため、幕末から近代にかけての土坑ではないかと判断した。

石積み遺構（第35図、図版15）

調査区北西側で検出した遺構である。この遺構は、調査区北端部から4mほど南へ延びたのち西に折れ、そこから1.5m程続くが調査区外へも延びている。検出した限りでは、片岩系の板石を2～3段の平積みになっているようだが、調査区西壁面を観察すると、本来は6段程度、約70cmの高さまで積まれていたことがわかる。ただし、石材の形状や大きさは不揃いで、積み方も乱雑である。その中でコーナーの基部には



第35図 本調査区北西部分平面図（1/30）



第36図 本調査区北西部分西壁土層図 (1/40)

やや大ぶりで方形に加工された石材を他の石よりもやや深く埋め込み、土圧の影響を最も受けやすい隅角部の強度を高める配慮がなされている。この石積み列の平面形は、L字形に屈折していることから、屋敷や何らかの施設の敷地境に積まれたものである可能性が高いと考えられる。

石材の裏込めには、黒燻しされた瓦片とガラス瓶片が混入している。また、石積みの上部には焼土粒子が多く混じる灰褐色土層が乗り、さらにその上部は駐車場のバラスとアスファルト層が乗っている。近現代の大規模な掘り込みは、この石積みの外側で行われており、意識的にこの遺構をはずして掘削されている。その後、焼土や炭化物、建築部材を含む土砂で石積み上面の高さまで埋め戻されている。

なお、調査区北端部から約2.5m分の石積みは、他の箇所のように基底部の石材を地山上に据えるのではなく、土坑状遺構の埋土上に設置されている状況が観察された。この点については、土坑状の掘り込みが石積みよりも古いものであることは確実であるが、この箇所を築造する際たまたまそうなったものなのか、あるいは石積みを修復した際に掘り込んだものなのか、明確にしえなかった。

c. 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、全て近現代の掘り込みから出土したものである。この掘り込みは大量の炭化物や焼土、コンクリート状の建築部材片、レンガ、ガラス片などで埋め戻され、整地されている。掲載した遺物は、ここからの混入品である。以下、出土遺物を個別に見ていきたい(第37図、図版16)

1 (000004) はガラス製のインク瓶である。口径2.2cm、底部幅5.1～5.2cm、器高4.7cmである。ガラス質は無色透明、正中線に沿って型合わせの痕跡が残る。底部では特に顕著であるが、器壁の厚さが一定せず、細かな気泡が多く入る。瓶の重量は60gで、肩部までで30ccの容量がある。底部には㊾の陽刻印

があるが、二重写しになっている。2（000003）は、ガラス製の薬瓶である。口径2.0cm、底径3.6cm、器高6.2cmを測る。重量は29.8g、内容量は肩部までで30ccである。ガラス質は無色透明、器壁の厚みは一定せず、気泡が多く見られる。体部外面には相対する位置に型合わせの痕跡があり、肩部の一部にバリが残存する。底部はやや上げ底である。体部外面には「健脳丸」の文字と側面から見た人間の頭部の姿がエンボス加工されている。その背面には「大阪・丹平商會製」と浮き彫りにされた文字がある。3（000005）は、ガラス製の薬瓶である。口径1.75cm、幅3.0cm、奥行き1.6cm、器高5.25cmを測る。重量は23.2g、内容量は肩部よりやや上部までで8ccである。ガラス質は無色透明であるが、細かな気泡が入り、器壁の厚さは一定しない。型合わせの痕跡が頸部に残るが、中心を通らずやや対角線に近い位置に見られる。体部コーナーには滑り止めの機能を果たすものと思われる列点文、同じく側面にも連続する弧状のエンボス加工が見られる。正面に「大學目薬」、背面に「參天堂藥房」、底部に「田」の文字が浮彫にされている。ちなみに正面から見て左側面コーナー部分は縦方向に凹んでいるが、これは点眼用ガラス管と一緒に紙箱へ収納する際に、その破損を防ぐためになされた工夫である。4（000006）は先端を破損するアンプル状のガラス製薬瓶である。口径0.8cm、幅2.35cm、厚み0.95cm、長さ4.7cmで、重量は6g、内容量は2ccである。色調はコバルトブルーで、細かな気泡を多く含み、側面には型成形の際の痕跡が残る。正面にエンボス加工された3～4文字が見られるが、判読できない。5（000002）はガラス製の薬瓶と思われる。法量は、口径2.3cm、底径3.6cm、器高8.4cmで、重量は47.8g、容量は肩部までで50ccである。ガラス質は無色透明で気泡を多く含み、器壁の厚さは一定でない。体部には型合わせの痕跡が見られる。底部は上げ底で厚く、その外面には星状のマークが陽刻印されている。このマークをもつ瓶類は、櫛原侍屋敷遺跡第4次調査で多量に出土しているが、製造元や薬の種類については特定できていない。6（000007）は、表面を黒く燻した軒丸瓦の瓦当片である。外縁部は平坦で、内区は9個の連珠文付三つ巴文である。直径は11cm程度であろうと思われる。7（000008）は土鈴である。幅2.9～3.0cm、高さ3.2cmで、側面は型合わせの後、ヘラケズリを施してその痕跡を消している。正面には「宇佐」、背面には「八幡」という文字が浮彫になっており、大分の宇佐八幡宮参詣の際のお土産ものであろうかと想像される。8（000009）は、銅製の銭貨である。一部が欠けており「元口通寶」と読める。銭の上が「元」字の場合、北宋銭「元豐通寶」「元祐通寶」「元符通寶」のいずれかということになるが、字体の特徴などから元豐元年（1078）初鑄の「元豐通寶」の可能性が高いものと思われる。元豐通寶には加刀したものもあり、こちらは中世末～近世初頭に鑄造されている。9（000001）は瀬戸の染付草花鳥文角形大便器（下箱）の金隠し部分の破片である。現状での幅17.5cm、高さ17.4cm、把手の径は3.05cmを測る。地元で採取の粘土で製作された陶器質の便器で、タタラ成形した粘土板を木型に合わせて加工し、陶器用の本業窯で焼成されたいわゆる「本業便器」である。胎土は2mm以下の礫を多量に含み粗いが、白く肌理の細かい土で表面を化粧し、呉須で草花鳥文を手書きする。側面には五弁花文と雷文が描かれる。内外面に見られる草の葉などの表現は筆先の弾力を利用し、4枚単位でリズムカルに描き出すなど、熟練した絵付け師の技術が伺える。

4. ま と め

ガラス瓶の来歴と年代 第37図1のインク瓶底部に刻印された㊥マークは、明治2年（1869）創業で書籍・文具・雑貨販売を手がける丸善のマークである。丸善インクの製造販売は明治11年（1878）に開始されている。同17年には万年筆の輸入販売を開始し、同40年代には後述する理由から万年筆とインクの

需要が増大している。また、同図2の「健脳丸」を発売した丹平商会は、明治27年（1894）、大阪心斎橋二丁目で創業された医薬品製造販売の会社で、昭和43年（1968）に丹平製薬株式会社と名称変更し現在に至る。この「健脳丸」は明治29年（1896）に発売された当時画期的な脳神経薬で、こののち発売された今治水と並ぶ同社の大ヒット商品である。現在も「健のう丸」という名称で成分を変え便秘薬として発売されている。同図3の目薬瓶に見られる参天堂薬房という商号は、明治40年（1907）～大正2年（1912）まで使用されたものである。当初は田口参天堂と称し明治23年（1890）に大阪北浜で創業され、昭和20年（1945）には現在の社名、参天製薬株式会社に改称している。大学目薬は明治32年（1899）発売のヒット商品で現在も発売中である。発売当初の価格は1本十銭で、大正7年（1917）頃には二十銭となっている。

次に、これらのガラス瓶の年代が問題となろう。まず、今回出土したガラス瓶は、器壁の厚さが不均一で気泡が多く含まれることなどから、明治～大正時代のものであろうと考えられる。「健脳丸」は明治後期の発売であるが、瓶の形状やエンボス加工された人物の横顔・襟元などが簡略化されていることなどから、やや新しい明治末年ころのものではないかと考えられる。さらに「参天堂薬房」の商号は明治40年～大正2年の年代幅に限定できる。以上を勘案すると、これらのガラス瓶は、明治40年代～大正初年のものと考えても良いのではないと思われる。

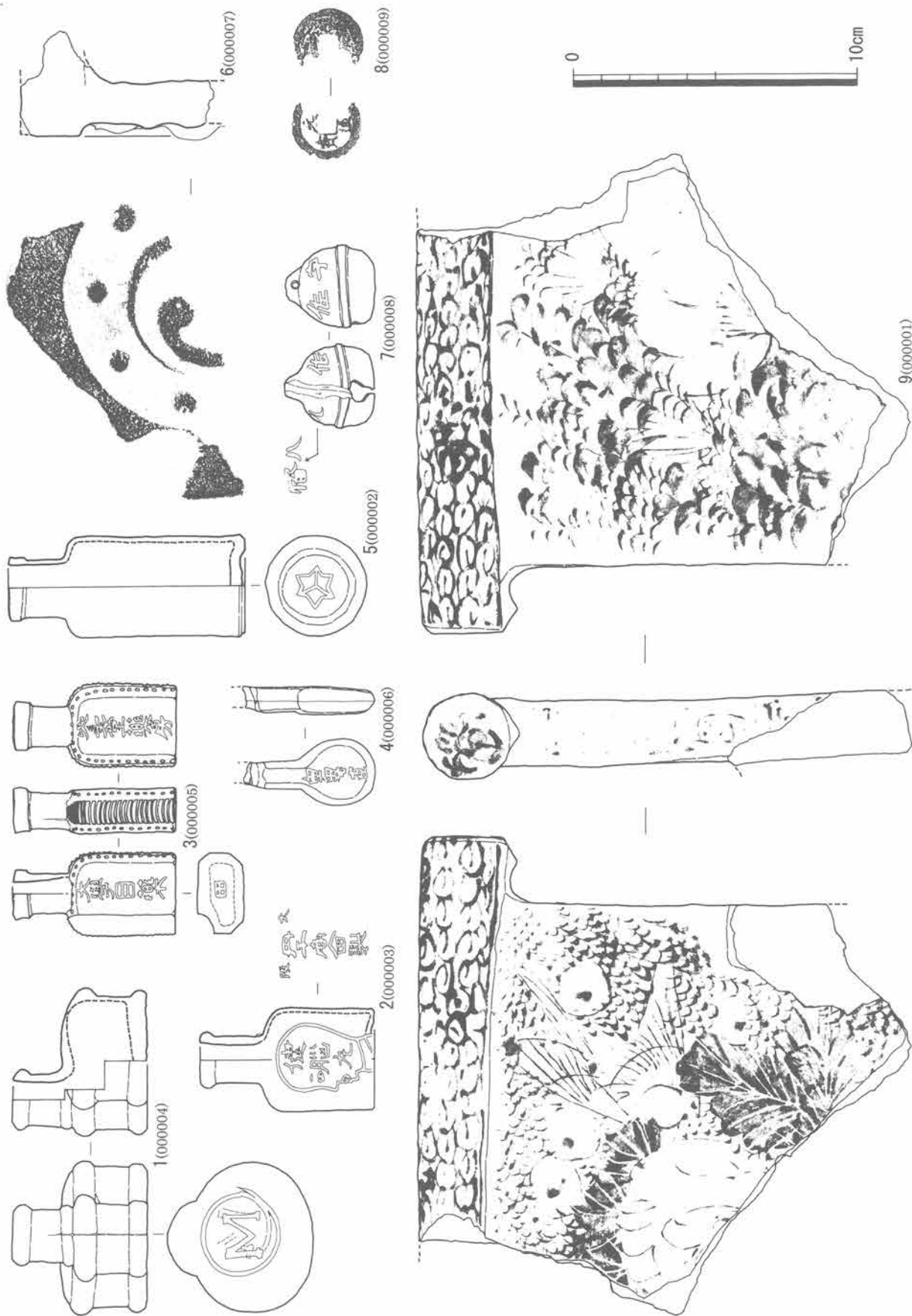
周囲の病院と薬局 では、このような薬瓶はどこからもたらされたものであろうか。調査地の北西約150mの地点、すなわち現県立明善高校の西隣接地（京町）には、明治26年（1893）に設立された久留米市立病院があった（～昭和7年）。また、南西100mには眼科医院（築島町）が存在した。この眼科医院を経営する南琢磨氏の子息が南守雄氏で、同氏は明治40年（1907）に東京医科大学（現東京大学医学部）を卒業後、同42年には久留米市立病院へ婦人科部長として赴任している。その後、明治44年（1911）までに、自宅の眼科医院を増築して婦人科産科を開業している。

一方、薬局については、大正4年（1914）の時点では市内に橋本薬局・水田薬局・高尾薬局・大石薬局の計4軒の名前があがっている。このうち、調査地点に近いのは、三本松町の橋本薬局と通町一丁目の水田薬局で、ともに調査地点から南西に500～600mの距離にある。

しかし、以上の情報から、これらの薬瓶がどこから持ち込まれたものが特定することは難しい。「健脳丸」や「大学目薬」は市販薬であるとはいえ、当時の病院においては、市販薬を処方することも多かったようである。今回の調査地と久留米市立病院、南琢磨・守男氏の眼科・婦人科産科医院とは距離的にも近く、出土した薬瓶の示す年代と開業期間が重なるものと思われるが確証はない。薬瓶に病院名を記したものが出土しない以上、特定は困難であり、結論としては、先述した近隣の病院・薬局のいずれかにおいて処方・購入されるなどして持ち込まれた可能性があると考えられる程度にとどめておきたい。

陶製便器について 第37図9のような陶製便器は、瀬戸では幕末から製作が開始されたが、その成形・絵付けなどに非常な手間がかかるため高価で普及しなかった。ところが明治24年（1891）に濃尾大地震が発生、愛知・岐阜では倒壊した家屋を復旧する際に陶磁製の便器を購入する例が増加した。このため大量に生産されるようになり、全国に普及したという。特にその豊かな装飾性が好まれ、明治末まで商家や旅館などに多くの需要があったようである。しかし陶製のものについては、当資料にも見られるように、表面の貫入が著しく吸水性が高いため、汚水が染み込み決して衛生的とはいえなかった。

一方、明治30年代には現在の便器のように小判形をしたものがつくられ始め、明治38年（1905）には手間のかかる染付に代わって、クロムで青磁一色に発色させた安価な磁器質の便器が登場している。そし



第37図 京限侍屋敷遺跡第8次調査出土遺物実測図 (1/2)

て更には大正から昭和初期にかけて、白い「衛生陶器」の便器が開発されるに至り、やがてその姿を消していったようである。

遺構・遺物と久留米税務署 今回の出土品が示す年代、明治40年代～大正初めといえ、両替町から調査対象地の北隣接地（京町1丁目8-3）に久留米税務署が移転してきたのもこの頃である。明治43年（1910）5月に新築されたこの建物は、昭和20年（1945）8月11日の久留米空襲により全焼するまでこの地にあった。大正11年（1921）に撮影された同建物の写真が残っているが、堂々とした西洋建築である。因みにその後、昭和23年11月に第12師団司令部跡地（諏訪野町）に移転し、現在に至っている。

今回の調査予定範囲は、深さ1.7～2.0m以上もある近現代の掘り込みと整地によってほぼ全面が破壊されていた。掘り込みには、大量の炭化物や焼土とともに、バラスや産廃状の古いコンクリート建築部材片、レンガなどが含まれている。このような状況を考えると、空襲により全焼した久留米税務署建物等の部材や塵芥の処理を実施したのではないかと感強くする。建物跡地で実施した第3次調査地でも、同様の廃棄物を大量に含む層（厚さ40～180cm）が堆積していたという。すなわち建物跡の廃棄物処理は、第3次調査地とその周囲を中心に掘削後、石積み遺構SX1の上面の高さ付近まで埋め立てて埋め殺しし、更地としたのではないだろうか。なお、この大規模な掘り込みに関しては、今回検出したSX1の一角を意識的に避けて実施されている点で注目される。位置的には調査区の北端部で検出されたことから、あるいは調査対象地北側に存在した税務署に関連する施設の一部であるかも知れない。因みに第3次調査対象地内の南半部で確認された地下室は、この税務署建物に伴うものであった可能性があろう。

さて、今回大量の焼土や炭化物、産廃状の建築部材片とともに出土した遺物のうち、陶製便器やガラス瓶の中には、この久留米税務署で使用されたものが含まれているのではないかとと思われる。まず、陶製便器については、高価なものであるだけに、周囲の民家ではなくこのような公共施設に設置されていたと考える方が自然であろう。また、これは想像に過ぎないが、目薬や脳神経薬類は勤務する役人たちが仕事の合間に使用したものかもしれない。更には出土遺物の中に丸善のインク瓶があった。久留米税務署がこの地に移転してくる直前の明治41年（1908）12月には、公文書でのインク使用がようやく認められ、インク需要が増大している。このことから、このインク瓶が税務署で使用されたものであると考えてもそれほど不自然ではないだろう。

おわりに 「降る雪や明治は遠くになりけり」という中村草田男の俳句がある。わずか百年ほど前のことであるにもかかわらず、当時の文化風俗はほぼ絶え、生き残る証言者たちも少ない。このような状況の中では、当時の社会や文化の動態を復元するうえで、考古学的手法は今後ますます重要な役割を果たすことになる。久留米の近代遺跡や遺物についても、文化財としての情報化とその活用について検討する時期が来ているのかもしれない。

（小澤）

■主要参考文献

- 我孫子市教育委員会「あびこ電腦考古博物館」ホームページ <http://kouko.bird-mus.abiko.chiba.jp/>
 INAX「窯のある広場・資料館」ホームページ <http://www.inax.co.jp/>
 大田区立郷土博物館編 1997『トイレの考古学』東京美術。
 熊代昌之 2003『京限侍屋敷遺跡-第3次調査-』久留米市文化財調査報告書第186集、久留米市教育委員会。
 久留米市史編さん委員会 1985『久留米市史』第3巻、久留米市。
 篠原正一 1981『久留米人物誌』久留米人物誌刊行委員会。
 週刊朝日編 1988『値段史年表-明治・大正・昭和-』朝日新聞社。
 筑後日ノ出新聞社編輯局編 1914『久留米市勢一斑』筑後日ノ出新聞社。
 永井久美男 1996『日本出土銭総覧（1996年版）』兵庫埋蔵銭調査会。

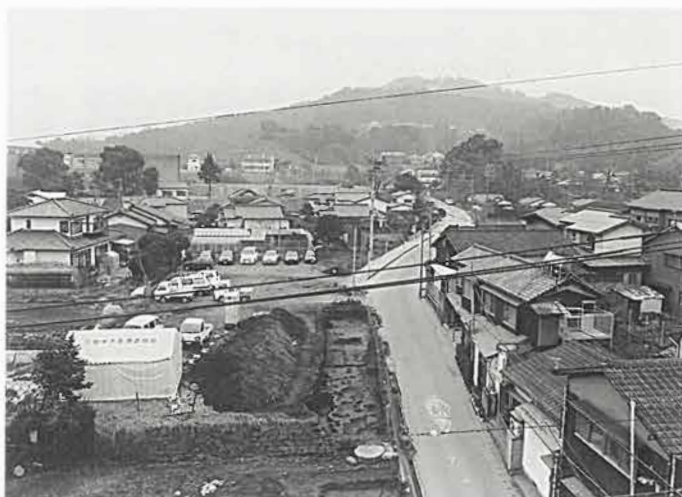
圖 版



(1) 二本木遺跡第13次調査区全景 (北西から)



(2) 二本木遺跡第13次調査区全景 (南東から)



(3) 調査区から高良山を望む (北西から)

図版 2



(1) SD50土層断面 (南東から)



(2) SK35完掘状況 (東から)



(3) SK40土層断面 (東から)



(4) SK40完掘状況 (北から)



(5) SK45完掘状況 (北西から)



(6) SK55土層断面 (北東から)



(7) SK55遺物出土状況 (北西から)



(8) SK55完掘状況 (南東から)



(1) SK60土層断面 (南西から)



(2) SK60焼土検出状況 (南から)



(3) SK60完掘状況 (北東から)



(4) SK70土層断面 (南東から)



(5) SK70完掘状況 (南から)



(6) SK75土層断面 (南から)

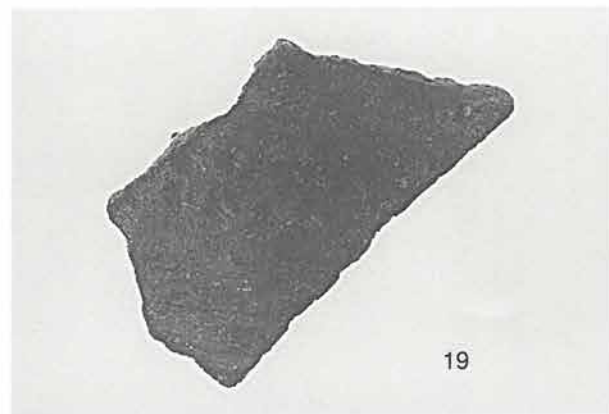
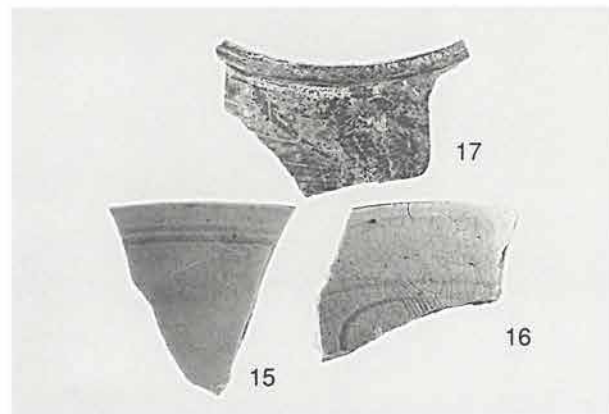
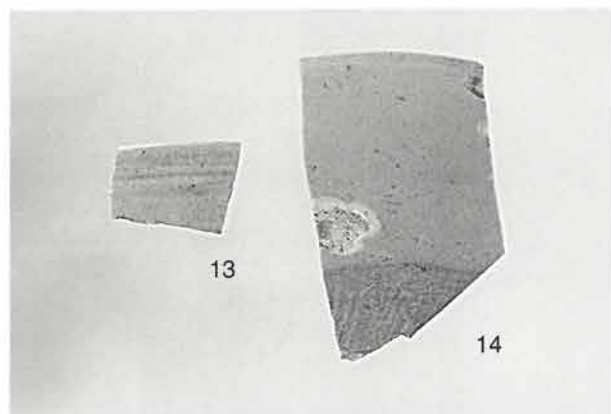
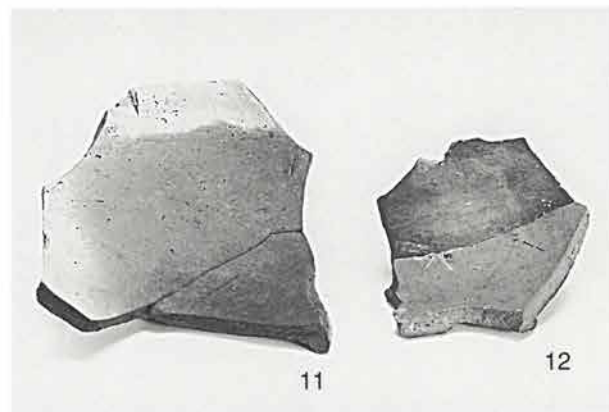
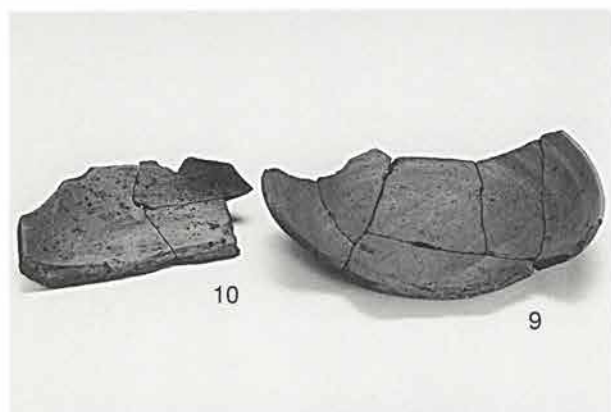
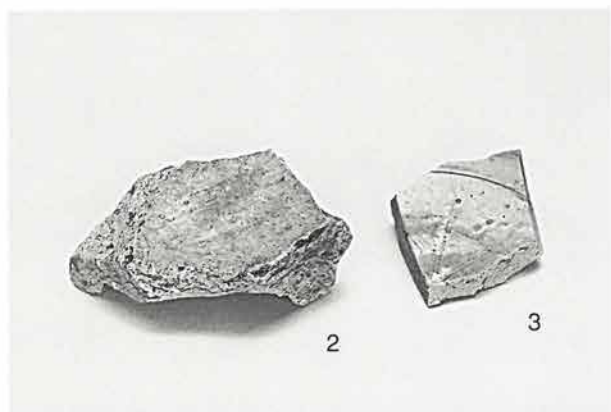


(7) 作業風景① (南東から)

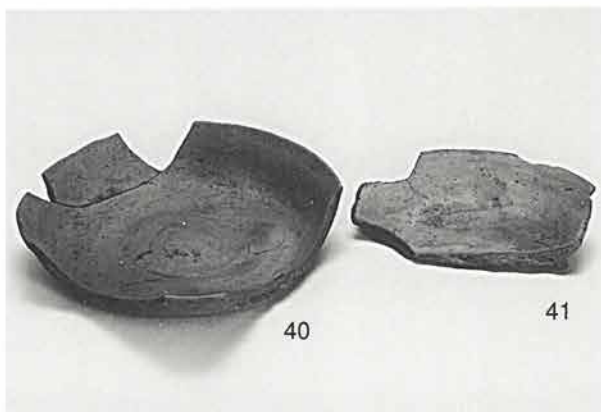
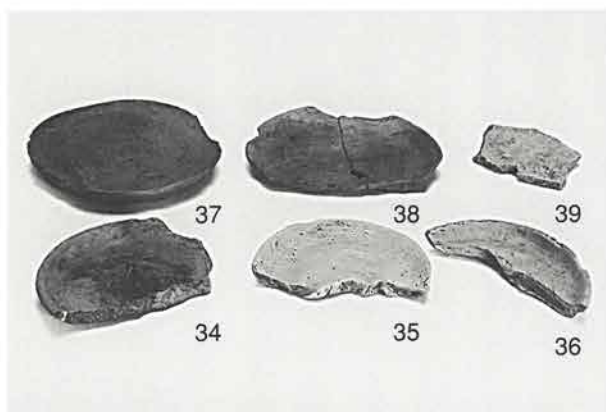
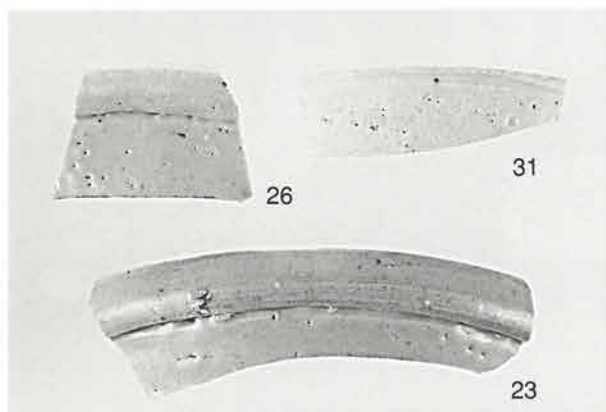
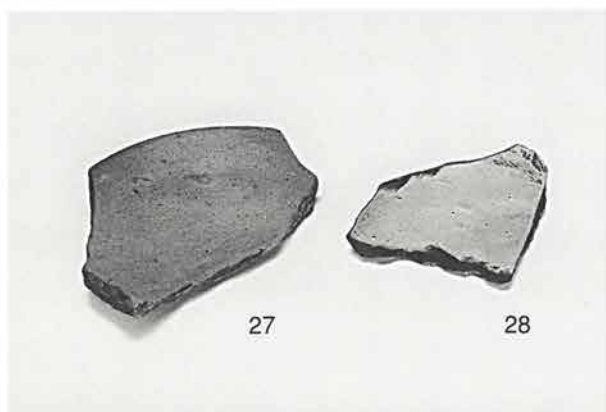
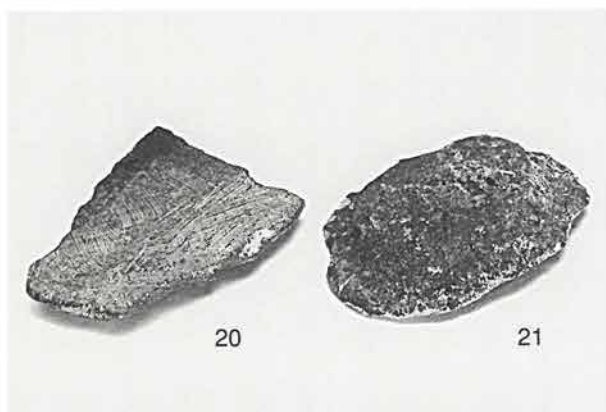


(8) 作業風景② (東から)

図版 4



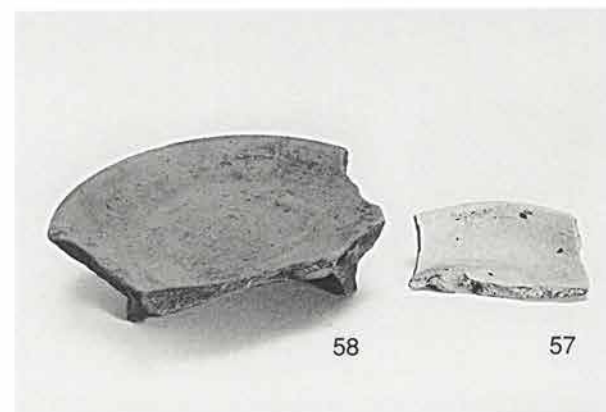
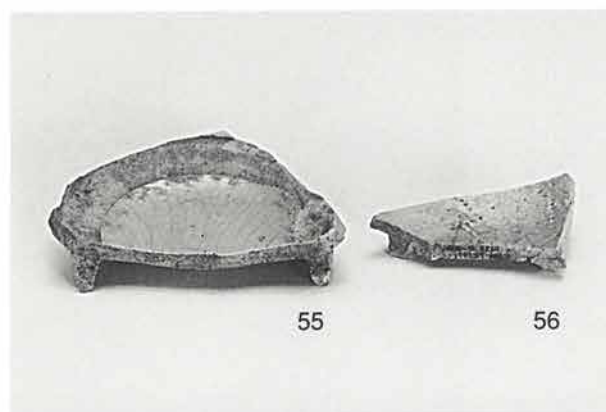
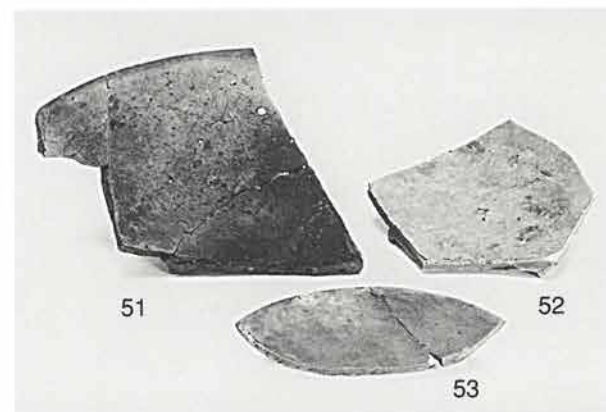
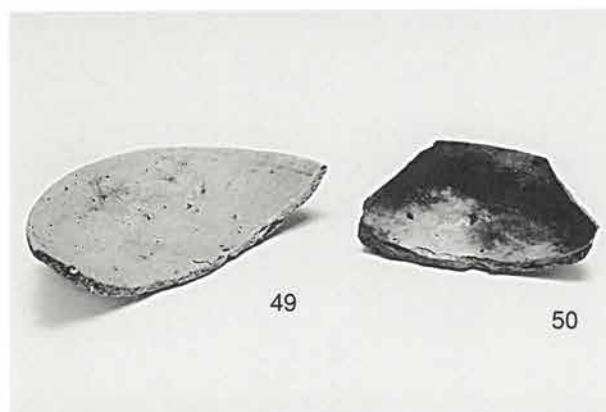
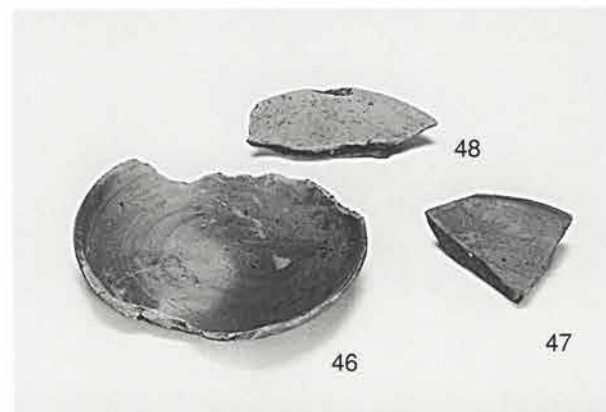
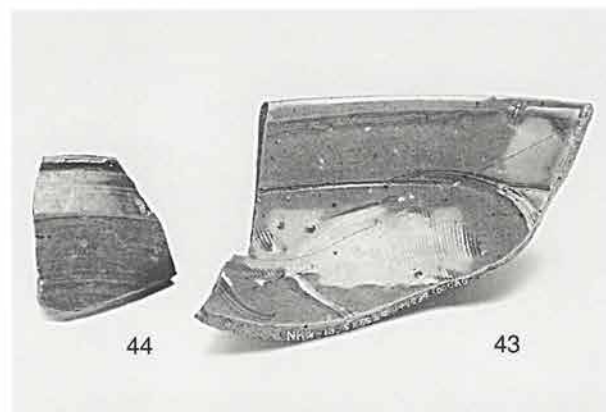
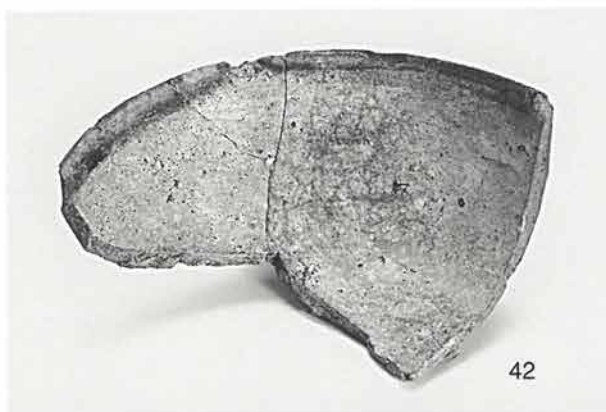
出土遺物①



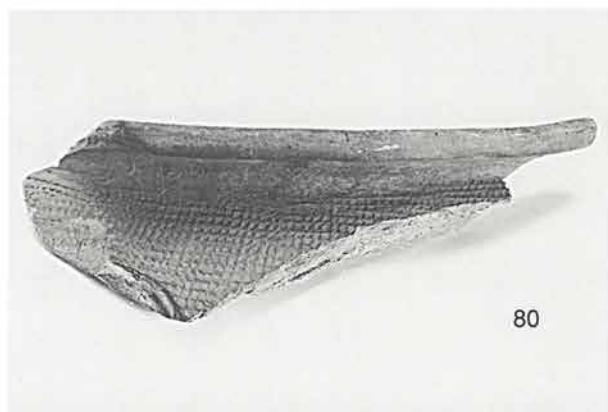
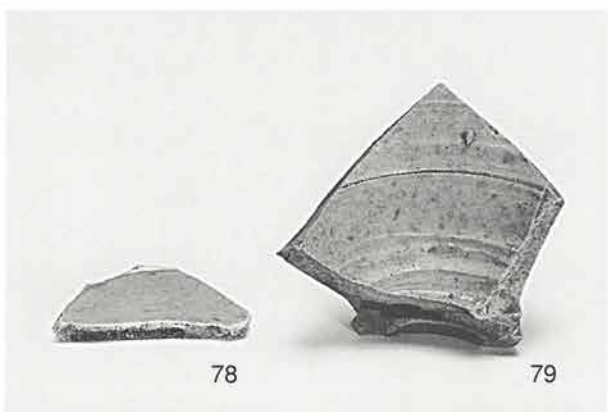
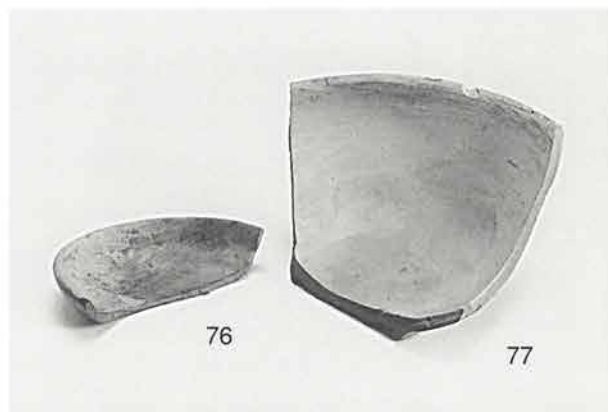
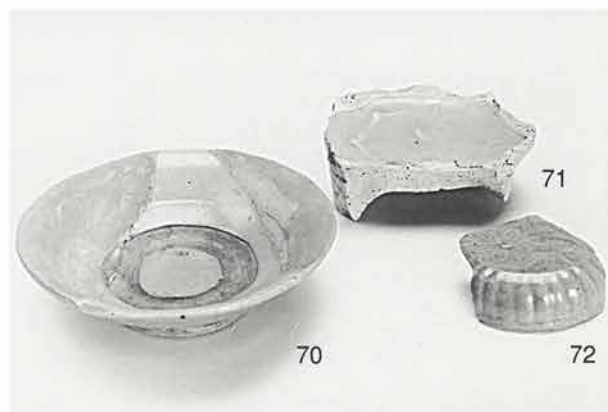
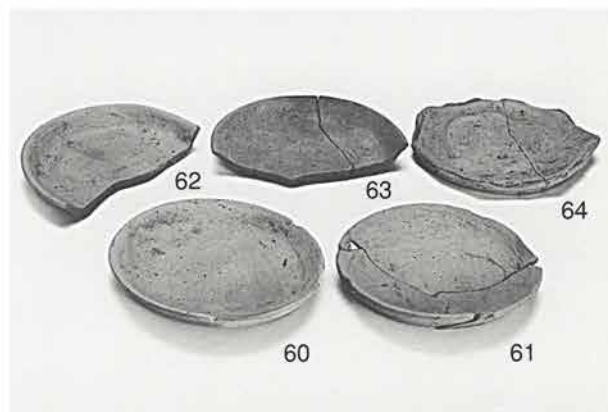
出土遺物②

図版 6

二本木遺跡
(第13次)

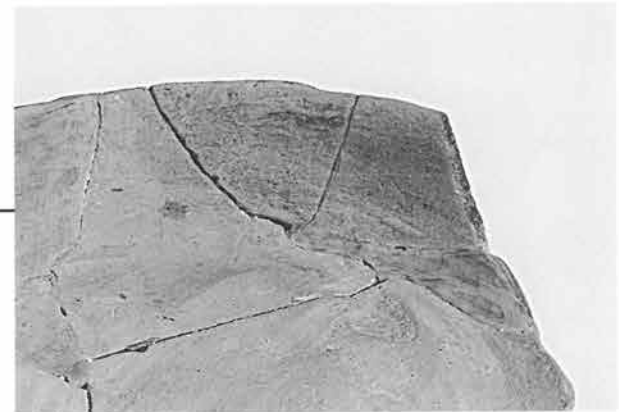


出土遺物③



出土遺物④

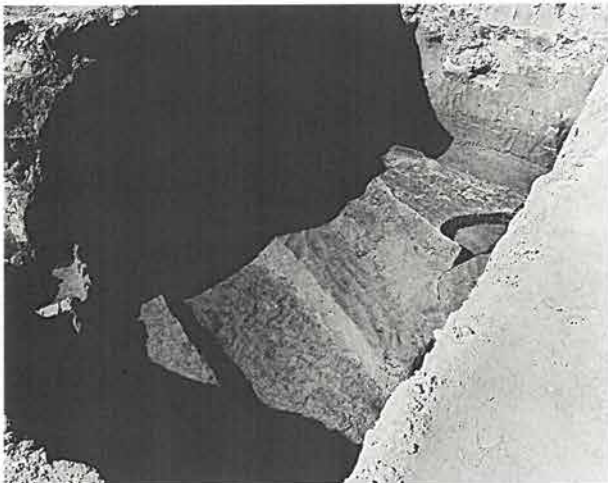
図版 8



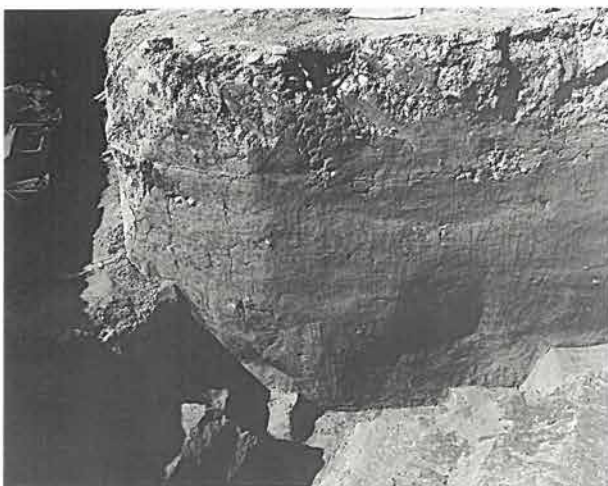
S K70出土の段を有する杯



(1) 赤司定格遺跡第1次調査区全景 (南から)



(2) SD 2・3全景 (東から)

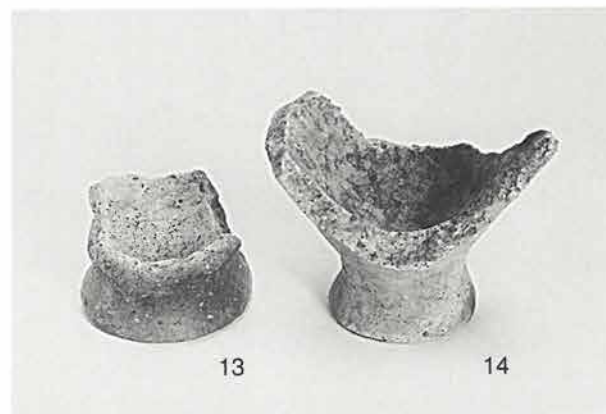
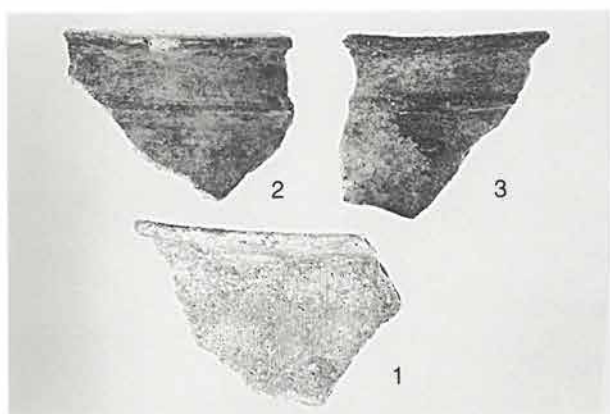


(3) 溝状遺構土層状況 (東から)

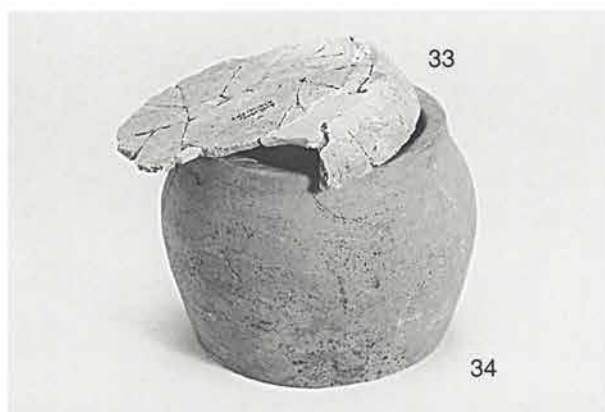
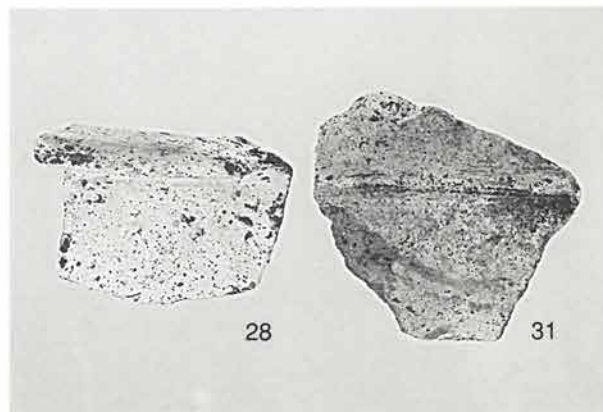
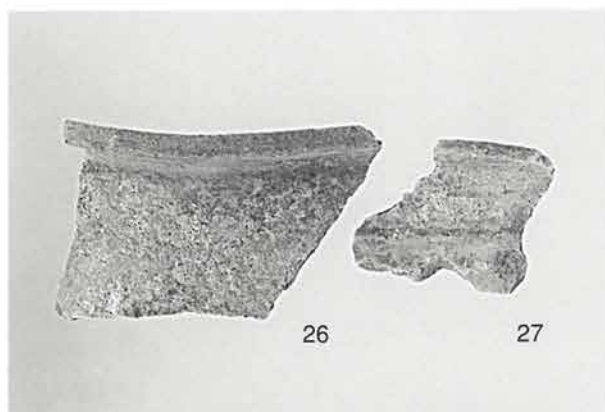
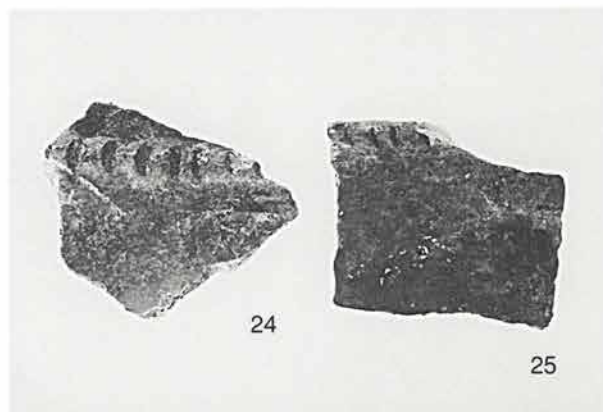
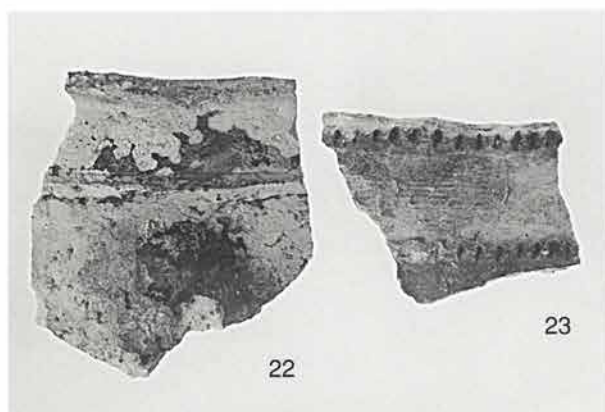
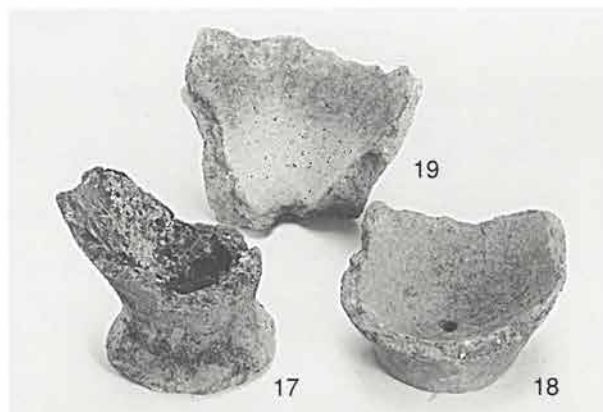
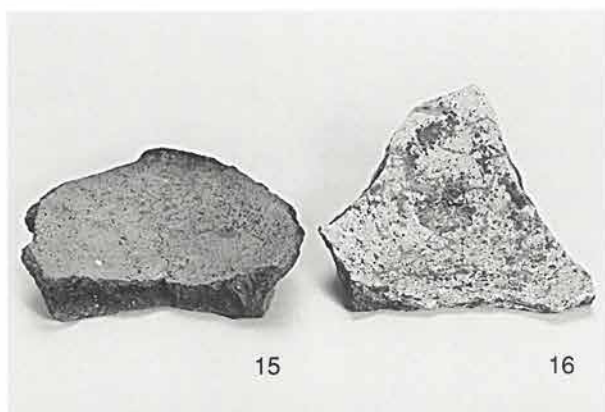


(4) SK 8 胞衣壺出土状況 (南から)

図版10



出土遺物①



出土遺物②

図版12



(1) 北山8号墳現況（東から）



(2) 石室検出状況（東から）



(3) 東西土層堆積状況（南から）



(4) 東西土層盛土堆積状況（南から）



(5) 再構築石室検出状況（南から）



(6) 再構築石室奥壁（南から）



(7) 最上層床面（東から）



(8) 第2床面（西から）



(1) 初期・再構築石室検出状況（南から）



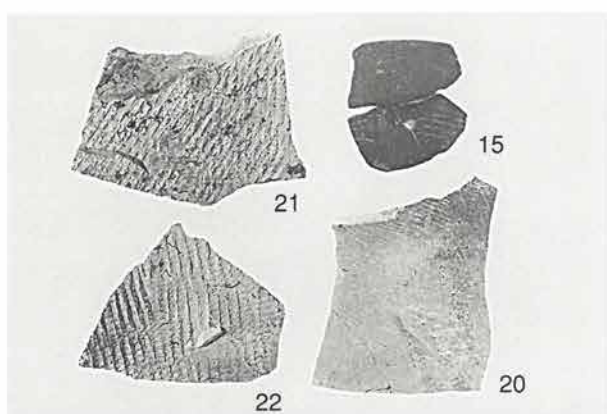
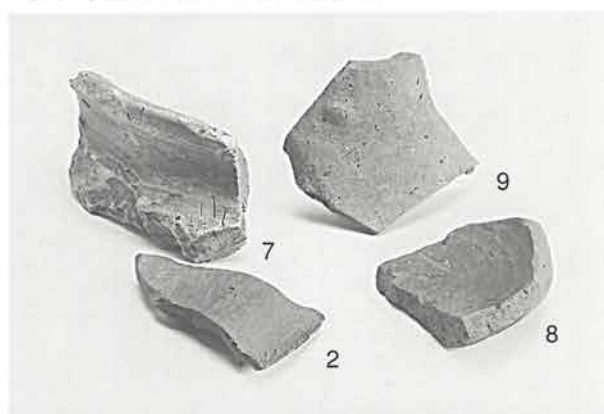
(2) 初期石室奥壁周辺（西から）



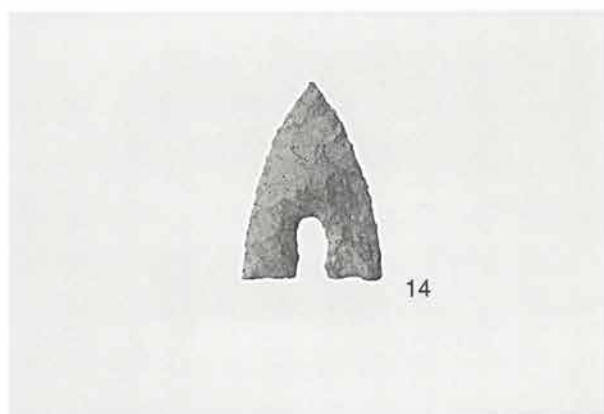
(3) 初期石室検出状況（西から）



(4) 初期石室袖石付近（南から）



(5) 出土遺物



図版14



(1) 1号墳調査前風景（西から）



(2) 北トレンチ土層堆積状況（西から）



(3) 東トレンチ土層堆積状況（北から）



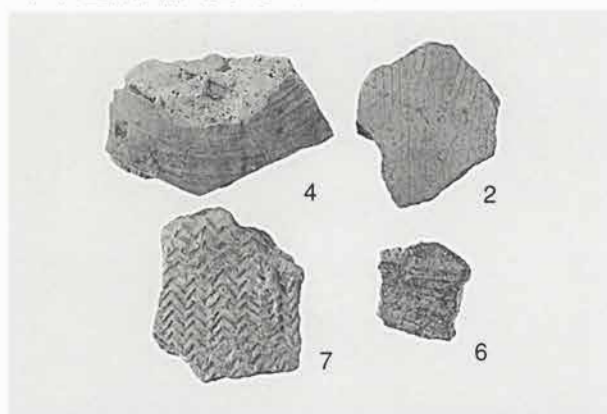
(4) 南トレンチ土層堆積状況（西から）



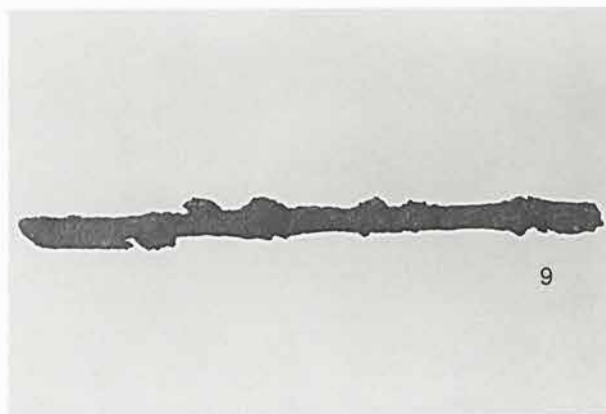
(5) 主体部検出状況①（西から）



(6) 主体部検出状況②（北から）



(7) 出土遺物



9



(1) 調査区全景 (南西から)



(2) SX1 調査風景 (南西から)



(3) SX1 全景 (南から)



(4) SX1 南東隅角の状況 (南東から)



(5) SX1 裏込め状況 (南東から)



(6) 調査区西壁面のSX1付近土層 (南東から)

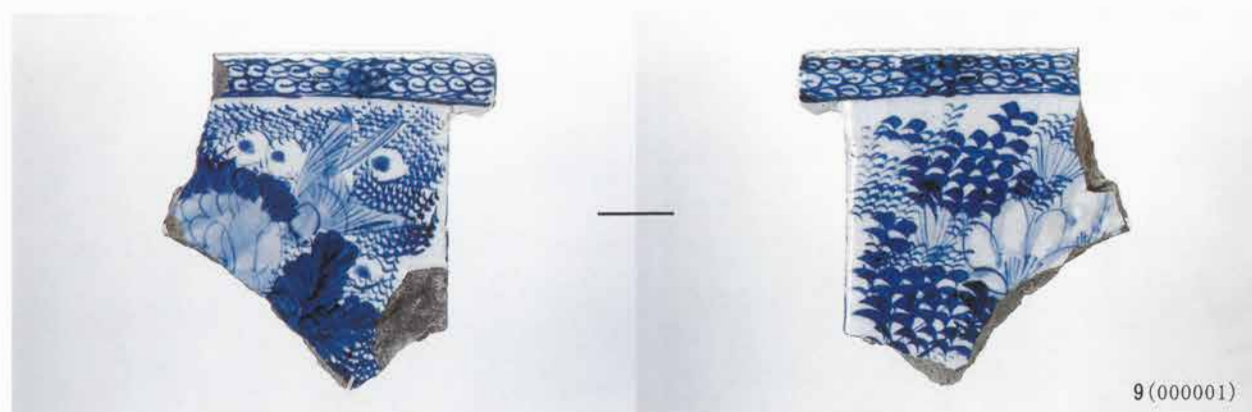
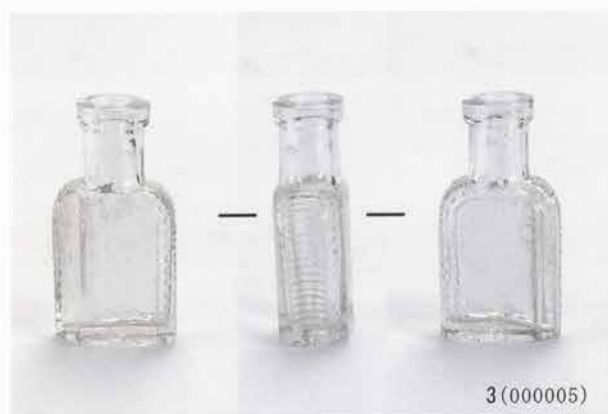
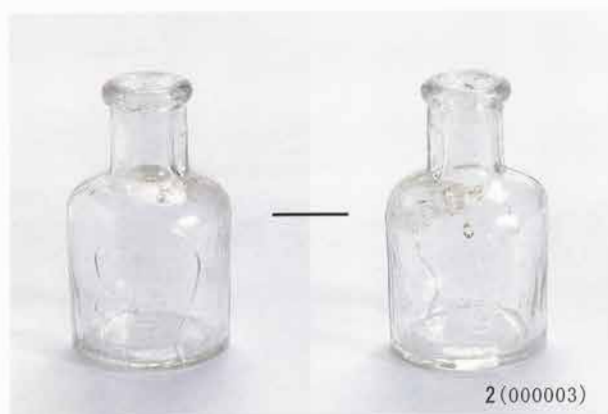


(7) SX1 全景 (北東から)



(8) 西トレンチ現代遺構検出状況 (南西から)

図版16



出土遺物

報告書抄録(1)

ふりがな	くるめしまいぞうぶんかざいちょうさしゅうほう 9
書名	久留米市埋蔵文化財調査集報IX
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第253集
編著者名	白木 守・本田岳秋・小澤太郎・熊代昌之・原田志保
編集機関	久留米市 文化観光部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel. 0942-30-9225 FAX 0942-30-9718 Email: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	平成19年(2007)8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
にほんぎいせき 二本木遺跡 だい13じちょうさ 第13次調査	くるめし 久留米市 みいまちあざいわいごう 御井町字岩井川	40203	030284	33° 18' 32"	130° 33' 17"	19980119 ～19980203	94m ²	交差点改良事業
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
二本木遺跡 第13次調査	集落跡	平安 ～ 鎌倉	溝	3条	土師器、黒色土器、瓦 器、輸入陶磁器、東播 系捏鉢、石鍋			12世紀代を主体とする溝 や土坑を検出。
		近現代	土坑 ビット	9基				
			溝	2条				
			井戸	1基				
要約								
調査地は筑後国府IV期国庁の東方400mに位置する。検出された遺構は概ね12世紀代に収まるものであり、遺構の帰属時期や遺跡の立地、出土遺物などから判断すれば、今回の調査で検出した遺構・遺物は、当然のことながらIV期国庁と深く関わるものであり、国庁に勤務した官人の居住域が一帯に展開していたものと考えられる。								
土木工事の届出日		平成9年10月1日 (9道第521号)		遺物の発見届日		平成10年2月4日 (9文財第7-7-2号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
あかじじょうがくいせき 赤司定格遺跡 だい1じちょうさ 第1次調査	くるめし 久留米市 きたのまちあかじじょうがく 北野町赤司字定格	40203	—	33° 21' 34"	130° 36' 30"	20051011 ～20051026	50m ²	専用住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
赤司定格遺跡 第1次調査	集落跡	弥生	溝	3条	縄文土器、弥生土器、 石庖丁、メノウ石器			底部外面に「*」印を施した弥生土器の壺が出土。
			土坑	1基				
			井戸	1基				
		中世	溝	1条	須恵器、輸入陶磁器			
		近世	溝	1条	胞衣壺・蓋、近世陶磁器、クスリ瓶			
			胞衣壺	2基				
要約								
トレンチ状に調査区を設定し、弥生時代前期～中期の溝状遺構などを検出する。同遺跡の第2次調査地点および赤司一区公民館遺跡とは異なる様相を示す。								
土木工事の届出日		平成17年10月7日		遺物の発見届日		平成17年10月27日 (17文財第810号)		

*北緯・東経は「世界測地系」に基づく数値。

報告書抄録(2)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査の原因
			市町村	遺跡番号					
きたやまこふんぐん 北山古墳群 だい3 じちょうさ 第3次調査	くるめし 久留米市 あらきまちしろくちあざきたやま 荒木町白口字北山	40203	—	33° 16′ 59″	130° 30′ 11″	20060804 ～20061225	905㎡	樹木抜根	
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
北山古墳群 第3次調査	墳墓	古 墳	古墳	1基	須恵器、土師器、瓦器、 近世陶磁器、石鏃		崩壊した石室を同一地 に規模を縮小し再構築し た石室を検出。		
要 約									
樹木抜根に伴い、古墳を1基調査。調査した古墳は、西半部をブロック塀により破壊され、周囲も宅地造成時の削平が著しく、墳形・墳丘規模ともに確認できなかった。石室は、天井石を含む上半部を失うものの3面の床を検出し、さらに一度崩壊した石室を再び同一地に再構築している状況が確認された。									
土木工事の届出日		平成18年6月5日			遺物の発見届日		平成18年12月28日 (18文財第1044号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査の原因
		市町村	遺跡番号					
めおとぎこふんぐん 夫婦木古墳群 だい1じちょうさ 第1次調査	くるめし 久留米市 くさのまちくさのあざてんじんやま 草野町草野字天神山	40203	—	33° 18′ 51″	130° 39′ 58″	20070205 ～20070227	30㎡	公園造成
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
夫婦木古墳群 第1次調査	散布地	縄 文	古墳	1 基	縄文土器、石鏃 土師器、須恵器、鉄鏃		竪穴系横口式石室もし くは石棺系石室を1基検 出。	
	墳墓	古 墳						
要 約								
公園造成に伴う調査によって、古墳を1基調査。墳丘および墳形は削平により不明。主体部は、上半および西半部を削平されているものの竪穴系横口式石室もしくは石棺系の石室であると考えられる。主体部には、赤色顔料が塗布されており、床面より鉄鏃が1点出土している。								
土木工事の届出日		平成18年10月2日 (18み第81号)			遺物の発見届日		平成19年3月2日 (18文財第1304号)	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査の原因
			市町村	遺跡番号					
きょうぐまさむらいやしきいせき 京限侍屋敷遺跡 だい8じちょうさ 第8次調査	くるめし 久留米市 じょうなんまち 城南町	40203	—	33° 19′ 10″	130° 30′ 23″	20070507 ～20070511	60㎡	金融機関支店建 物建設	
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項		
京限侍屋敷遺跡 第8次調査	武家屋敷	近世～	土坑 石積み遺構	2基 1基	瓦、ガラス瓶、陶製便 器、土鈴		近現代の掘り込みと、そ こからガラス瓶を主体と する遺物が出土した。		
要 約									
調査地北端部で近代のものと思われる石積みを検出した。その周囲は近現代の掘り込みにより大きく破壊されていたが、この掘り込み中からは明治末～大正にかけてのガラス瓶や陶器類が出土した。これらはあるいは、明治43年～昭和20年まで調査地の北隣接地に存在した久留米税務署に関係するものである可能性がある。なお大規模な掘り込みは、久留米空襲による塵芥を処理した痕跡と考えられる。									
土木工事の届出日		平成19年3月26日			遺物の発見届日		平成19年5月15日 (18文財第172号)		

*北緯・東経は「世界測地系」に基づく数値。

久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅹ

【久留米市文化財調査報告書 第253集】

平成19年8月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市
文化観光部 文化財保護課

印刷 永松印刷
久留米市中央町20-22

